

第6章 西地区の調査

第1節 位置・概要

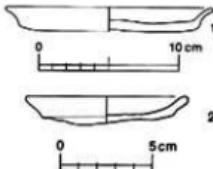
調査対象地の西側の地域で約1,550m²を調査した。物件(喫茶店)の移築の都合で、2年次にわたって調査を分割して行った。昭和58年度調査部分では方形の溝を巡らして墓域を区画した中世墓で代表される平安時代末～鎌倉時代の遺構が検出されている。遺構は、建物跡・墓・溝・土壌を確認している。建物跡を切って墓が築かれており、また墓同士でも切り合い関係にある。ただ、方形に区画された中世墓を除いて出土遺物が少ないことが惜しまれる。

昭和59年度調査部分では、建物の基礎によって遺構面は削平されており、建物跡のピットも検出されなかった。昭和58年度調査部分の西側では数基のピットが確認されただけで、遺構は確認されなかった。水田に利用されていたようで、稲株の痕跡を確認したにとどまった。西端では、溝・ピットなどが検出されているが、近世まで下るものと思われる。西寄り南側の微高地で奈良時代の遺構が集中して確認された。土壌・ピットで性格は明らかでない。

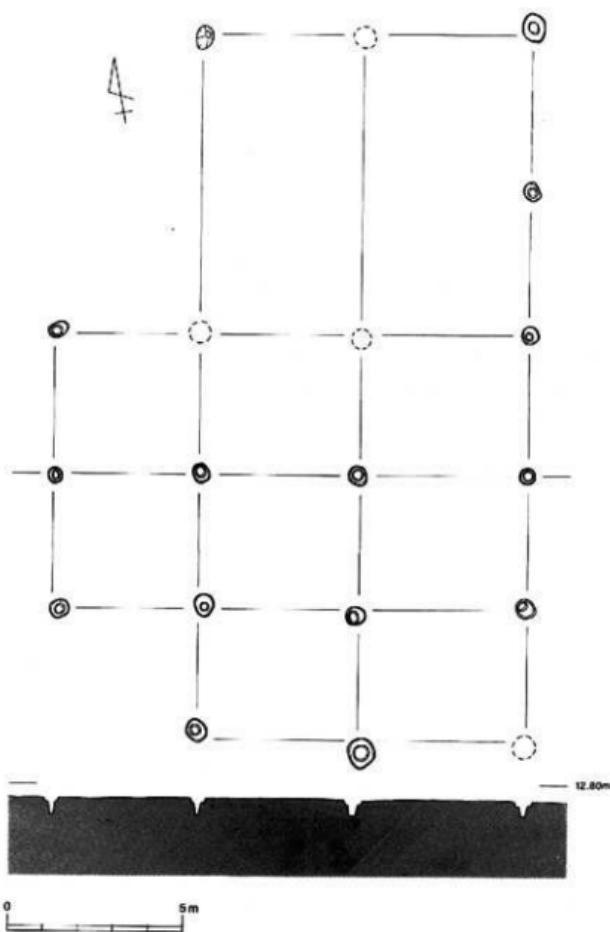
西地区は、約1,550m²を調査したが、東側の平安時代末～鎌倉時代の遺構と南寄りの奈良時代の遺構、そして他の近世の遺構に分けられる。

第2節 建物跡

掘立柱建物で中世墓（方形周溝墓）、土壌1・2と重複しているため、すべての柱穴を確認できなかったが、5間×2間の南北に長い建物で、中心の2間が西へ張出している。主軸方位はN°10Eで、梁間方向940cm、桁行方向1,970cmである。梁間の平均間隔は470cmで張出部は420cmである。桁行の平均間隔は394cmで、各柱間に大きな相違はない。柱は掘方と柱痕の区別のついたものが多く、覆土は淡灰色で、掘方は径38cm～62cm、深さ60cm、柱痕は径25cm～35cmである。柱の深さから見るとかなり削平を受けているようである。年代を示すものとして遺物が、2基のピットから土師質の小皿2点が出土している。共に無調整の底部と回転ナデの体部を持つ平安時代後期から鎌倉時代の時期と見られる。また、方形周溝墓や土壌によって切込まれているが、覆土の土色も似かっており、墓が掘られる直前のほぼ同時期の建物と思われ、平安時代後半と考えている。西地区では本建物1棟のみであるが、中央地区検出の建物と方向性が合致するため、一連の建物群としてとらえられるのではないだろうか。



第156図 ピット出土土器実測図



第157図 建物跡実測図

第3節 中世墓（方形周溝墓）

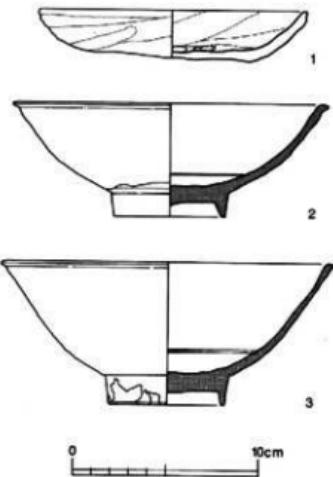
墓と思われる土壙は西調査地区の中央地区に接した地点に集中して確認されている。このうち明確に墓壙であると断定出来るのは方形周溝をもつ1基である。

中世墓（方形周溝墓）は掘立柱建物の北を切って作られており、土壙によって切られている。本遺構を方形周溝墓と呼称することに用語上問題もあるが、形態は弥生時代に多く見られる方形周溝墓とまったく同じである。溝外縁の大きさは南北550cm、東西500cmで深さは40cm～65cmのU字溝で底に若干の凹凸が見られる。溝の堆積は淡灰色砂質土で周溝の外から内側への流込みがやや強く見られ、石・土器片の流込みまたは投込みが北半分に集中している。そのうえ、石の多くは上層に含まれており、土器には完形品は見られず、すべて破片で、溝に流込む以前に破損していたようである。

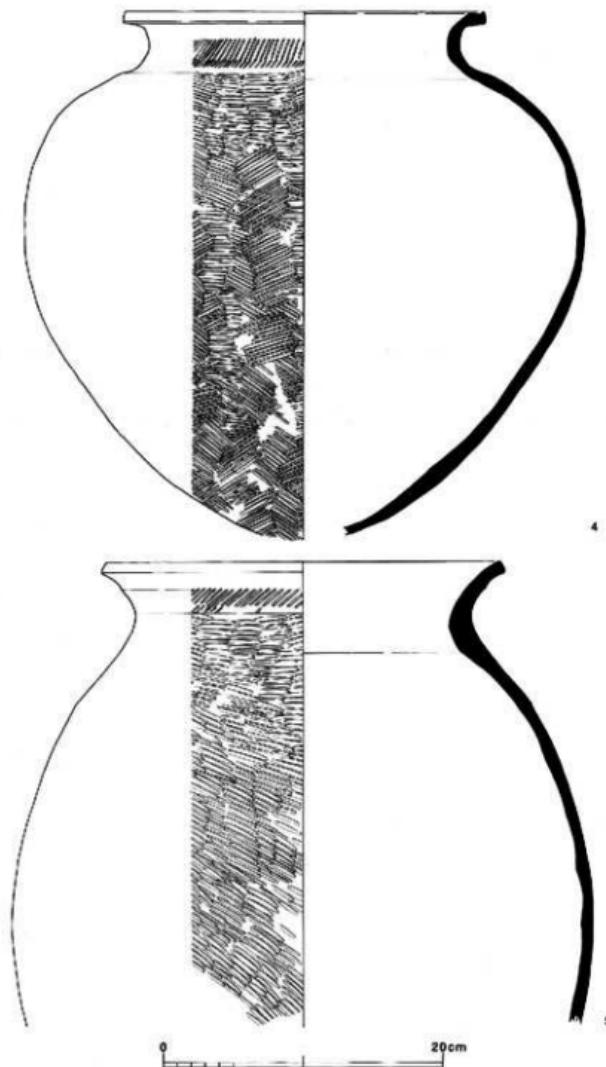
溝に囲まれた墓域は南北420cm、東西300cmの長方形で、墳丘を示すような盛土はまったく認められず、むしろ全体としてはかなり削平されているようである。主体部は墓域の北にやや片寄った位置にN72°Wと南・北の溝にはば平行させて掘込み、幅は60cm、長さ200cm、深さ60cmのはば長方形の墓壙である。墓壙の形から見ると木棺であると考えられるが、土層からは木棺を示す痕跡はまったく見られず、すべて淡灰色砂質土によって覆われていた。このことは遺構の掘込まれた面が木質や有機質の残りにくい砂層であることも関係しているのかも知れない。墓壙内は底面が平坦なため箱形の木棺で180～190

cm×50cmあまりの大きさと考えられ、白磁碗2個、土師器皿1個が墓壙の中心よりやや東に片寄った床面に副葬された状態のまま出土しており、被葬者の胸のあたりに副葬していたと考えられ、被葬者は東枕に葬られたと思われる。

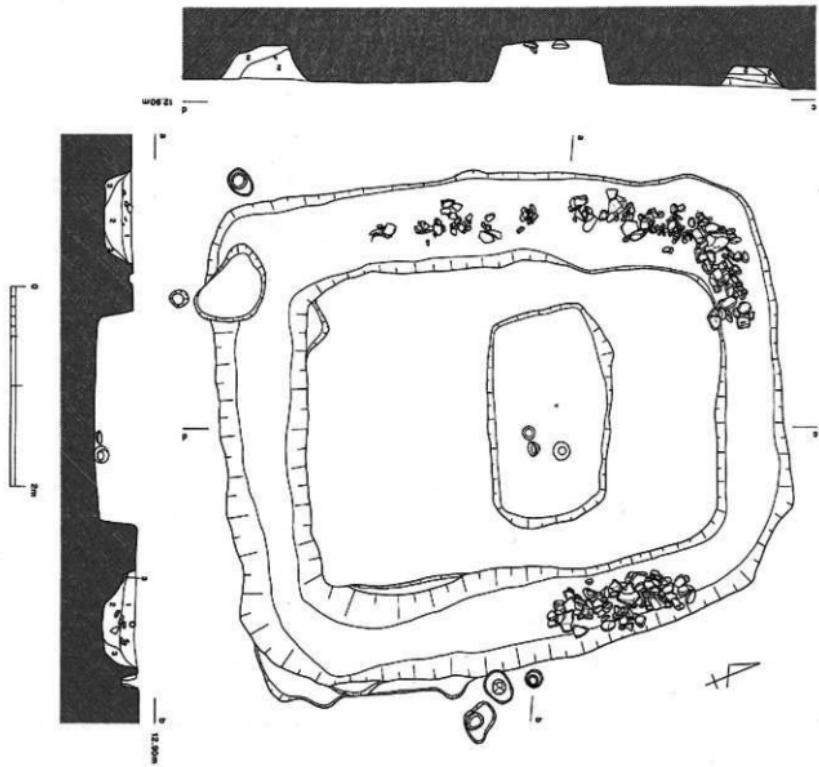
方形周溝墓から出土した遺物は、周溝と主体部土壙の2ヶ所から出土しており、主体部の副葬品は3点ともに完形品であるが、周溝より出土した遺物は河原石と混在して出土したもので完形品ではなく、すべて破片である。しかし内容は本遺跡の中でも、他の遺構から出土していない特異な遺物が多く見られる。東播磨系須恵器の体部一面に叩き目をもつ大型甕が2点、同じく肥厚しない口縁をもつ捏鉢1点、高台部が完全に

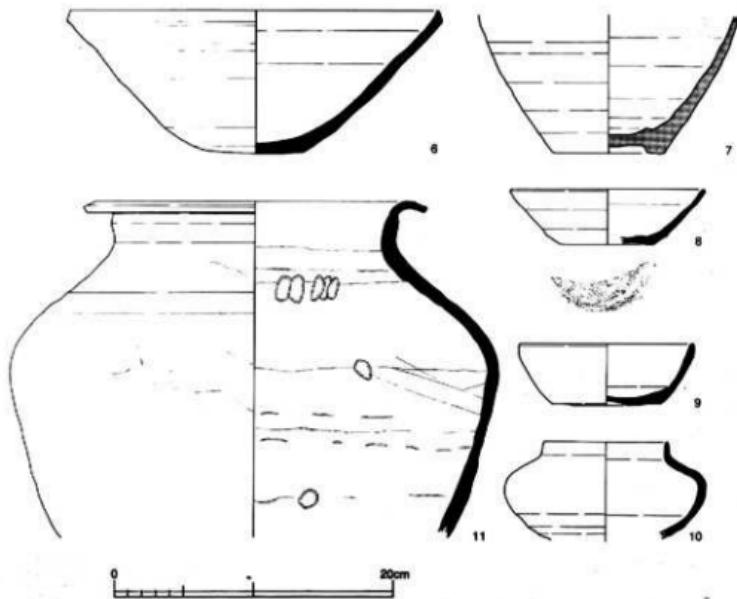


第158図 中世墓主体部土器実測図



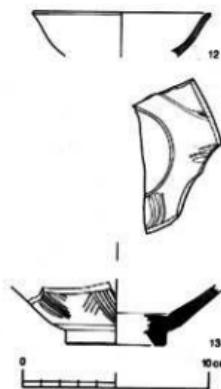
第159図 中世墓溝内出土土器実測図(1)





第161図 中世墓溝内出土土器実測図(2)

消滅した糸切り底の備前系の椀1点、一見常滑系と思われる胴部のよく張った褐色の壺が1点、褐釉の四耳壺底部も出土している。このように出土遺物が他から出土していない品を含む点から見ると、通常の破損による廃棄ではなく、本遭跡の埋葬儀式に使用した後、故意に破損させて周溝へ投棄された可能性や、周溝に囲まれた墓域に供獻されていたものが破損転入した可能性も考えなければならない。だが出土遺物の中に古墳時代と考えられる須恵器の短頸壺や奈良時代の須恵器の杯などが出土しており、遭構の年代が副葬品から見ると平安時代末から鎌倉時代と考えられるため、他の遺物と共に別の場所から投棄された可能性も否定できない。



第162図 中世墓溝内出土土器実測図(3)

第4節 溝

当地区では3条の溝状遺構が検出されているが、水路のようなものではなく、北は擾乱で消滅、南は途切れている。

溝1 幅30cm、残存する長さ150cm、深さ15cm、方位はN9°E、覆土は淡灰色砂質土であるため土壤と同時と推定できる。遺物は出土していない。

溝2 幅90cm、残存する長さ260cm、深さ25cm、溝1とは50~60cmではほぼ平行しており、覆土は同じ淡灰色砂質土である。遺物は出土していない。

溝3 調査地南端で確認している。幅40cm、長さ200cmを測る。覆土は淡灰色砂質土である。遺物は出土していない。

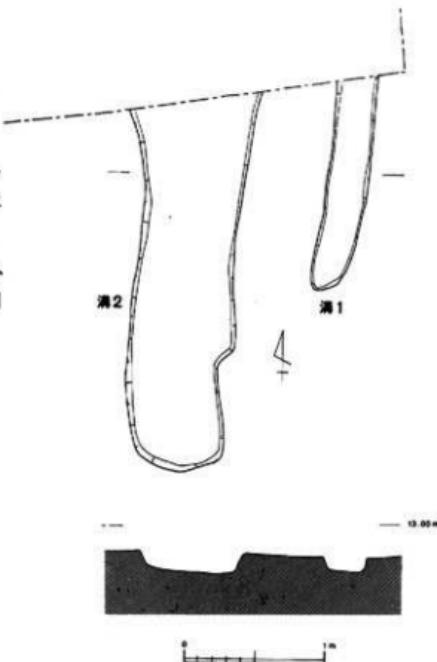
第5節 土壙

西地区においては掘立柱建物、方形周溝墓をのぞくと多数の土壙が検出されているが、柱穴状の小土壙をのぞくと1.5m以上の径をもつ隅丸方形の土壙が4基と1m前後の土壙が5基、不定形な集石土壙が1基検出されている。これらのうち隅円方形に近い土壙は出土遺物から性格を推定できないが、形態からは土壙墓である可能性を考えられ、一部重複して掘られているが、覆土等からみてきわめて短期間に前後して掘られたもので、方形周溝墓を含む墓域であると思われる。

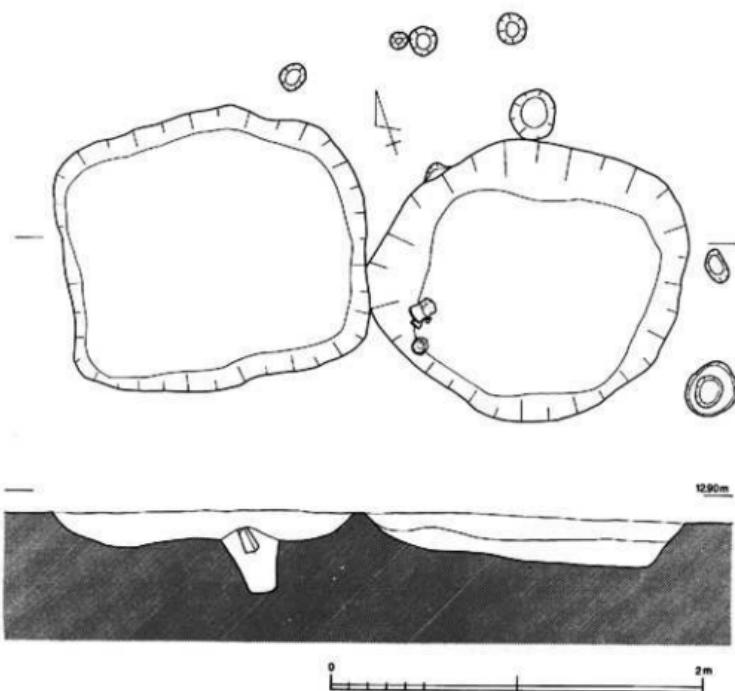
土壙1 方形周溝を切込んで掘られており隅円の長方形で、長径161cm、短径150cmあり、浅い鍋底状の底をもつ深さは最も深い所でも13cmしかなく、削平されていると考えられ、主軸方向はN78°W。覆土は淡灰色砂質土で、一面に10cm~30cmあまりの河原石が雜然と散っている。

遺物は須恵器・土師器・瓦器で、土師器は3点出土し、鍋・甕と皿口縁部が各1点出土している。瓦器は檐で高台部が出土している。退化した高台である。須恵器は甕・こね鉢・椀が出土しており、魚住焼の製品が含まれる。

土壙2 方形周溝を掘込んでおり、土壙1の東に接して位置する。隅円方形で170cm×145cm、深さ22cm、鍋底状の底をもち、主軸方向はN73°W。覆土は淡灰色砂質土で10~20cmの河原石を数個出土しているが、方形周溝を切込んだ折に混入した可能性もある。



第163図 溝1・2実測図

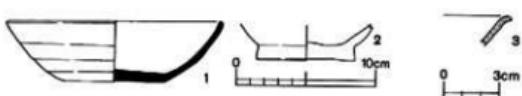


第164図 土壌1・2実測図

遺物は須恵器・土師器・白磁が出土しており、総数94点を数える。須恵器はこね鉢・椀・皿で、椀は第165図(1)

は備前系の椀である。白磁は端反り口縁の椀の口縁部である。土師器は、甕・鍋・皿と小片ばかりで、皿が30点で他は甕・鍋である。

土壌3 方形周溝の東に接しており10~30cmあまりの河原石が平面的に雜然と集中しているが、土壌の底は深さ18cmしかなく、石も重複はほとんどしていない。土壌の外形は不定形で230cm×150cmの長方形土壌の南に突出部が付いているように見える。遺物は出土していない。



第165図 土壌2土器実測図

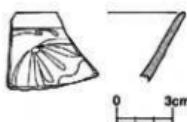
土壇4 隅円の長方形を呈し、底はほぼ平らで、長径192cm、短径150cm、深さ15cm、主軸方向はN 12° E。覆土は淡灰色砂質土で、遺物は須恵器壺の胴部2点と土師器32点が出土している。土師器は古式土師器と平安時代の両時期がある。古式土師器は、壺・甕・瓶がある。瓶は尖底のもので焼成前に穿孔している。壺は折り曲げて整形した口縁を持つもので外面右上りのタタキ成形である。造構の時期である平安時代末の土師器の壺と鍋で、皿は認められない。

土壇5 土壇3の東に接しており、隅円の長方形で、長径200cm、短径155cm、底は鍋底状になっており、最も深い所で21cm、主軸方向はS 85° E。覆土は淡灰色砂質土で、遺物は瓦器・青磁・須恵器が出土しており、瓦器は羽釜口縁部で口径30cm前後で残存高6.5cmの大形品の破片である。青磁は竜泉窯の製品で内面に草花文を描いている。須恵器は壺・こね鉢・碗がある。甕・こね鉢は魚住の製品で、碗には備前系の破片が含まれている。

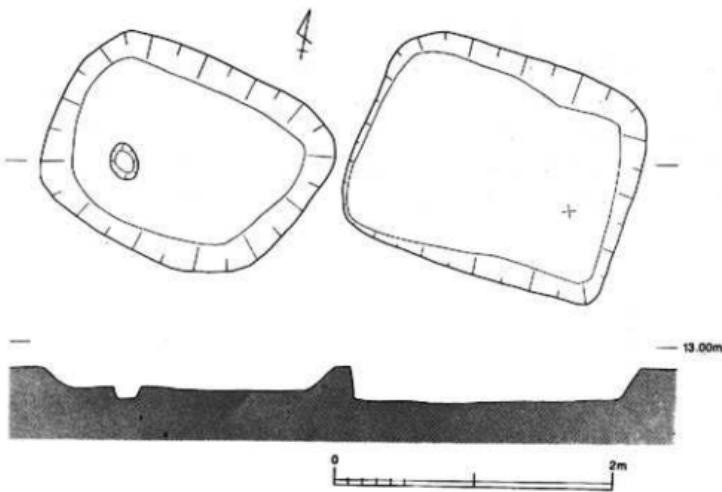
土壇6 隅円の方形に近く、径は100cm×105cm、深さは12cm。覆土は淡灰色砂質土、出土遺物は総数191点出土しており、石器1点・須恵器27点以外は全て土師器である。石器は砥石の破片で割れたもので荒砥に近いものである。須恵器



第166図 土壇3実測図



第167図 土壇5陶磁器



第168図 土壌4・5実測図

には魚住焼の裏胴部の小片があり細かいタタキ目が見られる。土師器は鍋・甕・皿があり、口縁部が19点あるが全て小片で図化出来ない。

土壌7 一見溝状の土壌で長径214cm、幅45cm、深さ11cm、不規則な凹凸があり、外形は舟底状になっているが、いわゆる舟底状土壌とは別のものである。主軸はN22°E。覆土は淡灰色砂質土。遺物は総数38点あり、須恵器2点以外は土師器で、口縁部が3点出土している。器種は鍋2点の他は皿である。

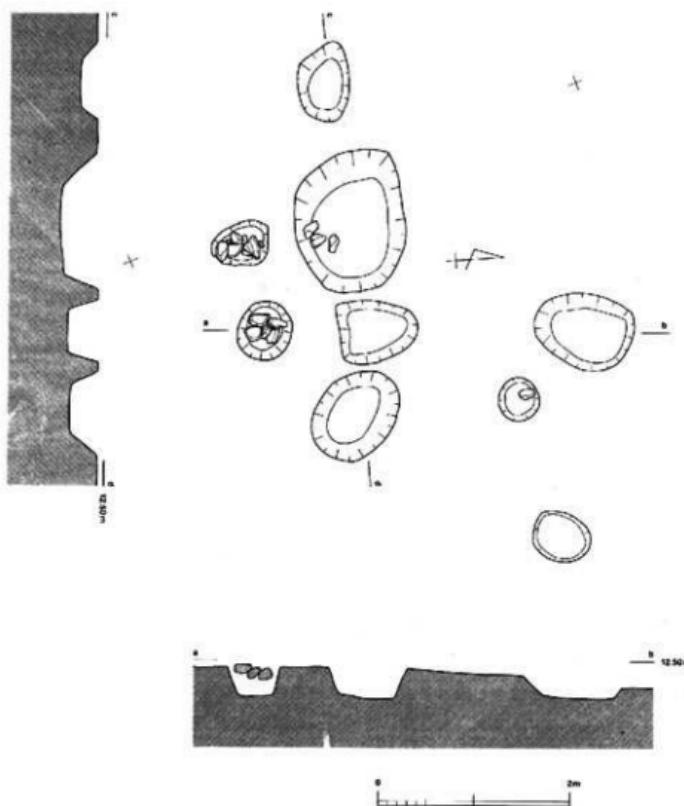
土壌8 隅円の方形で45cm×53cmと小型の土壌である。埋土は他と同じく淡灰色砂質土である。

土壌9 隅円の方形であるが、105cm×70cm、深さ10cmと他と比べるとやや小型で、主軸方位はN38°E。覆土は淡灰色砂質土で遺物は出土していない。

土壌10 他の土壌とは少し離れており、掘立柱建物と重なっているが前後関係は不明である。140cm×120cmの隅円方形で、底は深い所で14cmの鍋底状で、覆土は淡灰色砂質土で、10~20cmの河原石を数個もつ。遺物は出土していない。

第6節 奈良時代の遺構

西地区南寄りの微高地上に広がる遺構で、南側の現国道2号線下に統一している。遺構の性格は明らかでないが、土壙5基とピット4基が検出されている。南側に6基（土壙4基）が集中しており、北側に離れて2基と1基が存在する。主軸方向も同一でなく、統一性はない。ピットのうち3基は底に河原石を伴っている。平面で柱痕は確認出来なかったが、柱痕の可能性も考えられる。土壙は最も大きいもので、最大長150cm、深さ40cmを測る。



第169図 奈良時代遺構実測図

出土遺物は、須恵器・土師器で少量ながら、古墳時代初頭の古式土師器と古墳時代後期～末の須恵器を出土している。須恵器は杯蓋・杯身を中心に壹・高杯があり、土師器は杯・甕を出土している。出土量は少ない。

第7節 近世以降の遺構

(1) ピット

西地区中央部分で9基のピットを確認している。柱になるものとならないものが含まれるが、規模は統じて小さく10～15cmのものである。深さも30cmを測るもののが1基あるが、他は15cm前後である。建物が建つとは思われない。埋土も耕作土に近い灰褐色の粘質土が大半である。

(2) 水田跡

西地区的奈良時代～鎌倉時代の遺構のないほとんどの部分に広がっている。畦畔は確認していないが、稻株の痕跡と思われる黄褐色の斑点状の浅い落込みを検出している。

第7章 遺 物

宝林寺北遺跡の遺物は多数あるが、器種別に分けると以下に記すように須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・鉄器・木器・石器・土鏡・石製品・古式土師器・瓦・古銭の12種である。遺構に伴うものは原則的に遺構の項で扱っている。以下、器種ごとに報告する。

第1節 須恵器

出土遺物全体のなかで占める割合は、2割前後であるが、保存状態の良好なことから図化した遺物の割合は4割前後になる。遺構外の遺物で図化したものは、中央地区80点、西地区7点、東地区1点の計88点である。時期的には古墳時代後期から鎌倉時代までの幅を持つ遺物である。

1. 古墳時代の須恵器 [第170図(1)~(4)、第172図60~66、第173図67~69]

器形は杯蓋と壺（もしくは甕）口縁部に限られる。蓋7点と壺3点である。

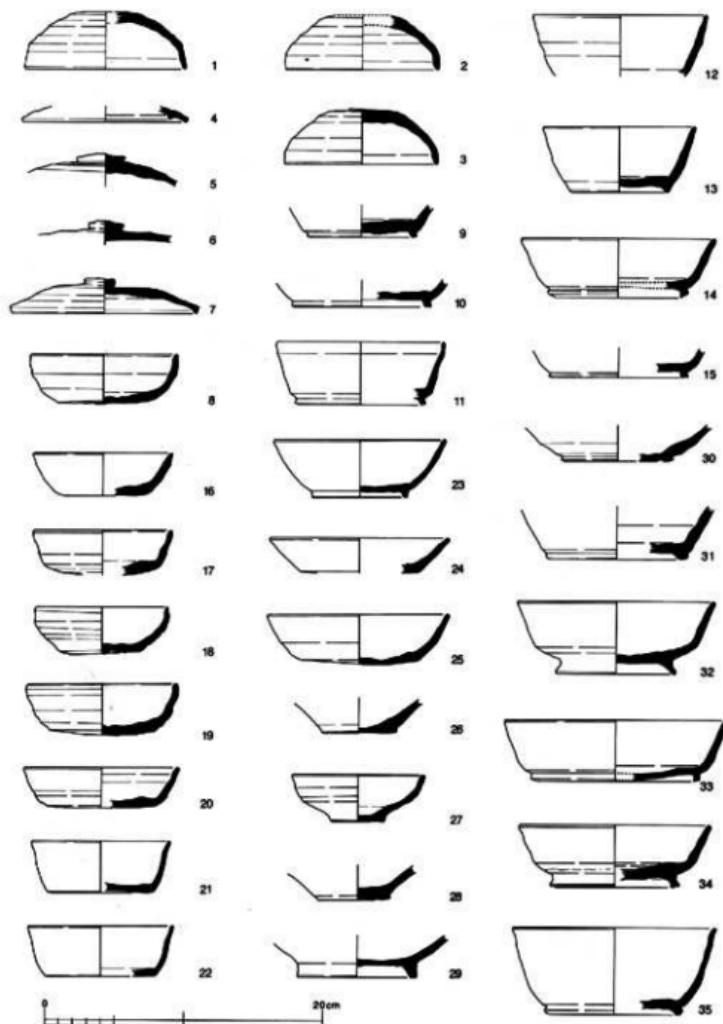
蓋 反りを持つものと持たないものがある。反りを持つものは2点。[(4)・69]で(4)は口径11.5cmで僅かな反りを持つが、口縁端部より垂下しない。TK217型式もしくは後出の古墳時代末の土器であろう。69は口径10.7cm、反り端部径7.0cmを測る。反りは口縁端部より下に弧状に延びており、端部はシャープにおさめている。(5)と同時期と思われるが、径が小さいことから壺用蓋と考えるなら、古い時期が想定される。他の杯蓋は、宝珠つまみ出現前のTK217型式の蓋で、個体差はあるが時期的には同時期の土器と思われる。

他に杯蓋の小破片が数点あるが、全て同時期のものである。また、杯身の小破片も数点出土しているが、図化出来なかった。これらは同時期のものもあるが、立ち上がりの高いTK43型式前後の土器も含まれる。

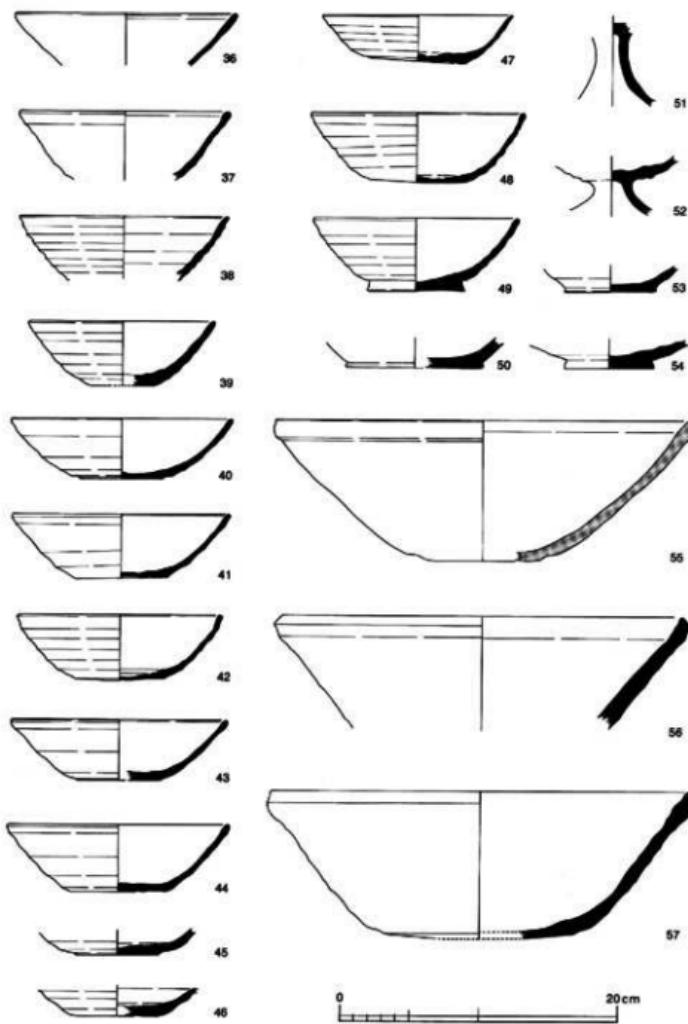
壺 大形土器の口縁部の破片で、10数点出土しているが、文様の見られる破片についてのみ断面図と拓影を掲げた。3点とも波状文を主文様とする。60は3条の凹線の間に5本を単位とする2条の波状文が描かれた口縁部破片である。65[66]は口縁部が残っており、65は端部下に3条の波状文のみが施されている。66は端部は水平となり内外面に肥厚する。外面端面下に1条の突帯を有し、接して凹線が施され、その下に波状文が3条描かれている。波状文のうち凹線が施されている。突帯と口縁部間にクシによる施文の痕跡が見られる。大形土器の性格上、時期は決し難いが65は時期の下る可能性も考えられるが、とりあえずこの時期の範疇として扱っておく。

2. 奈良時代の須恵器 [第170図(5)~(7)、(9)~(12)、(14)15、30~35、第172図62~63、第173図70~75、第174図(1)~(3)、第175図]

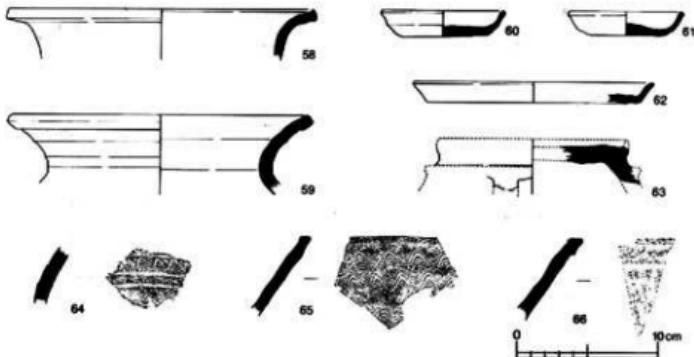
この時期の須恵器の器種は、杯・蓋・皿・円面鏡・壺・高杯で杯が多数を占める。



第170図 中央地区須恵器実測図(1)



第171図 中央地区須恵器実測図(2)・瓦器実測図



第172図 中央地区須恵器実測図(3)

蓋 固化したものは6点で、他に造構内出土土器の中にも数点混ざっている。4点にはつまみ部が残っており、宝珠形が残っているもの(5)(6)と退化したもの(7)(8)に分かれる。端部も肥厚はするが単純に終わるもの(7)と折り曲げたもの(8)～(12)がある。プロポーションも天井部からスムーズに端部へ続く形態と途中に稜線を持ったり屈曲する形態がある。固化していない中では(7)(8)のタイプの破片が多いように思われる。

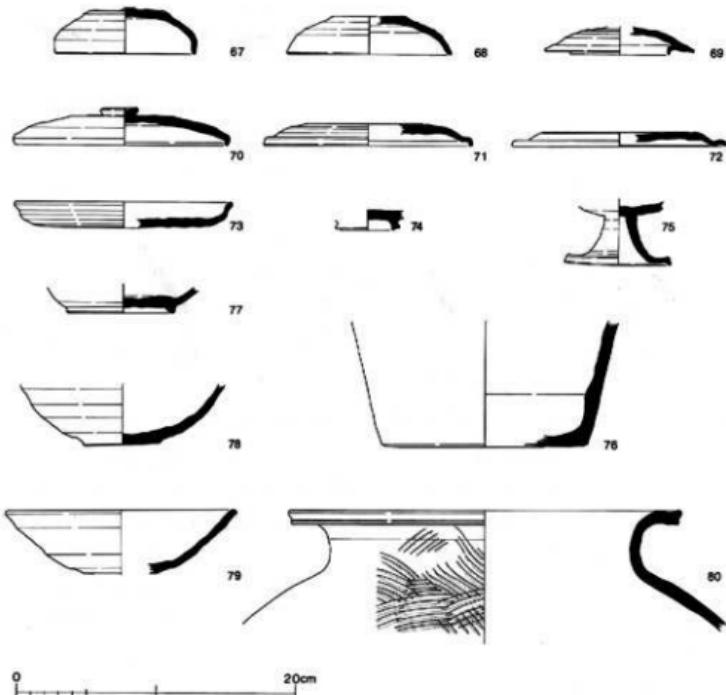
杯 最も多く出土しているが、完形品やそれに近いものは少ない。高台を有するものとないものがある。高台断面は逆台形のもの、三角形に近いもの、外方に肥厚しふん張り気味のもの、外反するもの、内側に肥厚するものに分けられる。高台の付く位置も底部外側とやや内に入った個所との両者がある。

皿 固化したものは2点だけである。62は器高1.5cm、口径16.8cmを測り、底部から外反する口縁部がつく。底部の切り離しはヘラ切りで、その後のナデで調整している。色調は灰白色。63は体部が緩やかに屈曲する形態で、口縁端部は丸くおさめている。ヨコナデで仕上げている。内面にはナデが見られる。口径15.4cm、器高1.9cmを測る。

円面鏡 63が1点出土している。端部をいずれも欠失しており、脚台の透孔部分の陸部の一部しか残っていない。長方形の透孔が全体にある一般的な円面鏡である。推定口径13.4cmを測る。

第174図(7)の破片は不明確で断定は出来ないが鏡の脚の可能性も考えている。

高杯 四つのみ固化したが、他にも数点確認している。杯部の途中までの破片である。裾部径7.5cm、残存高4.5cmで杯部と脚部の接合が明確である。脚部は裾端部に近づいた部分で水平になり、端部は折り曲げて作っており、外方に僅かに広がっている。

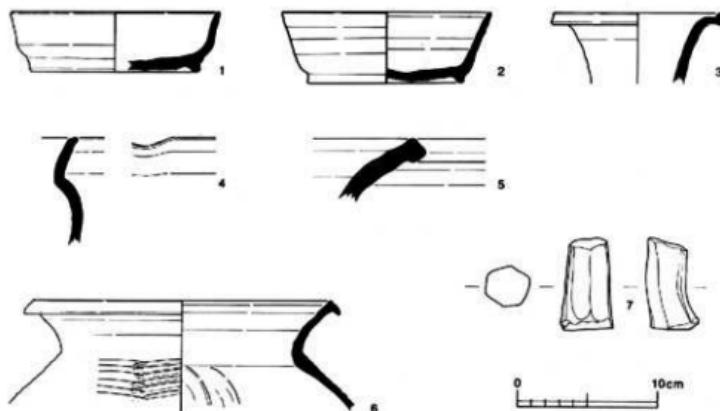


第173図 中央地区須恵器実測図(4)

3. 平安時代後期～鎌倉時代の須恵器

造構のほとんどがこの時期であることから、出土遺物の大半も当時期のものである。器種別に見れば、椀・杯・皿・高杯・鉢・壺・壺である。

椀 小きな付高台のものとベタ高台のものと高台のないものがある。大半は、高台がつかないものである。輪高台（付高台）のものは数が少なく、小片では前代の土器との判別が明確ではない。稜線のシャープさを欠く程度の差と、胎土・色調の僅かな違い程度である。高台の違いはあっても、産地は、ほとんどが掛西地域をも含む相生産の須恵器である。それゆえ、以下相生古窯址群の『相生市・緑ヶ丘窯址群』の調査報告書の分類に従って略述する。他の器種についても同様である。



第174図 西地区須恵器実測図

椀A 第170図(13)が概当するものと思われる。底部と体部の変化線に接して退化した高台が付く。比較的器高は高く、高い指数を示す。高台径6.7cm、器高4.7cm、口径10.8cmを測り、口縁部へ向かってほぼ直角的に外反し、端部は丸くやや外方へつまみ出し気味におさめている。高台を成形後に付けているが、底面には糸切りは見られない。西後明3・12号窯前後の窯に伴う時期の製品と思われる。前代の遺物として扱った35も椀Aに相当するかもしれない。口径14.4cm、底径9.0cm、器高6.2cmを測る。ただ色調的にやや異なるように思えたので除外したが、可能性は残される。

椀B 第170図(23)が相当する。器高指数が低い値を示す。口径12.2cm、高台径6.8cm、器高4.15cmで、器高指数は37.5となる。底部から体部へは緩やかに統き、高台がなければ明らかに稜線は有さない。内縫しながら口縁部へと統き、端部は外方へつまみ出して丸くおさめている。色調は灰白～灰色で胎土は長石・雲母の砂粒を含む。

椀C 平高台の椀が椀Cになる。高台部の高いものと低いものの両者がある。しかし、共に糸切りによって切り離されており、緩やかに内縫しながら口縁部へ統く体部を持っている。器高はやや低いものも含まれる。口縁端部は肥厚させて丸くおさめるものと、外反ぎみに丸くおさめるものの2種がある。例は口径14.6cm、器高5.3cm、底径7.0cmを測り、色調は灰白色を呈し、砂粒を含んでいる。

備前系椀 完形の椀が占める割合は最も多い。口径は広く、口径に比べて器高が低いのが特徴である。底部と体部との境界は明瞭でなく、椀Cに比べて内縫する度合いが高く、端部は丸くおさめている。

口縁部周辺は重ね焼きの痕跡が明らかで灰～黒灰色をしており、他は



第175図 東地区須恵器

椀C以上に白っぽい灰白色である。底部内面はナデで仕上げている。**40**は、口径15.7cmを測る。

その他、断定は出来ない2種の椀がある。1つは**41**で、相生窯址群周辺では未確認の窯の時期の遺物である。しかし、胎土・焼成・色調・技法などいずれも西播系の特徴を具备しており、相生周辺の産と考えられる。他の1点は**48**で口径15.5cm、器高5.5cmを測り、技法的には西播のものであるが、整形が粗雑で今のところ窯の推定は出来ない。同じく未確認の西播の窯址の製品と考えられる。

鉢 魚住焼の鉢である。片口を持つこね鉢で、高台を有するものも出土している。遺構外で図化したのは2点で、口唇部が角張るもの**56**と肥厚するもの**57**に分けられる。底は糸切りで切り離している。**57**は口径30.0cm、底径13.7cm、器高10.5cmを測る。口唇部は黒灰色で、他は灰色である。底面と体部との境は不明瞭である。

壺 片口の短頸壺が1点西地区から出土している。残存高7.6cmで片口部の破片のため正確な口径は出せない。全体にヨコナデで仕上げられており、灰白色を呈しており、小石粒を多く含んでいる。口径をほぼ最大径とし、器高の低いタイプになるものと思われる。

杯 体部が緩やかに内彎するものと直立に近いものがある。内彎するものには、口縁端部がさらに内彎するものもある。直立するタイプは、端部が外反するものとそのまま丸くおさめるものがある。底部の切り離しはヘラ切りである。

第2節 土師器

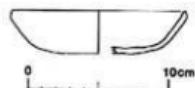
遺物のなかで最も出土量の多い種別であるが、残存状況の悪さから出土総数の割合に比べると図化した点数は少ない。図化した点数は、中央地区124点を数える。器種は、皿が最も多く、椀・杯・甕・鍋が出土している。

皿 最も多く量を出土している器種で100点を図化している。口径は6cm～15cmの幅があり、口径の大きさから分類が可能である。6～7.5cmのものが最も多く、径の小さいものから大きいものの順に出土頻度が高い。底部の切り離しは、手捏ねとヘラ切り、および糸切りの3種がある。技法的には遺構出土の皿と同じく、ユビ整形のち口縁部のみヨコナデを施しているものが多い。大形品も同様であるが、大形品のなかには精製の良品も含まれ、時代的に遡る可能性が高い。**42**のように口径7.3cm、器高1.6cmで端部が内傾する特殊なタイプの皿も数点出土している。体部が緩いS字状の曲線を描くものもある。

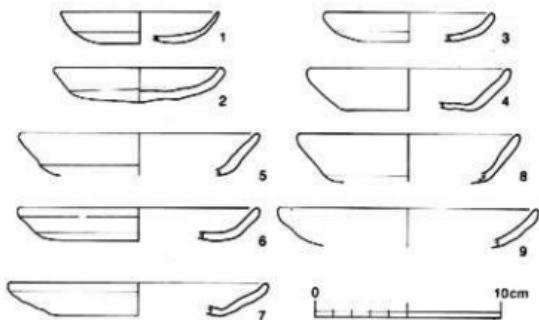
椀 出土点数は少ない。図化したものは2点であるが、他に底部だけの破片はある程度出土している。遺構外の例では（110）のみが完形である。口径15.0cm、高台径8.4cm、器高6.1cmを測り、輪高台を付加している。体部と底部の境は明らかでなく、ほぼ直線的に外方へ延びている。ヘラ切りのベタ高台の底部も例があるが、同時期と考えられる。中央地区土壙42出土例を代表例とする椀である。

杯 図化した点数は、皿に次ぐものである。口径と底径の数値の近いものと、大きく外反することによって器高指数の低いものの両者がある。前者は(100)などで、体部は直線内に延び端部は丸くおさめる。底部はヘラで切り離しており、そのため水平とは言えない。後者は(103)などで外方へ直線的に延びる点は共通するが、底部との境が明らかで、端部は丸くおさめるものと肥厚するものがある。全体的に磨滅が著しいが、後者は時期的に遅る可能性も考えられる。(106)は外面に丹が塗られている。

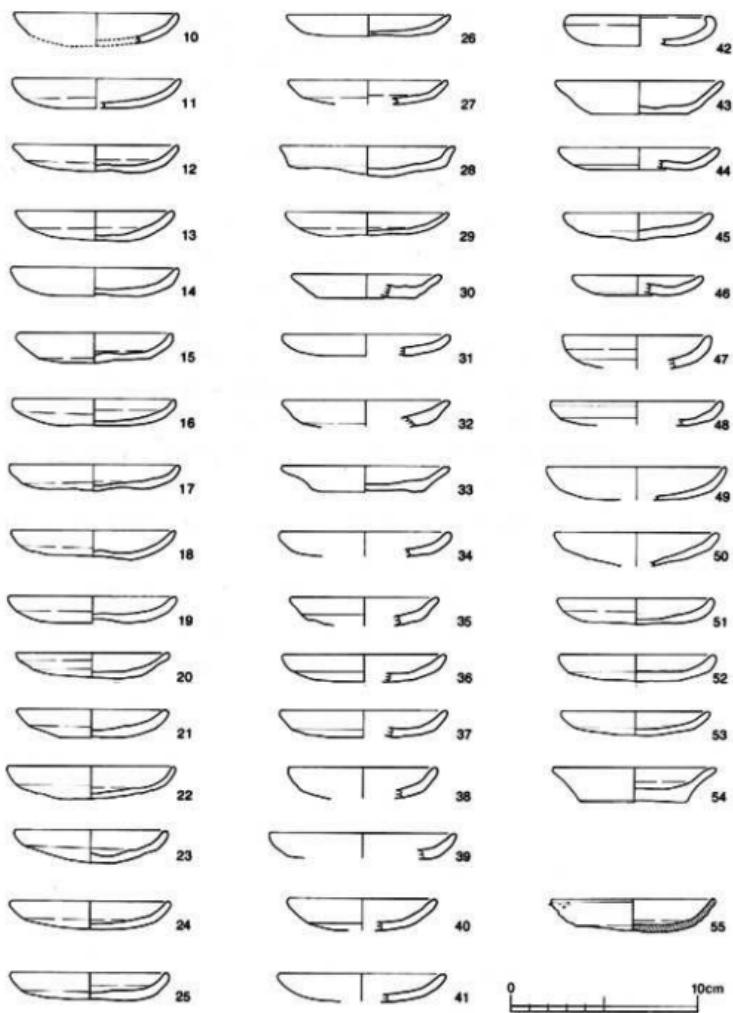
鍋 幾つかのタイプに分類可能である。まず大きく分けると脚の有無が挙げられる。脚は3足で、遺構外での完形品はなかった。中央地区土壇1例のように底部近くに付くものと口縁直下から付くものや体部上半に付くものがある。脚のタイプから見るかぎり、底部近くに付く脚が多数を占めている。脚はハケ整形で仕上げられ、鍋体部との接続はユビ成形し、調整している。図化していないが、破片から推定して、脚の付く羽釜も存在する。同種のものは瓦器鍋(115)があり、同形態の土師器になると思われる。脚のないものでは、鍋の付く羽釜と鍋のない鍋がある。羽釜は破片が大きいことから多数出土しているようだが、全体的には鍋のない鍋の方が多数出土している。羽釜にも口縁が鍋から直立するものと内彎するものがあるが、技法的には同じである。鍋自体を整形してから羽釜をユビで成形しており、内外面ともハケ整形したものが多い。外面はユビで仕上げたものも見られ、口縁部のみヨコナデで仕上げている。鍋の付かない鍋もプロポーションや口縁端部の形を幾種類かに分けることは可能であろうが、大きな問題にはならないようと思われる。整形は内外面ともハケ整形するものが多く、口縁部でも端部近くのみヨコナデしている例が多い。口縁部は折り曲げて作ったものもあり、内外面に指圧痕が明瞭に見られる。



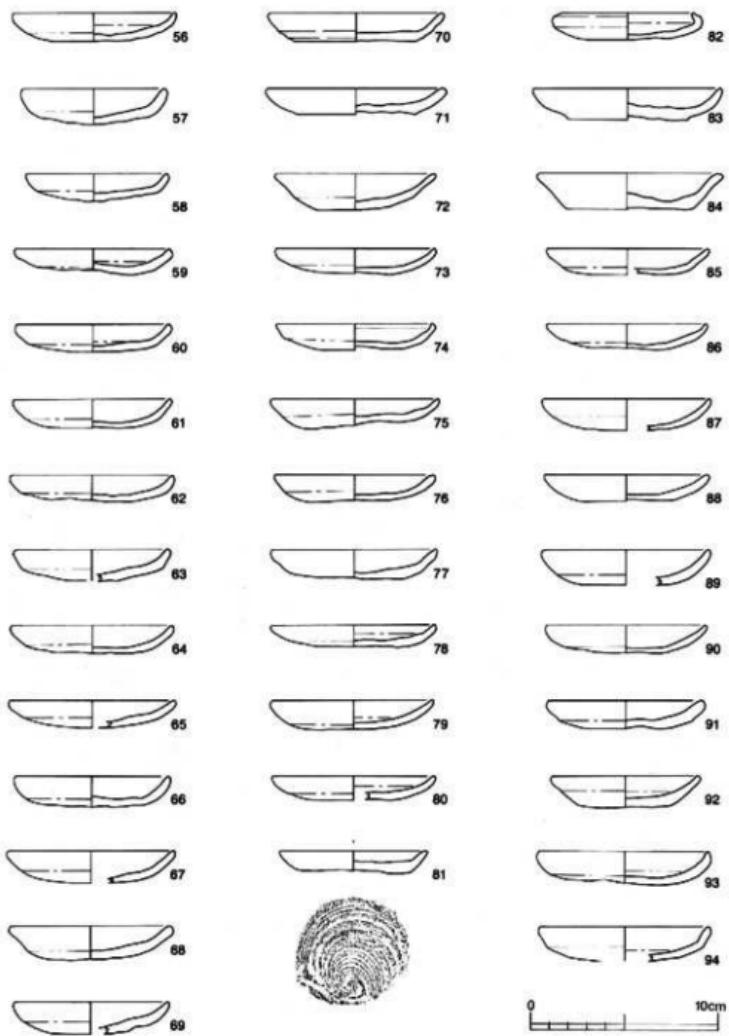
第176図 西地区土師器



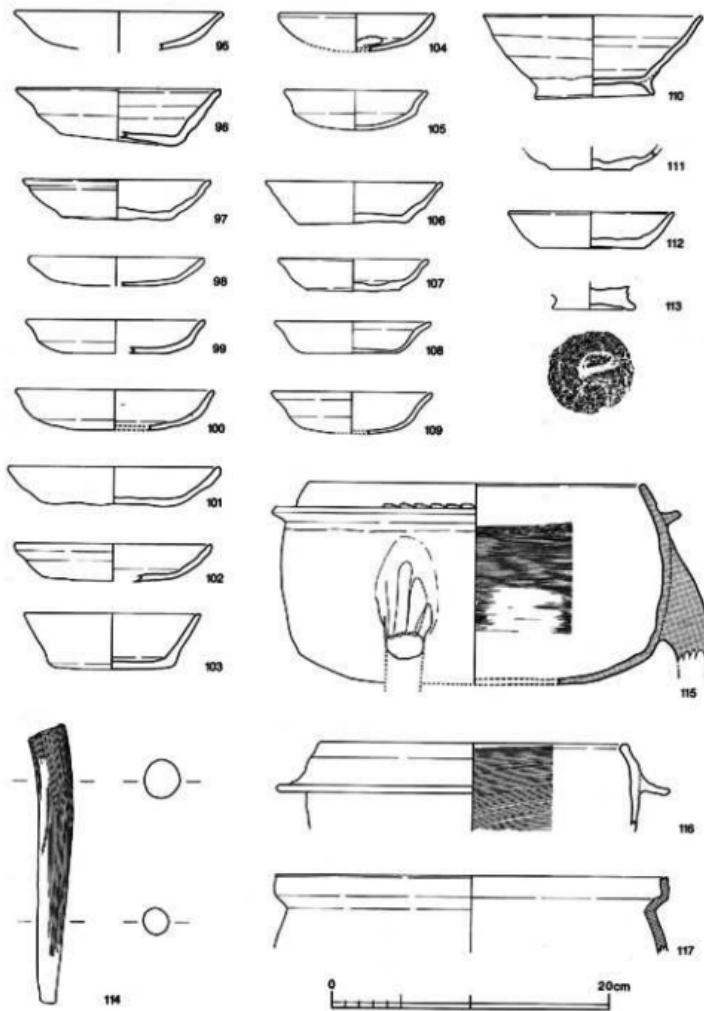
第177図 中央地区土師器実測図(1)



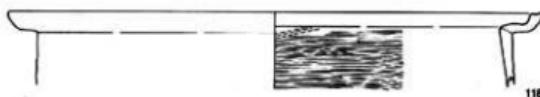
第178図 中央地区土師器実測図(2)・瓦器実測図



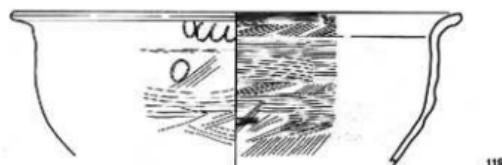
第179図 中央地区土師器実測図(3)



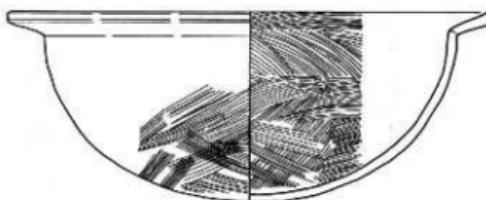
第180図 中央地区土師器実測図(4)・瓦器実測図



116



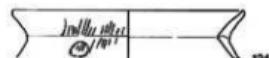
119



120



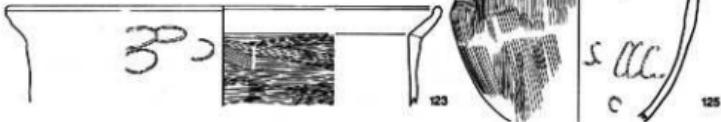
121



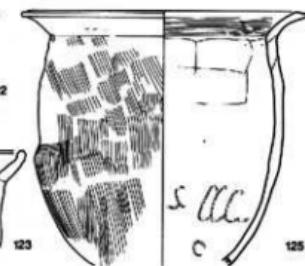
124



122



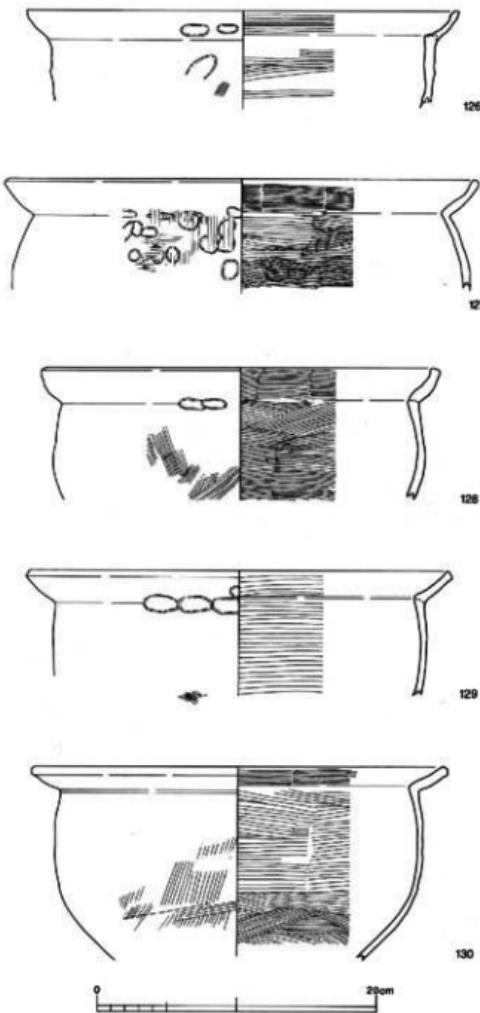
123



125



第181図 中央地区土師器実測図(5)



第182図 中央地区土師器実測図(6)

堀 用途的には鍋と同じで、分けることが不自然なのかもしれないが、形態から器種を分けている。口縁形態が、くの字になるものと二重口縁ぎみに直立するものがある。鍋と同じくユビ成形のちハケ整形しているものが多く、口縁を折り曲げて形を作っているものもある。全て煤が多く付いており、実用に供されていたためか保存状態が悪い。

第3節 瓦器

瓦器は、種別の中では最も占める割合が低いが、播磨の中世遺跡として出土量・数が少ないため稀少例と言え、重要なと思われる。器種は、碗・皿・鍋・鉢である。遺構外出土の土器にも全器種が含まれるが、図化したものは鍋・皿・鉢の4点である。

第178図(55)は皿で、口径8.7cm、器高1.8cmを測る。表面磨滅しているため技法など看取出来ない。第180図(115)は3本の脚のつく鍋で、底の一部と脚の先端を欠くがほぼ全容を理解出来る。口径24.6cm、鉢径

29.8cmで鈎は約2cmを測り、上方へやや向いている。鈎は鍋整形後に付加しており、ユビで成形している。鈎の上下に縫ぎ目が観察される。内面は細かいハケ整形しており、脚は鈎と同じく整形後に接続している。脚はユビ成形したままで、接続もユビで成形している。外面にはススが多く付着しており、頻繁に使用していたことが窺われる。第180図(117)は口径28.2cm、残存高5.3cmを測り、二重口縁で直立気味に内傾し、端部に1条の凹線文を有する。粘土の縫ぎ目は明瞭であるが、表面磨滅しているため成形技法など不明である。類似したものとして姫路市・本町遺跡井戸1處出土物がある。第171図(55)は、底部の一部を欠失しているもののほぼ全容が判るこね鉢である。他の瓦器同様表面磨滅が著しく、成形技法など明らかでない。口径30.0cm、底径8.4cm、器高10.1cmを測る。体部との境界は明瞭でない。口縁部は肥厚させ、口唇面中央に棱線を有している。須恵器のこね鉢に比べると肥厚度が少ない。

団化した瓦器は遺構からは、落込み1・3・5、屋外炉、建物4から出土している。器種は団化していないものも含めて同様である。皿は第178図(59)と同じである。椀は、退化した高台を持ち、体部中央部分に緩やかな段を持つものもある。鍋は、(115)(117)の2種の他、脚のつかない羽釜もある。

第4節 陶磁器

宝林寺北遺跡から出土した陶磁器は、肥前系染付磁器を中心とする近世に属するものと、白磁、青磁、青白磁、青花などの貿易陶磁を中心とする中世に属するものとに大きく分類される。しかしこれらの陶磁器は、遺構に伴って検出されたものは極く僅かで、大部分は、3層及び4層を中心とする遺物包含層中より出土している。また本遺跡では、他に土師器の皿、椀、壺、須恵器の椀、皿、甕、鉢などの日常雑器が出土し、出土遺物の大半は、これらの遺物でしめられている。本来は、これらの遺物を分類し、これらの遺物との遺構単位でのセット関係から、陶磁器に当遺跡における年代観を与えるという作業が必要である。しかし先に述べたように、セット関係を論ずるには遺構に伴う一括遺物が非常に少ないと、最も多量にかつ普遍的に出土する土師器については、播磨地域における編年観が未だ確立されていないことなどの点から、今回の報告では上記の作業をなし得なかった。

したがってここでは、出土した陶磁器について、遺構に伴うもの及び遺構に伴わず包含層中より出土したものとに分類し、その概要を述べるにとどめたい。

A. 遺構出土遺物

① 中世墓（方形周溝墓）出土遺物（第158図）

方形周溝墓からは埋葬主体より土師器皿と共に白磁碗が2点出土している。白磁碗は2点とも完形で(2)が(1)よりやや小ぶりとなっている。形態的には全く同タイプで、直立する細くて高い高台をもち、体部はやや内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、口縁端部は水平に折り曲

げられている。内外面共施釉されているが、外面の体部下半以下は露胎となっている。色調は灰色を帯びた白色を呈し、体部外面には釉垂れが見られ、器面には気泡が認められる。底部内面には浅い沈線が施されている。形態及び調整技法の特徴から、横田・森田分類の白磁碗Ⅳ-a類に相当するものと考えられる。

② 土壌36出土遺物（第116図）

土壌36からは青磁碗が1点出土している。碗は完形で、削り出しの浅い高台をもつ。体部は内縁気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に收まる。ほぼ全面に施釉されているが、高台疊付及び底部外面（高台裏）には施釉されていない。体部外面には巾の広い鍋の不明瞭な蓮弁文が片切彫されており、蓮弁と蓮弁の間に間弁をもつ。釉調はやや青味を帯びる淡緑色を呈する。形態及び技法上の特徴から、横田・森田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5-a類、上田分類青磁碗B-1類に相当するものと考えられる。

③ 落込み1出土遺物（第57図(1)～(7)）

落込み1からは、白磁碗(5)(6)、皿(7)、青磁碗(1)(2)(3)と灰釉陶器の壺と思われる破片(4)が出土している。

(1)は青磁碗である。外面にはクシ描きによる施文が、内面にはクシ描きによる花文がそれぞれ施されている。内外面共施釉されているが、外面の体部下半以下は露胎である。色調は黄色味の強い飴色ガラス質の釉調を呈する。(2)は断面台形状の削り出し高台をもつ青磁碗底部である。外面にはクシ状工具で施文が、内面にはヘラ描きの花文がそれぞれ施される。内外面共施釉されるが、外面の体部下半以下は露台である。色調は黄色味の強い飴色ガラス質の釉調を呈する。(3)は外面に蓮弁文を片切彫する青磁碗である。蓮弁は巾広で鍋は非常にあまくなっている。色調は空色を帯びた緑色を呈する。(4)は灰釉陶器壺の底部と思われる。ロクロナデ、ロクロケズリの後、外面には再調整が加えられるが、内面は未調整のままである。(5)は口縁部が玉縁状に肥厚する白磁碗である。色調は灰色を帯びた白色を呈する。(6)は白磁碗の底部である。高台の削り出しは非常に浅く外面には施釉されていない。(7)は白磁皿である。口縁部は外反し、内外面共施釉した後、口縁部内外面の釉をカキ取るいわゆる口禿げタイプの皿である。

形態及び技法上の特徴から見て、(1)(2)は横田・森田分類同安窯系青磁碗Ⅲ-1-b類、(3)は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5-b類及び上田分類青磁碗B-1類、(5)は横田・森田分類白磁碗Ⅳ類、(6)は白磁碗Ⅳ-1類、(7)は白磁皿Ⅸ類にそれぞれ相当するものと考えられる。

④ 落込み5出土遺物（第67図）

落込み5からは青磁碗が2点出土している。いずれも体部外面に片切彫で巾の広い鍋の不明瞭な蓮弁文を施文している。色調は若干相違し、(1)は空色を帯びた緑色を、(2)は暗黄緑色をそれぞれ呈する。形態及び技法上の特徴から見て、(1)(2)とも横田・森田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5-b類及び上田分類青磁碗B-1類に相当するものと考えられる。

⑤ 土壙4出土遺物〔第94図〕

土壙4からは白磁皿が1点出土している。口縁部は外反し、口縁端部は丸味を帯びる。内外面共施釉されるが、外面の体部下半以下は露胎である。色調は青味を帯びた白色を呈する。形態及び技法上の特徴から考えて、横田・森田分類白磁皿IV類もしくはV類に相当するものと考えられる。

⑥ 落込み10出土遺物〔第74図〕

落込み10からは白磁碗が1点出土している。口縁部は外反し、体部外面には柳目文が施される。器面には焼成の際生じたと思われる気泡が認められる。色調は灰色を帯びた白色を呈する。形態及び技法上の特徴から考えて横田・森田分類白磁碗V-2-b類に相当するものと考えられる。

⑦ ピット内出土遺物〔第132図(1)~(7)〕

ピット内からは青磁碗及び白磁碗が出土している。(1)は青磁碗である。底部内面には花文を印花する。内外面共施釉されるが、高台疊付及び底部外面には施釉されない。釉調は暗緑色を呈する。(P-680出土)(2)は体部外面に片切彫の蓮弁文を施す青磁碗である。色調は黄色味を帯びた緑色を呈する。(P-98出土)(3)(4)は無文の青磁碗である。色調は(3)が黄色味を帯びた緑色を、(4)が空色を帯びた緑色をそれぞれ呈する。(3)P-106、(4)P-128出土)(5)~(7)は白磁碗である。(5)(6)は口縁部が外反し、口縁部を水平に折り曲げる。色調はいずれも灰色を帯びた白色を呈し、器面には細かい貫人がはしる。(5)P-828、(6)P-421出土)(7)は口縁部が玉縁状に肥厚する。口縁部外面下端を強くナデ、1条の凹部を形成する。(P-372出土)

形態及び技法上の特徴から考えて、(2)は横田・森田分類龍泉窯系青磁碗I-5類、(3)(4)はI-1類、(5)(6)は白磁碗V-4類、(7)は白磁碗IIIもしくはIV類に相当するものと考えられる。

⑧ 井戸2出土遺物〔第142図〕

井戸2からは白磁碗及び青磁碗が1点ずつ出土している。(1)は口縁部が外反する白磁碗である。口縁部外面下端を強くヨコナデする。色調は灰色を帯びた白色を呈する。(2)は高台の削り出しが比較的浅い青磁碗底部である。内外面共施釉するが、高台疊付及び底部外面は露胎である。形態及び技法上の特徴から、(1)は横田・森田分類白磁碗V-2類、(2)は龍泉窯系青磁碗I類に相当するものと考えられる。

⑨ 集石土壙2出土遺物〔第148図〕

集石土壙2からは青磁碗が1点出土している。(4)は断面台形の比較的削り出しの浅い高台をもつ。体部外面には巾の広い鉢の認められない蓮弁文を片切彫する。内外面共施釉されるが、高台疊付及び底部外面は露胎である。色調は淡緑色を呈する。形態及び技法上の特徴から横田・森田分類龍泉窯系青磁碗I-5類に相当するものと考えられる。

⑩ 東地区ピット内出土遺物〔第155図(4)〕

東地区ピット内からは、青白磁の合子蓋が出土している。口縁部は直立し、体部外面には草

花文が浮彫りされる。内外面共施釉されるが口縁部内面の釉はカキ取られている。色調は淡青白色を呈する。

⑪ 西地区中世墓周溝出土遺物〔第162図(12)13〕

西地区溝からは白磁皿、青磁碗が1点ずつ出土している。(12)は口縁端部が丸味を帯びる白磁皿である。色調は黄色味を帯びる白色を呈する。(13)は断面台形の比較的幅広の高台をもつ青磁碗である。体部内外面に輪描きによる施文を行う。内外面共施釉されるが外面の体部下半以下は露胎である。形態及び調整技法の特徴から、(12)は横田・森田分類白磁皿V類、(13)は同安窯系青磁碗I-1-b類に相当するものと考えられる。

B. 遺物包含層出土遺物

① 中世遺物

中世遺物には、貿易陶磁及び国産の灰釉陶器がある。

a) 貿易陶磁

貿易陶磁には、白磁、青磁、青白磁、青花磁器及び褐釉陶器がある。

イ) 白磁

白磁には碗・皿がある。

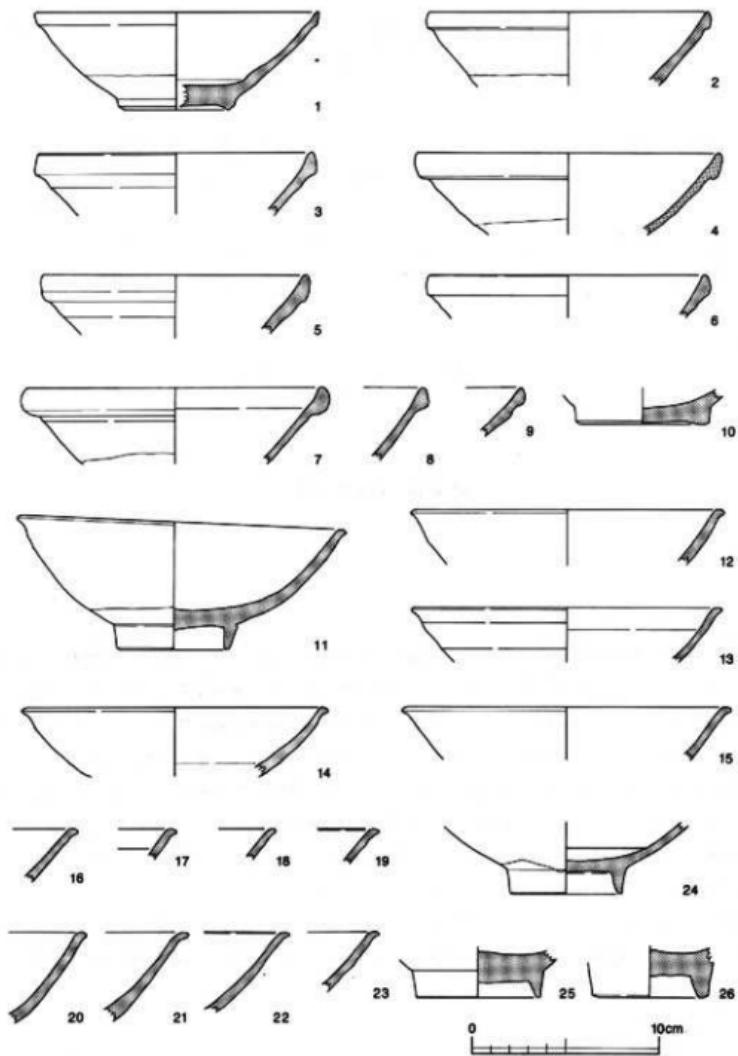
碗 碗は口縁部の形態から、口縁部が玉縁状に肥厚するもの〔横田・森田分類白磁碗IV類(1)～(9)〕と口縁部が外反するもの〔白磁碗V-2～4類、VI、Ⅶ-1、Ⅷ-3類、(1)～(9)、2022(23)〕とに分類出来る。また、底部のみ遺存するものは高台部の形態から、削り出しが浅く、底部の器肉の厚いもの〔IV類(10)〕と、細く高い輪高台のもの〔V類(24)〕及びV類よりやや幅広で低いもの〔VI～Ⅷ類(25)～(29)〕とに分類出来る。IV類に分類されるものの内、口縁部から底部迄残存する(1)は、見込み部分を凹ませて段をつける特徴からIV-1-b類に细分出来る。口縁部が外反するものは資料の殆ど全てが口縁部の破片であるため、さらに细分する事は困難であるが、端部を水平にする(11)、(13)～(17)、22(23)はV-4類もしくはⅧ-1類に相当するものと考えられる。また口縁部から底部迄残存する(11)は内外面に施文されていない点からV-4-a類に分類される。

皿 皿は口縁部の施釉方法の違いから、口縁端部に迄釉のかかるもの〔G3(34)〕と口縁端部の釉をカキ取るいわゆる口禿げタイプのもの〔白磁皿IX類(31)G2(35)G5(37)(41)〕とに大別出来る。(41)は、口縁部内面に印花文（雷文、列点文など）を施文し、色調は空色を帯びる白色に発色するもので、森田分類白磁B群に類似する。

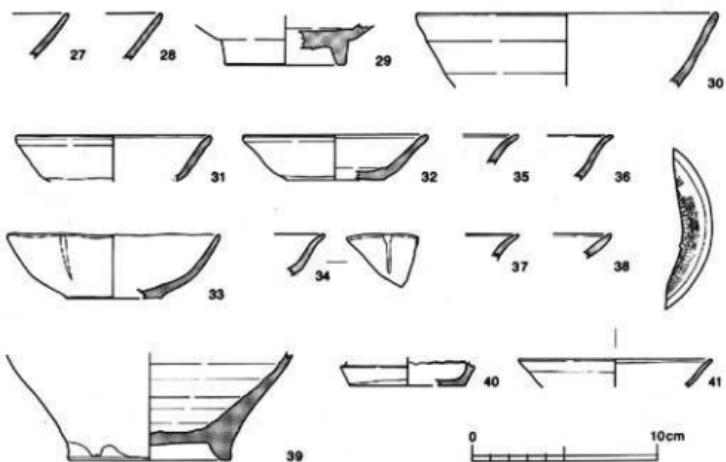
壺 壺は1点出土している。(39) 比較的高い削り出し高台をもち、高台部外面は垂直に、内面は斜め方向に削り出されている。体部外面は施釉され空色を帯びた白色を呈する。器面には粗い貫入と釉垂れが認められる。内面及び底部外面は露胎である。

ロ) 青白磁

青白磁には合子がある。(40) 平底で体部は斜め上方に立ち上がる。外面は施釉され、淡黄



第183図 白磁実測図(1)



第184図 白磁実測図(2)

緑色に発色する。

ハ) 青磁

青磁には碗、小碗、皿がある。

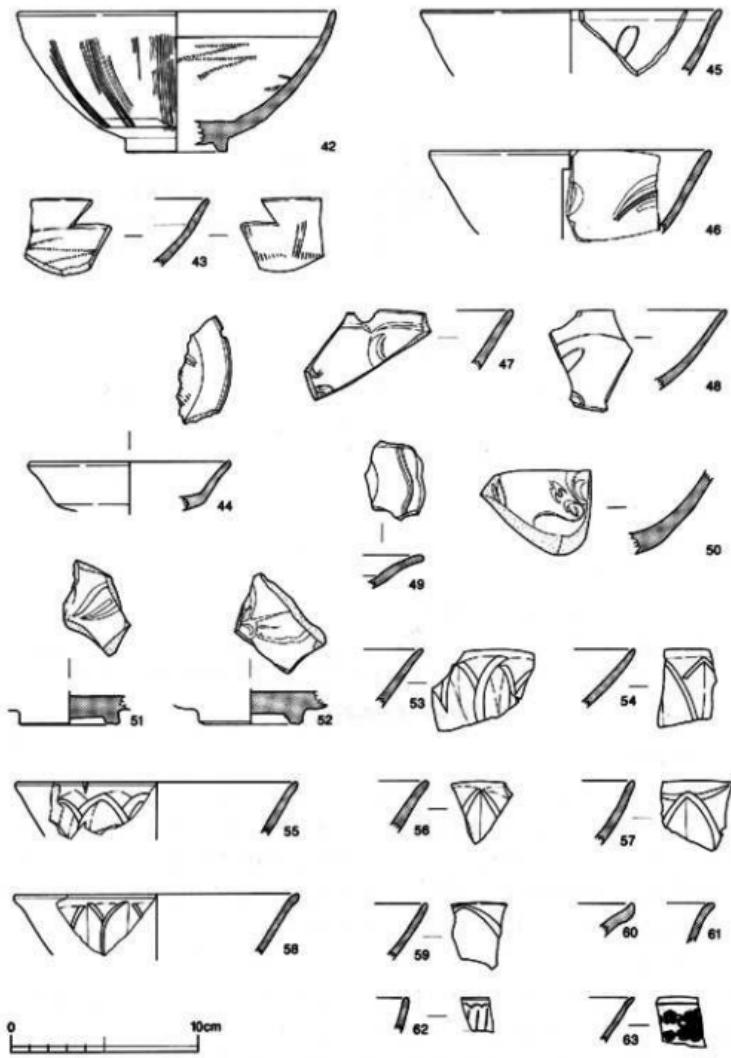
碗 碗は体部の施文の種類によって、櫛描文を施文するもの〔同安窯系青磁碗〔4243〕、刺花文を施文するもの〔龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類、45~48、50〕及び蓮弁文を施文するもの〔龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5、53~59、62〕に大別出来る。同安窯系青磁碗〔4243〕はいざれも、内外面共櫛描文を施文するもので、同安窯系青磁碗Ⅰ-1-b類に細分される。蓮弁文碗は、鎮のあるもの〔龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5-b類、56~58〕と鎮のないもの〔龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5-a類、53~55〕及び線描きの細い蓮弁文を施文するもの〔上田分類青磁碗B-IV類、61〕とに細分される。

小碗 小碗は口縁部を輪花状に形成し、内面に片切彫りの沈線を施すもので、横田・森田分類青磁小碗Ⅰ-2類に相当するものと考えられる。(49)

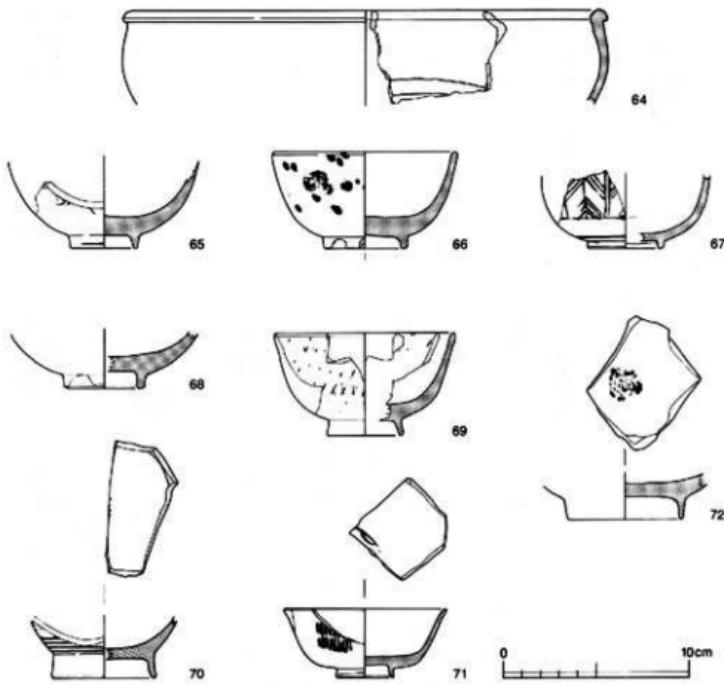
皿 皿は1点出土している。体部中位で屈曲し、体部と見込みの境に段を有するもので、底部内面にはクシ描き文を施文する。形態及び技法上の特徴から横田・森田分類同安窯系青磁皿Ⅰ類に相当するものと考えられる。(44)

ニ) 青花磁器

青花磁器は碗の破片が1点のみ出土している。外面には鼻須で2条の界線と草花文が、内面には界線が2条施文されている。(53)



第185図 青磁実測図



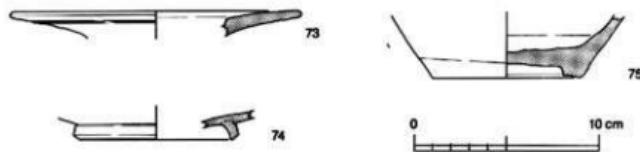
第186図 染付磁器実測図

ホ) 磁釉陶器

第187図75は壺の底部である。平底で蛇ノ目状に削り出した高台をもつ。ロクロナデ、ロクロケズリの後、内面には不定方向のナデ調整が、また外面にはロクロの回転を利用したナデ調整がそれぞれ加えられる。この遺物については、遺存部からは施釉の跡は認められない。しかし、^(大正4)福田天神遺跡出土の磁釉四耳壺と、形態、調整技法の特徴、焼成等の点でかなりの類似性が認められることから、ここでは磁釉四耳壺として報告する。

ホ) 国産陶器

国産陶器には灰釉陶器がある。第187図73は瓶の口縁部であろうと思われる。粘土紐巻き上げ成形の後、ロクロケズリを加え、さらにナデ調整を行う。口縁部内面にはヘラ描きの沈線が施される。内外面共施釉され、色調は淡緑色を呈する。74は壺の底部である。断面台形の貼付高台をもち、高台疊付部分は斜め方向に削る。内外面共施釉されるが、高台疊付及び底部外面に



第187図 灰釉・褐釉陶器実測図

は施釉されない。色調は淡緑色を呈する。73・74共、東海系の灰釉陶器と考えられる。

② 近世遺物

本遺跡で検出された近世に属する陶磁器には、緑釉陶器及び染付磁器がある。

a) 緑釉陶器

第187図64は緑釉陶器の壺形土器である。体部は内彎し、口縁部は玉縁状に肥厚する。底部内面にはヘラ描き沈線による草花文が施文される。内外面共施釉され、色調は黄緑色を呈する。⁽¹⁸⁸⁾姫路城武家屋敷跡出土品に類例が認められることから、おそらく、近世の緑釉陶器であろうと判断される。

b) 染付磁器

65~67は国産の染付磁器碗である。65は厚手に成形され、外面には呂須で草花文及び3条の界線が施される。全面に施釉されているが、高台疊付の釉はかき取られている。釉調は青味を帯びた白色を呈し、呂須の発色は不良である。66も65同様厚手に成形される。外面には呂須で草花文及び2条の界線が施される。高台裏にも呂須による施文が認められる。釉は全面に施されるが、高台疊付の釉はかき取られている。釉調は黄色味を帯びた白色を呈し、呂須の発色は不良である。65・66共、形態及び技法上の特徴から肥前系染付磁器のいわゆるくらわんか手に属するものと考えられる。67は京焼風のプロポーションをもつ。外面には呂須で矢羽根文及び、2条の界線が、内面には1条の界線がそれぞれ施される。釉は全面に施されるが、高台疊付の釉はかき取られている。色調は黄色味を帯びた白色を呈する。65は比較的高い高台をもつ。外面には淡緑色の青釉が、内面には呂須で界線を1条描き、透明釉を施すいわゆる染付青磁である。高台疊付には砂が附着する。形態及び技法上の特徴から肥前系の產品であると考えられる。

68は、外方に開く高い高台をもつ。外面には呂須で網目文を簡略化した斜格子状文及び界線を、内面には格子状文を施文する。69は細く高い高台をもつ。外面には呂須で格子目文及び4条の界線を、内面には界線を施文し、見込みにも施文が認められる。全面に施釉されるが、高台疊付の釉はかき取られている。形態及び技法上の特徴から肥前系染付磁器のいわゆる広東碗タイプに属するものと考えられる。70は口縁部がやや外反する。外面は酸化コバルトで施文され、発色は濃い藍色を呈する。色調も他の染付とは異なり、白色を呈する。71は直立する比較的高

い高台をもつ。外面には呉須で3条の界線が、内面にはコンニャク印判による五弁蓮花文がそれぞれ施される。全面に施釉されているが、高台豈付の跡はかき取られている。形態及び技法上の特徴から考えて肥前系の产品と考えられる。

時期的には、②には17世紀後半から18世紀前半の時期が、⑤^(文政5)には18世紀前半から後半の時期が、⑦には19世紀前半の時期が、⑧には近代以降の時期がそれぞれ与えられる。

参考、引用文献

1. 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国磁器について — 型式分類と編年を中心として —」『九州歴史資料館論集4』 九州歴史資料館
2. 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』 貿易陶磁研究会
3. 森田 勉 1982 「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』 貿易陶磁研究会
4. 鈴木重治・市村高規 1982 「福田天神遺跡」 龍野市教育委員会
5. 岡田章一・長谷川真 1985 「特別史跡姫路城跡 — 兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告」 兵庫県立歴史博物館
6. 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布 — 発掘資料を中心として —」『国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館



第188図 宝林寺北遺跡出土陶磁器

第5節 鉄器

西地区出土鉄器

(1)はほぼ完形に近い釘である。断面は方形で、残存長は5.5cmある。釘頭の断面が基部の断面より扁平なことから、釘頭は鋸き出しで造られたものと思われる。元は二寸の釘であろう。(2)は比較的鈎の少ない状態で出土した。扁平な鉄棒の一端は鉤手状になっている。環状であったかも思われるが、X線透過写真からみて欠損の跡がみられないため、これが完存状態であろう。しかし用途は不明である。

中央地区出土鉄器

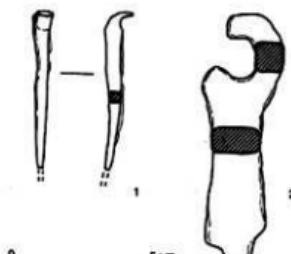
(6)をのぞく(1)～(10)は断面が方形のいわゆる和釘である。完存の釘は皆無だったが、(1)(2)(3)が比較的完存に近いと思われる。(1)は最も大型の釘で、残存長は11.7cmある。その頭部は真直ぐに曲がり、先端に小返しのつくことから五寸の皆折釘であると思われる。(2)(3)は釘の基部の先端を鋸き伸ばした後に曲げた釘頭をもつ。(5)は角釘の頭部かもしれない。(7)～(10)は基部の一部と思われる。(6)は断面の丸い洋釘である。

鎌は2点出土している。(1)は鋳造が激しい為X線透過写真により図化した。茎部分が欠損しているので全長は不明だが、鎌身長3.6cm、籠被長3.0cmを計る。鎌身は二等辺三角形でその底辺の両端には深い抉りの腹抉がつき、その逆刺りは二重の抉りを有する。また鎌身の断面は両丸である。(2)は籠被部分が欠損している。鎌身の断面は両丸で、欠損はしているが腹抉を有している。

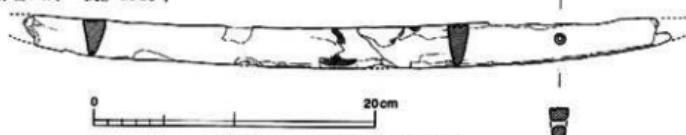
(3)は用途不明製品であるが刃は認められない。(4)は断面が方形の棒状製品であるが、用途は不明。(5)は復原径は約6cmの円盤状製品で周縁を折り込んでいる。(6)は残存長11cm、最大幅2.7cm、背の厚さ0.3cmで、弦円状に内彎し、その内側には刃が造り出されていることから鎌である可能性が高い。(7)(8)は不明製品である。(8)には刃が認められるが、鎌であるかは断定できない。

参考文献

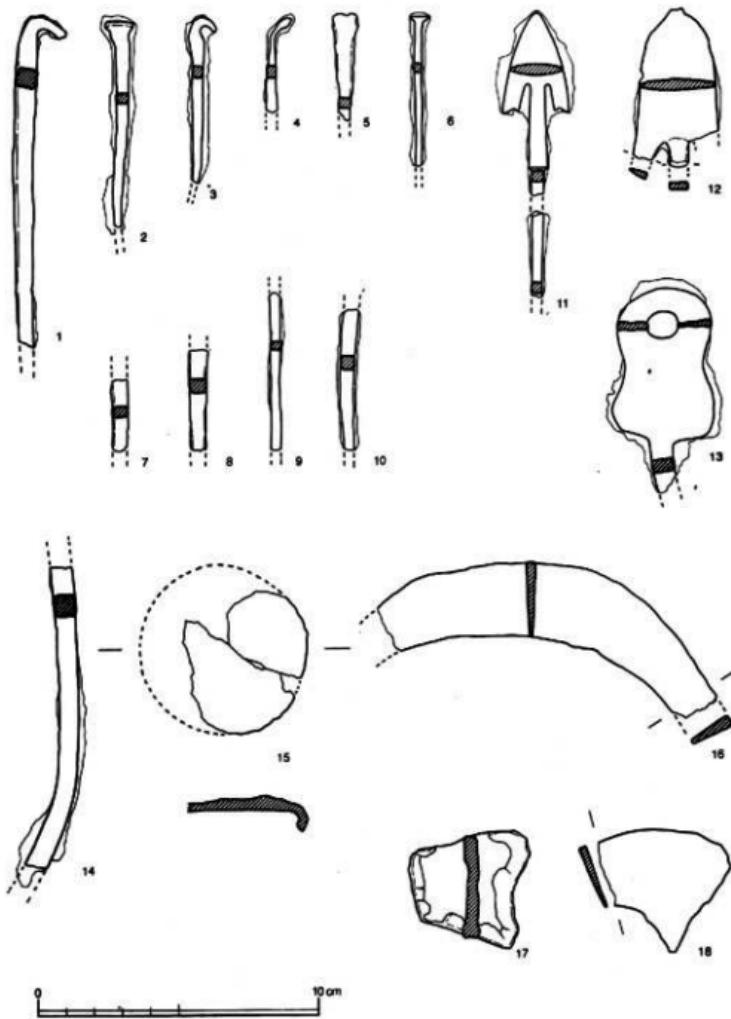
安部善三郎『釘』1916年



第189図 西地区トレンチ鉄器実測図



第190図 宝林寺出土刀実測図



第191図 中央地区鉄器実測図

第6節 土錘

土錘は中央地区の井戸から1点、落込み1・3・4・6から5点、屋外炉4点、土壤39から1点、ピット3点、東地区は井戸1・2から3点、ピット2点出土しており、遺構外の出土点数をあわせると総数80点を数える。残存度は約半数が一部欠損、あるいは半分欠損しており、全体的には良好とは言い難いが計測値をまとめたものが第2表である。形態は中心に穴を開いた(1)管状土錘と、側面に溝を切った(2)有溝土錘の2形態である。

(1) 管状土錘

管状土錘は1点だけ須恵質のものが出土しているが、あとはすべて土師質である。形態としては胴部にふくらみを持つものが大半で、両端部の径と胴部径がほとんど変わらない円筒形のものは少ない。製作方法は棒状のものに粘土を巻きつけて成形し、表面はナデで調整をして仕上げる。

以下、管状土錘の長さ、太さ等により6種類に分けることができる。

① 長さ2.0cm前後、胴部径1.0cmとかなりの小型で胴部は若干ふくらみを持っている。胎土は密であり、表面のナデ調整も丁寧で端部をヘラで切断している。焼成良好で淡橙色を呈する。

〔〔第71図 19〕は第2表 土錘計測表による整理番号(6)である。以下この整理番号で表す。〕

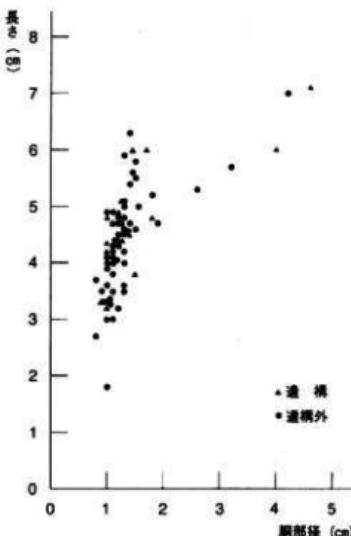
② 長さ2.5cm~4.0cm、胴部径0.8cm~1.5cm
のもの（9・50・60・61・68~72・74他）全体
的に両端部が細くなっている小型である。

③ 長さ4.0cm~5.0cm、胴部径1.0cm~1.4cm
のもの（1・10・12・15・16・18~21・24・25
・17・40~43・45~59他）、長さが4.5cmまでの
ものはそれ以上の長さのものに比べ胴部径が1.0
cm~1.3cmとやや細である。この形態は宝林
寺北遺跡出土の約4割を占める。

④ 長さは③同様4.0cm~5.0cmであるが、胴
部径が1.5cm~1.8cmと④に比べ胴部がやや太形
のもの（23・39他）。

⑤ 長さ5.0cm~6.3cm、胴部径1.3cm~1.8cm
のもの（2・26・30・31・35他）。

以上②~⑤には円筒形のものではなく、大小は
あるが全て胴部にふくらみを持つものである。
焼成は全て良好であるが、胎土は同じでなく分
類が可能である。密で赤橙を呈するもの、同じ

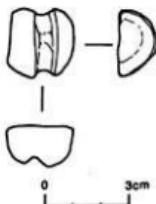


第192図 出土土錘法量図

く灰白色のもの、同じく黒灰色のものとほぼ3つのタイプがある。

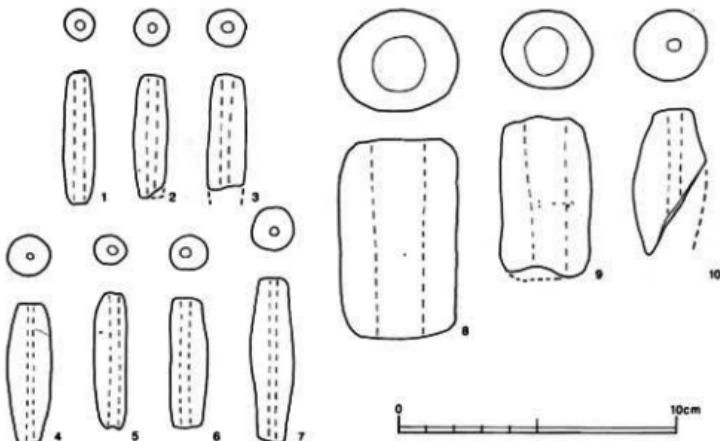
⑥ 長さ5.3cm~7.0cm、胴部径2.5cm~4.6cmのもの（7・17・27・28・29）は全体的に大型で、重量も重くなっている。この形式のものには端部径は1.1cmであるが、胴部径は2.6cmと大きくふくらみを持つもの（29）と端部径と胴部径がほとんど変わらないもの（7・17・27・28）とがある。前者は胎土は密で焼成も良好であり、赤褐色を呈する。後者には、1点須恵質のもの（27）を含み計4点ある。（27）は中の孔径が1.85cmと大きく、表面の調整はナデを施しており、両端部には部分的に指による圧痕が残る。胎土は細かい砂粒を含むが焼成は極めて良好で青灰色を呈する。他、土師質のものは、孔径が須恵質のものと同じく2.0cm前後で大きいが、表面のナデ調整は丁寧で両端部はヘラで切断した後ナデを施したと見られ、胎土は密で焼成も良好、灰白色を呈するもの（17・28）と、両端部が成形のままであると思われ、やや粗雑なつくりで、胎土は1mm~3mmの砂粒を含み焼成も甘いもの（7）がある。

以上、管状土錘の形態及び調整等について6種類に分けて述べたが、宝林寺北遺跡出土の土錘におけるそれぞれの占める割合は、③が最も多く36%、次に多いのが②の24%で、以下多い順に⑤の16%、⑥の6%、④の4%、①の1%である。

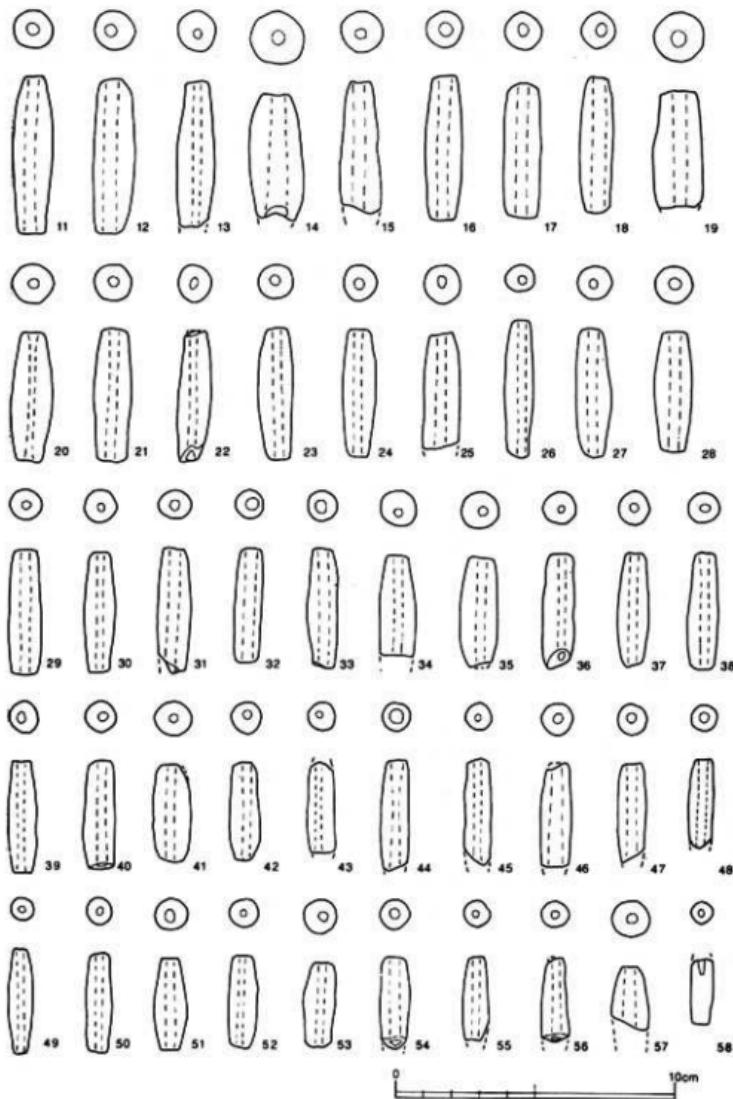


(2) 有溝土錘

球形に近い土製品に1条の溝をめぐらせたものであるが、当遺跡 第193図 土製品実測図



第194図 土錘実測図(1)



第195図 土錐実測図(2)

第2表 土 種 計 測 表

整理番号	図版番号	長さ (cm)	肩部径 (cm)	孔 径 (cm)	重 量 (g)	備考	整理番号	長さ (cm)	肩部径 (cm)	孔 径 (cm)	重 量 (g)	備考
1	第39図	4.5	1.35	0.3	8.4		41	第15図22	4.7	1.2	0.3	(7.8)
2	第55図	6.05	1.7	0.5	18.5		42	23	4.65	1.2	0.3	6.1
3	第64図	(4.05)	(1.25)	0.45	(4.7)		43	24	4.5	1.2	0.3	6.4
4	第65図	(2.2)	(1.55)	0.5	(5.8)		44	25	(4.1)	1.3	0.4	(7.1)
5	第71図14	(3.3)	0.95	0.35	(2.1)		45	26	4.85	1.05	0.3	5.4
6	15	(1.8)	1.0	0.3	(1.1)		46	27	4.55	1.25	0.25	6.6
7	第87図1	6.0	4.0	1.5	(53.5)		47	28	4.2	1.35	0.35	7.6
8	2	(5.0)	1.25	0.3	(8.1)		48	29	4.55	1.2	0.3	6.0
9	3	3.8	1.45	0.45	6.3		49	30	4.25	1.1	0.3	5.2
10	4	4.2	1.0	0.3	4.0		50	31	(4.45)	1.2	0.35	(5.5)
11	第19図5	(4.4)	1.15	0.3	(3.7)		51	32	4.1	1.0	0.45	4.6
12	第131図1	4.75	1.05	0.35	5.0		52	33	4.2	1.1	0.35	4.8
13	2	(4.8)	1.8	0.55	(14.5)		53	34	(3.55)	1.3	0.3	(7.3)
14	3	(3.2)	1.0	0.3	(2.6)		54	35	(3.9)	1.35	0.3	(7.3)
15	第18図1	4.4	1.15	0.25	5.9		55	36	4.1	1.1	0.25	4.7
16	2	4.9	1.25	0.3	6.8		56	37	(4.0)	1.1	0.2	(5.0)
17	第16図	7.1	4.6	2.0	124.2		57	38	4.1	1.1	0.4	5.1
18	第15図1	4.2	1.0	0.3	4.9		58	39	4.0	1.0	0.35	4.4
19	2	4.3	1.05	0.3	4.3		59	40	3.85	1.15	0.35	5.0
20	第19図1	4.7	1.1	0.35	4.3		60	41	3.5	1.3	0.3	5.5
21	2	4.35	1.2	0.3	(5.9)		61	42	3.5	1.1	0.35	3.9
22	3	(4.1)	1.35	0.4	(6.8)		62	43	(3.2)	1.0	0.2	(3.8)
23	4	5.0	1.55	0.2	10.8		63	44	(3.9)	1.0	0.4	(3.6)
24	5	4.8	1.15	0.35	6.8		64	45	(3.7)	0.95	0.3	(3.2)
25	6	4.6	1.3	0.3	8.4		65	46	(3.65)	1.1	0.4	(4.1)
26	7	5.85	1.55	0.3	12.4		66	47	(3.5)	1.0	0.35	(3.9)
27	8	7.0	4.2	1.85	116.5	須恵質	67	48	(3.3)	(0.9)	0.3	(2.6)
28	9	5.7	3.25	1.7	(57.4)		68	49	3.7	0.85	0.25	2.4
29	10	(5.2)	(2.6)	0.45	(23.7)		69	50	3.5	0.9	0.25	3.3
30	第15図11	5.6	1.4	0.4	10.2		70	51	3.2	1.2	0.35	3.3
31	12	5.45	1.5	0.4	11.7		71	52	3.3	1.0	0.2	3.6
32	13	(5.15)	1.4	0.3	(10.9)		72	53	3.0	1.15	0.4	3.5
33	14	(4.5)	1.9	0.45	(14.5)		73	54	(3.3)	1.05	0.4	(3.3)
34	15	(4.7)	1.45	0.45	(9.4)		74	55	3.0	0.95	0.3	(2.6)
35	16	5.1	1.3	0.4	8.1		75	56	(2.95)	1.0	0.3	(2.5)
36	17	4.8	1.3	0.45	7.5		76	57	(2.25)	1.3	0.35	(3.5)
37	18	4.8	1.2	0.45	6.0		77	58	(2.3)	0.8	0.25	(1.3)
38	19	(4.1)	1.8	0.6	(14.6)		78		(3.1)	0.9	0.2	(1.6)
39	20	4.6	1.5	0.3	9.9		79		(3.3)	(0.95)	(0.3)	(1.5)
40	21	4.7	1.35	0.3	8.7		80	第15図2	2.5	2.3	0.8	(7.5) 有溝土鱗

○() 現存の長さ、径、及び重量。

○図版番号の無いものは固化していない。

では、第193図のようにちょうど半球形の状態で出土した。胎土は密で淡橙色を呈しており、切断面も同じ淡橙色である。このように色調及び切断状況が良いことから半球形の状態で完形と思われる。なお、これは沈子として使用されたと考えられるが断定はできない。

次に土鍤の最も重要な要素である重量であるが先に分類した6種ごとにまとめる。①は一部欠損しているが、1.5g前後と考えられる。②の完形重量は約2gから6.3gまでの間で特に3g前後に集中している。③では大部分が完形の状態であり、重量は4.0gから8.4gまでの間に分布し、ばらつきがみられる。④は完存で出土したものはないが、残存重量は3点で、14.5gが2点と14.6gが1点となっている。⑤は8.1gから18.5gの間で、10g前後に集中している。⑥は50g前後のものと100gを越えて、完存のものでは116.5gのものと124.2gのものがある。

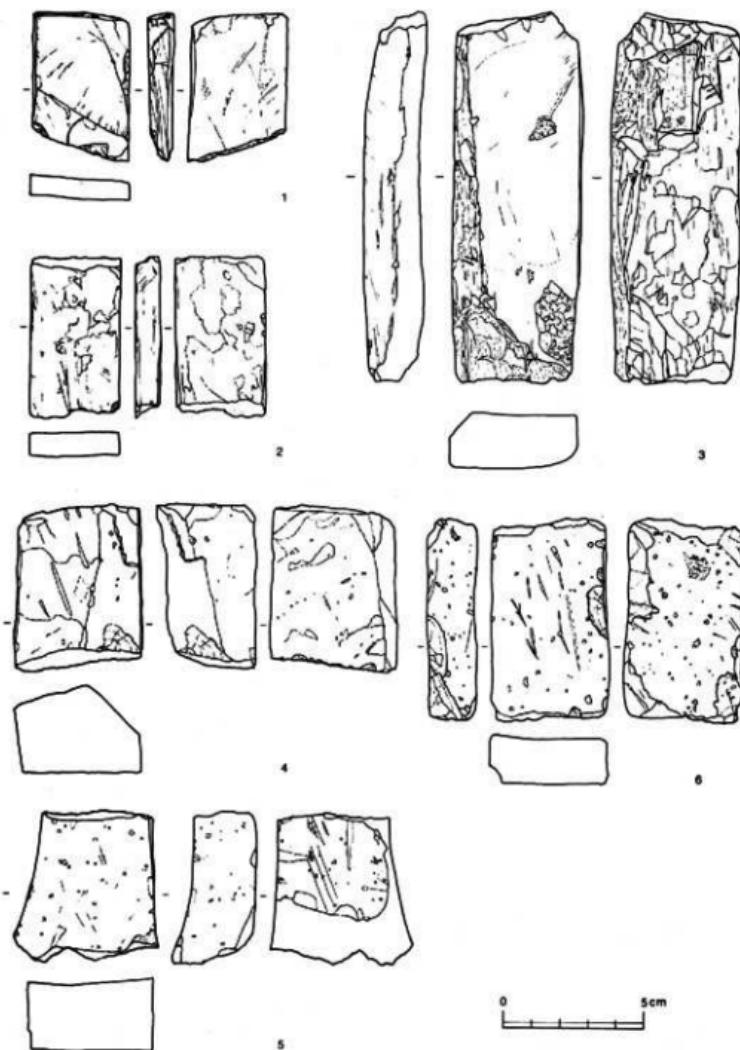
以上、土鍤の法量及び形態についてみてきたが、まず、総数は80点を数え、有溝土鍤と考えられる1点を除いてあと79点はすべて管状土鍤であること、第二に材質は土師質がほぼ全体を占め1点だけ須恵質を含む。第三に法量によると、長さ、胴部径に比例して重量も重くなり、宝林寺北遺跡出土の土鍤の9割が、約2gから20gに分布し主に7g前後に集中している。第四に年代は管状土鍤については、伴出土器からみて平安末から鎌倉時代におくのが妥当であろう。また、ただ1点出土した有溝土鍤と思われる土製品につきては球形という形態から弥生時代後期を中心とする時期と考えられており、当遺跡でも古墳時代初頭の土器類が出土していることからこの時期の遺物と考えるのが妥当かと思われる。

第7節 石器

石器としては、砥石7点・器種不明2点の計9点が検出され、内8点は欠損している。砥石は小型で重量20g～200g程度があり、短冊形を呈していたと考えられる。石材は、構成粒子の細かい凝灰質泥岩、砂岩、凝灰岩である。全面とも研磨が激しいものがあり、特に明瞭な断面が浅い「V字形」を呈する擦痕を有するものがある。器種不明のものは大型で重量1kg以上あり、欠損が著しい。平面形は不明であるが、盤状を呈していたと考えられる。石材は、構成粒子の比較的粗い流紋岩である。研磨面は表面のみに認められる。

以下、各々の石器について記述していく。尚、表裏については、より研磨が激しく、主として使われていた面を表面とする。

- (1) 凝灰質泥岩製。表面には二面の研磨面があり、境に棱線がある。この研磨面により、下端は刃状を呈している。上端及び両側面は研磨によって整形している。研磨方向については、両面とも擦痕の方向が一定しておらず、研磨が多方向に行われたことを表す。
- (2) 凝灰質泥岩製。両側面は研磨によって整形している。研磨方向については、表裏とも側縁に平行な直線状と考えられるが、片岩質のため、剥落が激しく、明確ではない。
- (3) 凝灰質泥岩製。中央部が緩やかに凹み、左側面が一部欠損している。研磨方向については、

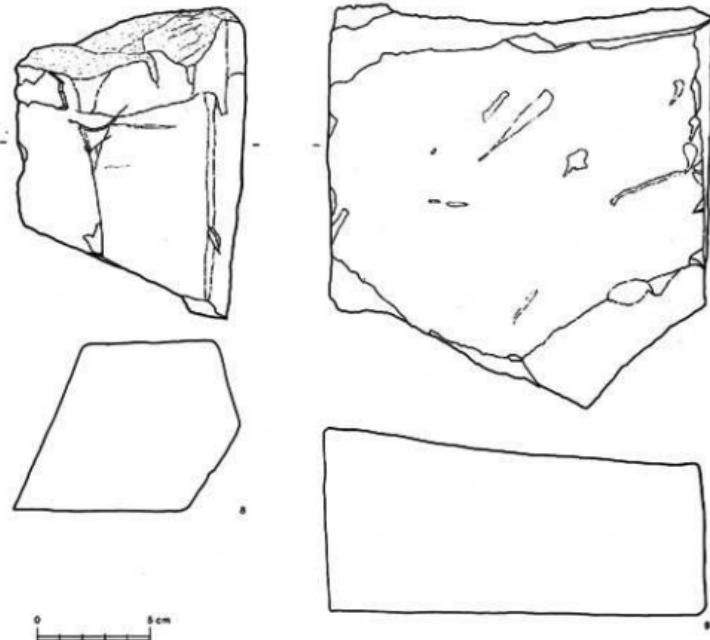
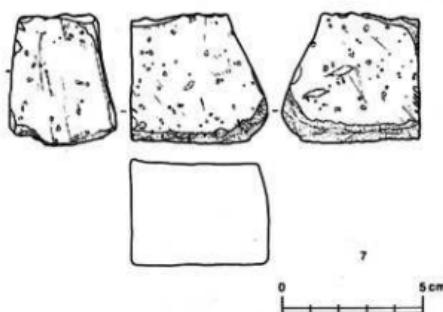


第196図 石器実測図(1)

表裏とも側縁に平行な直線状と考えられるが、片岩質のため、剥落が激しく、明確ではない。特に裏面は、大きく剝落している。

表面には、直線状の研磨痕の他に、上部に比較的大きな擦痕がある。左側面にも擦痕があり、研磨に利用されたと考えられる。右側面は、研磨によって整形している。

(4) 砂岩製。形態は、他とは違い、横断五角形を呈する。表面には比較的大きな擦痕があり、研磨方向はやや左上がりである。裏面は風化のため明瞭でない。両端及び両側面は切斷のみによって整形している。



第197図 石器実測図(2)

第3表 宝林寺北遺跡石器観察一覧表

No.	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	欠損部位	備考			
1	砥石	凝灰質泥岩	5.3	3.9	0.8	26.3	下端	構成粒子は極細粒で研磨面は滑らか			
2	+	+	(5.8)	3.2	0.9	33.9	上下両端	+	+	+	+
3	+	+	(13.2)	4.1	2.0	211.8	+	+	+	+	+
4	+	砂岩	(6.0)	4.6	3.1	146.2	/	粗粒	粗い		
5	+	凝灰岩	(5.4)	5.1	2.7	105.4	上下両端	+	+	+	滑らか
6	+	+	(7.2)	4.3	1.7	90.0	+	+	+	粗い	
7	+	+	(4.6)	4.9	3.8	123.6	上端	+	+	+	+
8	不明	流紋岩	(13.7)	(10.3)	7.6	1,525	下端、左側縁	粗粒	滑らか		
9	不明	+	(17.8)	17.1	8.1	4,230	上下両端	+	+	+	粗い

() 内は残存部分の計測値。尚、実測図では、欠損部位は白スキとする。

- (5) 凝灰岩製。縦断面は、下端がわずかに高い緩やかな台形を呈している。裏面には、断面が浅い「V字形」を呈する明瞭な擦痕がある。両側面の縦断面も緩やかな台形を呈しているので、研磨に利用されたと考えられる。研磨方向については、裏面の擦痕をみると、方向が一定しておらず、研磨が多方向に行われたことを表す。
- (6) 凝灰岩製。表面は中央部が緩やかに凹み、断面が浅い「V字形」を呈する明瞭な擦痕がある。研磨方向は左上がりである。裏面にも擦痕があり、研磨方向はやや左上がりである。右側面は研磨によって整形され、左側面には擦痕があり、研磨に利用されたと考えられる。
- (7) 凝灰岩製。縦断面は、下端がわずかに高い台形を呈している。表面は擦痕が明瞭でなく、研磨方向は明確ではないが、裏面は左上がりである。両側面の縦断面も緩やかな台形を呈しているので、研磨に利用されたと考えられる。左側面には側縁に平行な直線状の擦痕がある。
- (8) 流紋岩製。上端、裏面及び左側面は、自然面を残す。風化のため研磨方向が明瞭でない。
- (9) 流紋岩製。風化のため研磨方向が明瞭でない。表面の一部は焼成のため、黒変している。

以上のように、宝林寺北遺跡の石器は、小型のもの（砥石）と、大型のもの（器種不明）に二分される。砥石は使用段階に応じて、「荒砥（礪）」、「中砥（青砥）」、「仕上げ砥（合わせ砥）」に分けられるが、粒子の粗いものが荒砥に、粒子の細かいものが、中砥・仕上げ砥として使い分けられている。本遺跡の砥石では、1・2・3が構成粒子が非常に細かく、仕上げ砥に使われたと考えられる。各々の砥石の研磨した対象物は不詳であるが、中央部が緩やかに凹んでいるものや、縦断面が台形を呈するものがあるので、刃物や鎌などの研磨に使われたと考えられる。しかし、この遺跡では、鉄製品としては、鍋、釘などが検出され、刃物、鎌は検出されていない。釘の研磨を考慮させるものとして、断面が「V字形」のシャープな擦痕を有するもの

が検出されている。大型のものは、表面が研磨されているが、その機能については、断定し難い。

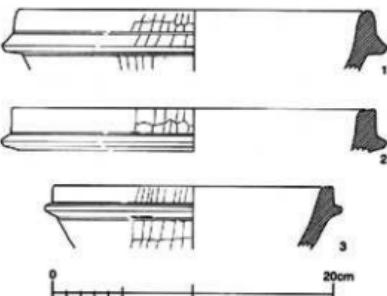
第8節 石鍋

滑石製の石鍋が14点出土している。その内図化できるものは6点あり、口縁部が5点、底部が1点ある。第29図(9)は最も残り具合が良いもので、口縁部の約4分の1が残存している。口径は25cm、残存高8.5cmである。鍋の上方が下方よりも厚くて、上方の厚みが1.6cm、下方の厚みが1cm程度であり、鍋の形態は角ばった方に分けられる。細かいノミの調整痕がよく残っており、横方向に一段ごとに調整した様子が窺える。1cm程度のノミを使用したと思われる。第53図(2)は唯一出土した底部の破片で4分の1弱残存している。底径11.9cm、残存高3.05cmである。第144図は口径20.8cm、残存高6.0cm、鍋の上方の厚み1.7cm、下方の厚み1.2cmである。鍋は丸味を帯びている。幅1.3cm程度のノミを使用していると思われる。第198図(1)は口径24.8cm、残存高4.3cm、鍋の上方の厚み1.3cm、下方の厚み1cm弱である。残存部分が、口縁部の12分の1だけなので、ノミの調整痕がはっきりしないが、1cm程度のノミを使用したのではないかと思う。第198図(2)は鍋の上方のみを残している。口径25.6cm、残存高3.0cm、厚み1.4cmである。ノミは幅1.4cm程度のものを使用したようである。第198図(3)は口径19.8cm、残存高4.4cm、厚み1cm前後である。他のものと比べると口径も小さく、厚みも薄い。また、ノミも幅1cm弱と小さいものを使用したと思われる。

石鍋には、分厚い口唇から鍋が巡っているものと、対をなす耳を持っているものの2種類があるが、当遺跡では鍋を巡らせたものしか出土していない。そして鍋の形態としては、3点が角ばっており、2点は少し丸味がある。

素材である滑石はきわめて軟質で、簡単な工具によって加工ができる。それ故に、石鍋の内側を抉りこむのが他の石材よりも比較的容易なのである。また、滑石を熱した場合、熱の残留時間が長く、高熱によっても割れにくいという特性がある。つまり、以上の特性から考えて、滑石は石鍋として製作する上に、また機能する上にも適した石材だといえる。

兵庫県下にも、滑石を産する所は、宍粟郡安富町から養父郡大屋町・八鹿町にかけてあるが、これだけ大きな製品を造り出すのは不可能である。滑石を分析した結果、長崎県の西彼杵半島のものであるという、神戸大学教授・後藤博綱氏の御教示を得ている。



第198図 石鍋実測図

製作工程については、大瀬戸町教育委員会「大瀬戸町石鍋製作所遺跡詳細分布調査報告書」昭和55年に詳しく述べられている。それによると、まず粗型を剥ぎとり、ノミを打って粗型を形造っていく。そして、粗型は調整が加えられて算盤玉状の形が造り出され、この時の突起部が次第に製品を巡る鋤として加工される。容器の内側となる部分を造る場合、ノミは対象物に対して直角の状態で打たれていく。そして、内部くり抜きが完了すると器の全面に細かい調整が加えられる。当遺跡出土の石鍋は、この際一段ごとにノミで調整していると思われる。更に研磨仕上げが行われ、石鍋が完成する。

これら石鍋の他に、その転用と思われる温石が1点出土している。第53図22がそれで、横8.8cm、縦の残存長10.1cmで、厚みは1.5~2.3cmである。初めに述べた熱の残留時間が長いという特性を利用したもので、カイロのようなものである。加熱して布にくるみ、穿孔されている所に紐を通して使用したものと思われる。

第9節 木器

木器は中央地区南西隅の大溝から全て出土している。大溝は、宝林寺の寺域を画する北西部分の堀と思われ、国道2号線開設まで機能していた堀である。そのため、時期的に下るものも含まれておらず、加工痕の看取出来ない木材や自然木も少量出土している。出土状態・土層からは時期を限定出来ない資料である。図化した木器は5点で、全て大溝底面には着いておらず、埋土である黒灰色粘土層から出土している。用途で言えば、服飾具と容器が出土している。

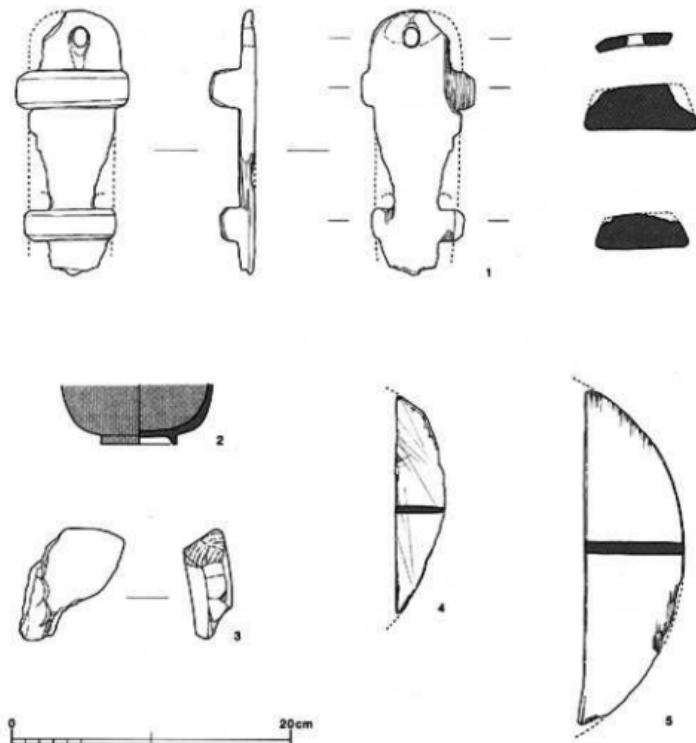
(1)は下駄である。よく使われたもので、足裏の磨耗痕も明らかである。指の痕跡から右足の下駄であろう。上から見て、小指側とかかと部分を欠失しているが、ほぼ全体像を推測出来る。現存部では前歯のところを最大幅とし8.1cmを測る。残存長は18.8cmであるが、歯の先の長さが等しいと仮定するならば、21cm前後かと思われる。前歯は、長さ2.7cmで高さ2.1cmを測り、断面U字形に磨滅している。後歯も磨滅している以外は完存しており、幅6.6cm、長さ2.2cm、高さ1.4cmを測る。前歯以上に磨滅しており、断面形は隅とれた逆台形を呈している。後歯の方が幅が狭く、磨耗度も高い。歯間は7.1cm離れている。後歯に接して鼻緒孔が穿たれていながら、一部を残すのみである。推定孔径は、前の鼻緒孔と同じ程度の1.0cm前後と思われる。前端は隅円になった形態で台の厚みは現状では約1cmである。木取りは、板目材で木裏を上面にする。樹種鑑定は行っていない。

(2)~(5)は容器である。(2)は挽物、(3)は剣物、(4)(5)は曲物である。(2)は漆塗りの椀で、口縁部を欠いている。内外面ともに朱漆を塗っている。底径5.4cm、残存高4.4cmを測る。高台は削り出しておらず、高さ0.6cmである。

(3)は、全体像は想定出来ないが、端面を作り出し円外面とも平滑にしていることから容器と考えた。外面に木表を持ってきて、横木取りしている。口縁端面は2.8cmで残存高6.3cmを測る。

片側側面にノミ状工具で粗削りした痕跡が3カ所見られる。下面にも一部生きた面があり、不定形となり、単純な鉢などにはならないと思われる。他の用途を考えた方が良いかもしれない資料で、容器としての断定は出来ない。

(4)(5)はともに曲物の底板である。(4)は残存長15.5cm、残存幅3.6cm、厚さ0.5cmを測る。推定直径は22cmを測り、約6分の1強残っている。10数本の切り痕が上面に残っている。(5)は(4)に比べて大形の底板で残存長23.7cm、残存幅7.2cm、厚さ0.9cmを測り、(4)と同じく柾目材である。復厚径28cmを測り、約4分の1残存している。上面に黒漆と思われるが塗布されている。



第199図 木器実測図

第10節 古式土師器

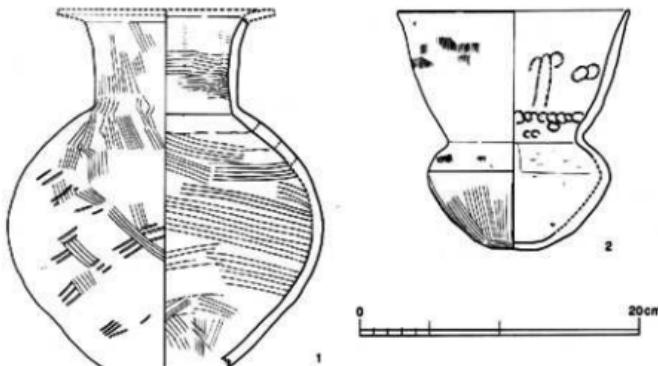
遺構内や上層からも少量出土しているが、大半は宝林寺北遺跡の遺構面下から出土している。濃密な包含層とは言えないが、G08を中心に比較的集中して出土している。出土位置は中央地区がほとんどであるが、西地区でも少量、東地区で数点認められる。中央地区の集中部分を中心に精査したが、遺構は検出できなかった。

出土量は、コンテナ6箱になるが、図化したものは58点である。器種は、壺・甕・鉢・瓶・高杯・器台である。

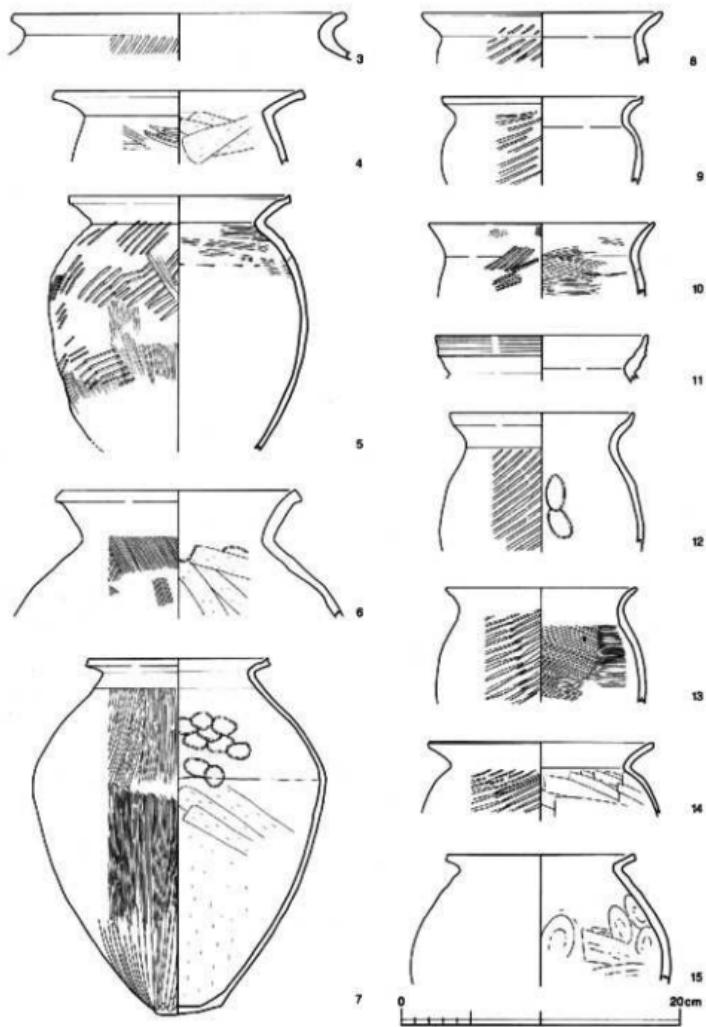
壺 [(1)・(2)・27~42・50~53・55・56]

(1)は口縁部ならびに底部を欠失しているが、ほぼ全体像を推測出来る資料である。やや長い球形の胴部に直口する頸部がつき、水平に近い角度で外反する口縁部になるプロボーションをしている。底部は残っていないが、再成形の突出平底となるものと思われる。胴部中央やや上に最大腹径をとり、22.4cmを測る。残存高25.0cm、頸部径10.2cmで推定口径は15~16cmとなるものと思われる。外表は赤褐色に焼き上げられ、砂粒を含む。外面はタタキで形成したのちユビ整形と粗いハケ整形を併用している。肩部と胴部下半に黒斑が見られる。内面は外面と同じ3~4本/cmの粗いハケで整形している。頸部内面は同じハケを断続的に横方向に使用しているため、止めた部分に原体の痕跡が残っている。

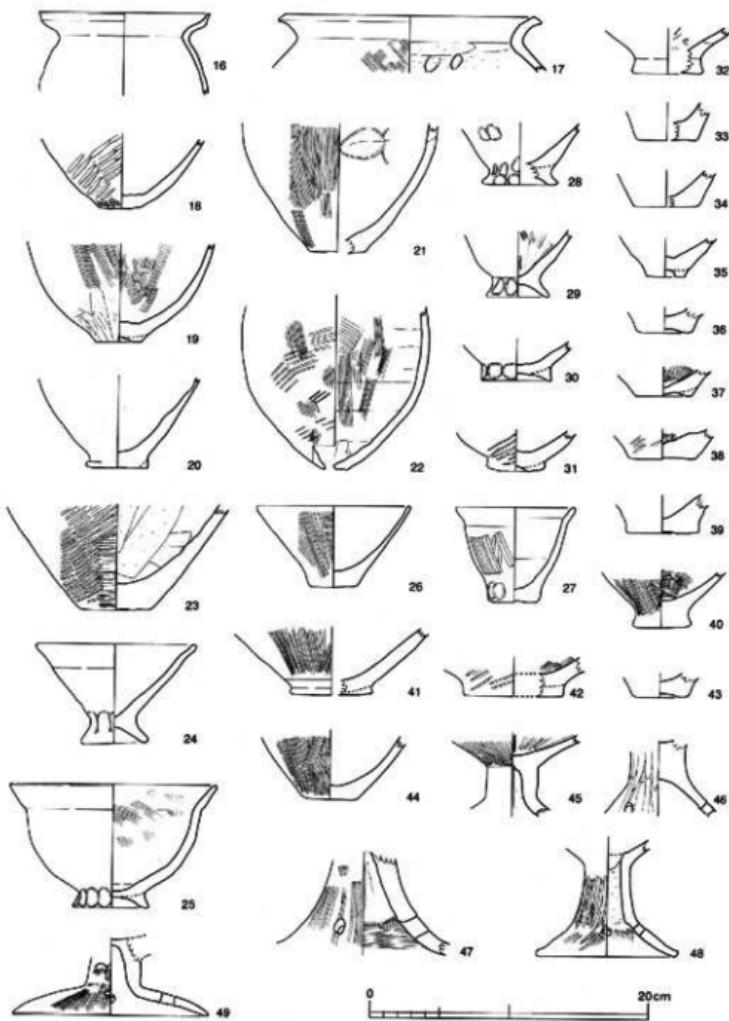
(2)は特殊タイプの壺で、とりあえず長頸壺として報告する。口径16.5cm、器高17.0cm、頸部径9.6cm、最大腹径12.9cmで、胴部に対して口頸部が長い形態である。胴部7.5cmに対して口頸部は7.5cmを測る。個々に観察すると、小形の壺にやや内壁気味に長く延びる口頸部がつく土



第200図 古式土師器実測図(1)



第201図 古式土師器実測図(2)



第202図 古式土師器実測図(3)

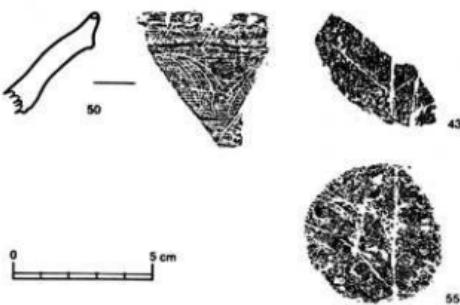
器であるが、全体像から受ける印象は小形丸底壺の大形品である。精製土器ではないが、特殊な意味を有する土器と考えられる。色調は外面は褐色～暗褐色、内面は明褐色～灰色をしており、砂粒を含んでいる。胴部内面はヘラケズリのちナデで仕上げている。胴部外面は4～5本/cmの粗いハケで整形したのち細かいハケで整え、上半はヨコナデで仕上げている。底

部は丸底であり、ヘラで調整している。口頸部外面は、細かいハケ整形のちヨコナデが施され、内面はユビ整形・ユビ調整をし、丸くおさめた端部周辺をヨコナデで仕上げている。胴部との接合部は指圧痕が多く見られる。胴部に黒斑が残っている。

50は二重口縁壺の口縁部の破片で、外面に文様が描かれている。口縁端部4.5cmしか残っていないため、復原径を出すことは不可能であるが、20cm余りの壺と思われる。二重口縁の上半部の破片である。口縁端部には刻目文が施されている。口縁端部から稜線となる段を有してから緩やかに擬口縁部へ向かって続いている。刻目文と稜線までの間に山形文が、擬口縁と稜の間には大きな山形文とその間に絵画文が描かれている。色調は、器表は赤褐色、器肉は灰褐色である。チャート・長石の砂粒を含み、ヨコナデで仕上げられている。文様は全てクシで描かれている。絵画文は具象化されているが鳥と思われる。

51も二重口縁壺の口頸部である。頸部は大きく曲がり、擬口縁部を作ったのち直立気味に外反し、端部は角張っている。口唇部には浅い凹線状のへこみがある。破片が全体の8分の1程度のものなので、残存部は少ない。そのため、明確ではないが、2個連結した円形浮文が8カ所付加されているものと思われる。円形浮文は、径1.5cm前後で中に0.8cmの竹管文が施文されている。復原径29.0cm、残存高10.2cmを測る。内面はユビ整形のちヨコナデで仕上げられ、外面はナデ整形とともに細かいハケで整形し、口縁部はヨコナデしている。浮文は当然ながら前後に施している。

52は単純口縁の口頸部で、口径15.2cm、残存高6.5cmを測る。外面は赤褐色で、ユビ整形・ユビ調整をしている。内面は赤褐色～黒褐色で、胴部内面は黒っぽい。内面はユビ整形のままで、口縁部はヨコナデで仕上げている。口縁内面には有機質が付着している。顔料が塗布されているのであろうか。口縁部外面に突帯状に粘土紐を付け、段を作っている。胎土にはチャート・長石のクサリレキを含んでいる。



第203図 古式土師器拓影

53も口縁部の破片である。復原径17.0cmの小形の壺で口縁部のみの破片で、粘土紐の継ぎ目で剥離している。口唇部に竹管文を全体に施している。保存状態はやや悪いが、茶筒色を呈する精良な胎土で作られた土器である。一見すると黒雲母土器かと思われるが、雲母は見られない。

37～41/42/55/56は底部で壺と考えられる。37は底径4.4cmで上げ底になっている。外面は黒斑が見られる。内面はくもの巣状ハケで整形している。38は二次焼成を受けている可能性がある底部で最大5.0cm、最小4.2cmのいびつな底部となっている。外面はタタキ成形で、くもの巣状のハケで整形したものと思われるが、粘土が余り、工具を止めた部分が凹んでいる。底部再成形のため、なおさら誇張されている。39は底径5.2cm、残存高3.2cmを測る。表面磨滅しているが、外面はタタキのうちナデで整形、仕上げられたものと思われる。内面もナデ調整で黒褐色を呈している。40も内外面ともハケ整形され、底径6.0cmを測る。42は外面はタタキで成形されたままで、内面はヘラ状工具で調整されている。55も外面はタタキ成形されている。タタキは逆にして時計回りに施している。内面はくもの巣状に細かいハケで整形している。底面はやや上げ底になっている。56も外面はタタキ成形であるが、ユビで仕上げており全体的にではないが、タタキメを消している。一部内面と同じハケメが見えることから、併用して整形していたかもしれない。内面はハケ整形しており、そのうち底部再成形したため、底部上面はユビの痕跡が残っており、平滑ではない。5点とも全て底部再成形の底部である。その痕跡である指頭圧痕が外面に顕著に見られる。同じ再成形であるが、底面の状況は3種あり異なる。40は丁寧に底面をナデで仕上げており、蓋として機能していたと考えても疑問のない土器である。また、小形であることから鉢の底部かもしれない。いずれにしても丁寧に作られた土器である。38/39/56も丁寧ではないがナデで仕上げている。42は底面がハケで整えられている。37/42/55は底面に木葉痕が残っている。

観 ((3)～(21)・(23)・(30)～(36)・(43)・(44)・(58))

(3)～(7)は口縁部で、他は底部である。(7)は図上ではあるが唯一の完形品である。

(3)は大形品で、緩やかな短い口縁部で稜を持たない。胴部外面はタタキメが施されており、口縁部はヨコナデで仕上げている。(4)はくの字形の口縁で端部は角張っている。外面はタタキのうちユビ整形し、内面はヘラケズリである。口径17.6cm、残存高5.2cm。(5)は底部を欠くが全容が想定できる土器である。外面は右上りのタタキを施したのち、ハケ整形している。胴部下半の方がタタキメを多く消している。強いタタキメで断面にも凹凸が窺える。外面上半には煤が付いている。内面は細かいハケ整形してからナデで仕上げている。部分的に粘土の継ぎ目が見られる。口縁部はヨコナデされており、くの字で端部を上方につまみ出している。胎土は緻密で、色調は外面は黄褐色～黄灰色、内面は灰褐色。口径15.8cm、残存高18.4cm。(6)はくの字形であるが、端部近くでやや外反しており、端部は外方へ肥厚している。口縁部の厚みは1cmとやや厚い大形の土器である。口径16.7cm、残存高9.0cmで、外面はハケ整形、内面はヘラケズ

リののちユビ調整で、口縁部はヨコナデである。色調は赤褐色である。

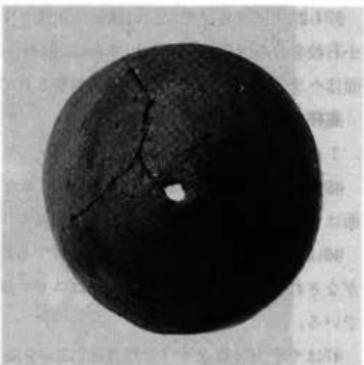
(7)は図上ではあるが唯一の完形品である。口径12.8cm、底径4.6cm、器高25.4cmで、器高の上から3分の1のところに最大腹径21.2cmを有し、最大腹径の部分を変換線としている。やや不安定な平底から急角度が上がり、最大腹径のところから、やはり銳角に内側に入り頸部となり、短いバチ状の口縁が付く。全体に薄く仕上げられている。内面はヘラケズリののち胴部上半はユビ整形。内面には明らかに指圧痕が並んでいる。口縁部はヨコナデで、外面は下半はヘラミガキで、上半はハケメが施されている。底面もヘラミガキで仕上げられている。色調は茶褐色～褐色で砂粒を少量含んでいる。

(8)～(10)は外面タタキ成形された土器で、(8)(10)は内面ハケ整形だが、(9)はナデ調整である。全て右上りのタタキである。(8)(10)はタタキ施工したのち、口縁部を折り曲げて成形している。口径は、(8)が17.4cm、(9)が14.5cm、(10)が16.2cmである。(9)は強いヨコナデで頸部を回ませており、口縁端部はつまみ上げている。(11)は口縁部に擬凹線を有するタイプで、口径15.4cm、残存高3.4cmを測る。内面はヘラケズリで口縁部はヨコナデである。(11)は口縁端部に擬凹線を有するタイプで、口径15.4cm、残存高3.4cmを測る。内面はヘラケズリで口縁部はヨコナデである。(12)(13)(14)も外面右上りのタタキメが施されている。(13)は内面ユビ整形、(13)はハケ整形、(14)はヘラケズリである。3個体とも口縁端部の形は異なるが、全てヨコナデで仕上げている。(15)は全体的に磨滅しているが、外面はハケ整形、内面はユビ成形のちヘラケズリされている。やや器肉が厚いが、短いバチ形の口縁部も持つ臺である。(16)も磨滅のため成形技法は不明である。口径12.2cmと最大腹径と同じである。口縁部は上方に向かってつまみ出されている。(17)は口径17.8cmとやや大形で短く端面が角張った口縁部を持つ。内面は指圧痕のちヘラケズリ、外面はハケ整形である。

(18)以下は底部である。タタキ成形の底部は(18)(23)(31)(58)である。58はタタキののち6～7本/cmのハケ整形している。底部再成形した突出平底の底部は(20)(31)(32)で、平底の底部は(18)(19)(21)(23)(33)～(36)(43)(58)である。

瓶 [22]

壺を焼成後に穿孔した瓶である。外面は右上りのタタキのちハケ整形している。内面は2種のハケで整形されている。胎土は小石粒を多く含み、色調は褐色～赤褐色である。最大腹径13.4cmと中形の土器である。



鉢 (24～29・57)

第204図 瓶 底 部

図上でのものも含めて完形が5点と底部が2点である。他に要の底部としたなかに鉢が含まれているかもしれない。分類すると中形2625262829と小形2957に分けるか、脚台のあるもの26252829とないもの262757に分けるなど細分が可能である。

25は褐色～黄灰色を呈する口径14.7cm、器高8.8cm、脚台径5.4cmを測る中形の鉢である。口縁部は外方へ直線的に折り曲げて作った口縁で、ヨコナデで仕上げている。脚台部は鉢本体整形後接合しており、外面には指頭圧痕が明瞭に見られる。内面はハケ整形のちユビ調整しており、外面はユビで仕上げている。

26も脚付きであるが29より小形である。口径11.6cm、脚台径4.8cmで、縁と口縁は水平でない。器高は7.0cmを測る。色調は赤褐色で砂粒を少量含む。直線的に外方へ広がる鉢で、端部は丸くおさめている。脚台は手捏ね風に作られており、ユビ成形のち接合部のみヘラ状工具で整えている。内外面ともユビ整形・調整が行われており、口縁部のみヨコナデが施されている。

26は底径3.3cmの平底からやや内彎しているが直線的に外方へ開く口径11.0cmのシンプルな鉢である。口縁部は角張り気味で、端部周辺の限られた部分のみヨコナデをしている。外面は8本/cmの細かいハケ整形、内面はハケ整形のちナデで消し調整している。底面もナデで仕上げている。色調は赤褐色～黄灰色。器高は5.8cm。

27はカップ形土器とも呼ばれる小形の深鉢である。口径8.6cm、底径3.5cm、器高6.9cmを測る。口縁部は短く外方へ開いており、強いヨコナデが施されている。外面は全面ではないがヘラミガキで調整され、内面にはヘラケズリが見られる。底部は再成形で指おさえの痕跡が内外面に見られる。底面もユビ仕上げが行われている。色調は赤褐色で小石粒を少量含む。

2829は底部で、ともに底部・脚台部はユビで成形されている。28は底部再成形で底径5.6cm。29は縁径4.4cmで内面にはくもの巣状の細かいハケが見られる。

57も27の同タイプだが、口縁部は屈曲せず直線的に丸くおさめて終わっている。長石などの小石粒を含み、内外面とも10本/cmの細かいハケで整形している。赤褐色に焼き上げられ、底面はヘラで整え、底部側面はユビ調整されている。口径8.8cm、底径3.8cm、器高7.4cmを測る。

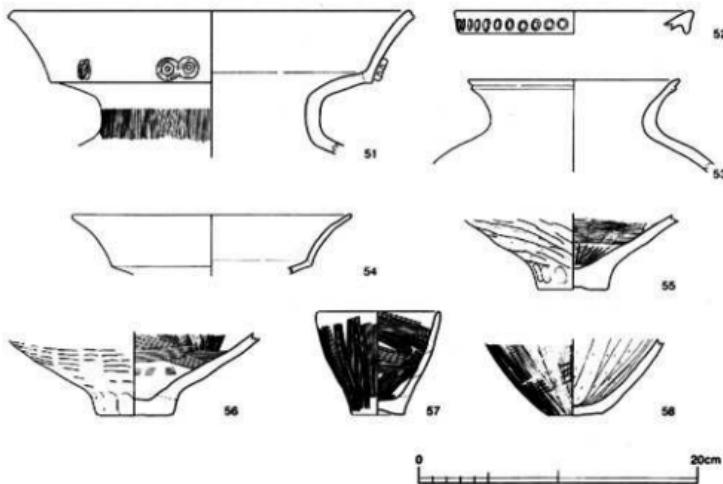
高杯〔45～49・54〕

1点が杯部で、他は脚部である。

45は杯部内外面とも放射状のヘラミガキがなされている。脚部外面はナデ整形しているが、内面はヘラケズリのままである。絞り目が見られる。灰白色～淡赤褐色を呈し、残存高5.8cmを測る。

46は三方に径0.6～0.7cmの円孔を有する脚部で、残存高5.5cmを測る。外面は粗いヘラミガキがなされており、内面と杯部内面はユビで調整されている。淡赤褐色を呈し、砂粒を少量含んでいる。

47はやや大きなタイプで残存高7.2cmを測る。三方透孔で円孔は1.3cm前後である。内面には絞り目が見られ、ハケ整形されている。外面はヘラミガキで仕上げられている。残存部上端で



第205図 古式土師器実測図(4)

杯部につながるものと思われる。

58は円板充填法の脚部で、円板は残っていない。筒部は直立気味で、裾部へと開いており、端部は角張っており、筒部内面はヘラケズリで裾部端はヨコナデをし、裾部内面はヘラとユビで調整している。外面および杯部外表面はヘラミガキで仕上げている。透孔は四方である。残



土器出土状態

存高8.3cmで裾部径9.8cmを測る。色調は暗赤褐色で砂粒を含む。

59は低脚台で、杯部は楕円形のものが付くであろう。直立に下降し、内縁気味に水平に近い状態で低く裾部端に延びている。四方透孔で径1.0cmと小さな円孔である。端部はヨコナデしており、丸くおさめている。内面はナデ調整し、外面は10本/cmの細かいハケ整形である。筒部にユビ成形の痕が見られる。残存高5.5cmで、裾部径は13.7cmで、色調は赤褐色である。

54は杯部の破片で、外面は細かいヘラミガキがなされている保存度の良好な精品である。ヘラミガキはタテ方向の細かいものである。外反する口縁部で上半にはヨコナデがなされている。残存高4.3cmで、復原口径20.2cmを測る。色調は器表赤褐色、器内黒褐色で砂粒を含む。

第11節 その他の遺物

前節以外の遺物として、瓦・古銭・土製品がある。

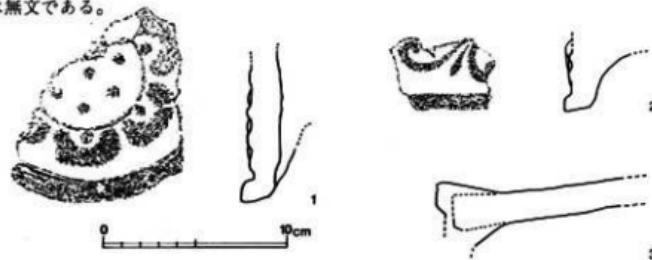
1. 瓦

瓦は、軒丸20点余を含めて 100点近くの破片が出土している。多くは近世の瓦であるが、軒瓦2点をはじめ一部は平安末～鎌倉時代の瓦である。出土総数のなかで平瓦が多いのは普遍的傾向であるが、丸瓦の出土量が少ないようと思われる。平瓦は正方形に近い平面形に復原されるものと思われるが、完形に近い瓦片は出土していない。

(1)(2)は宝林寺北遺跡の遺構の時期と同じで、(1)は播磨産の性格を顕著に示す包み込みの技法が見られる。(3)～(9)は近世の軒瓦で(5)(6)はいぶし焼である。

2. 古銭

古銭は2点出土している。開通元寶と寛永通寶が1枚ずつである。ともに遺構外の出土である。(1)は寛永通寶で、裏面に文の字が鋳出されている。いわゆる「文錢」であることから上限が寛文8年(1668)であることが判る。(2)は開通元寶で唐代の621年 初鋳の隸書体である。裏面は無文である。



第206図 瓦 実測図



第207図 近世瓦拓影

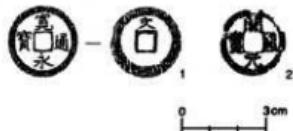
3. 土製品

性格不明の土製品（第193図）が1点出土している。

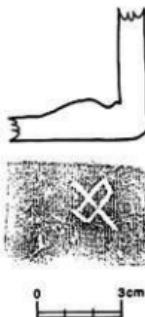
胎土は良好で精選された土で作られている。長さ2.3cm、幅2.5cm、厚さ1.4cmを測る。平面になっている1面は仕上げを行っておらず、他の部分はナデで仕上げられている。有溝土錐の半截した形状である。断面形は半円ではなく、上面に緩やかな稜をもつ三角形に近い形である。器表の色調は赤褐色である。重さ7.5gで土錐かとも思われるが明らかでない。遺構面上層から出土している。

他に陶器である火鉢の破片（第209図）が1点ある。近世の所産のバンドコの破片で底に「中」の字が陰刻されている。外面は黒色で、内面は灰色を呈する。底内面はユビ成形のまま、他の2面は面によって異なった原体（ハケ）で整形されている。

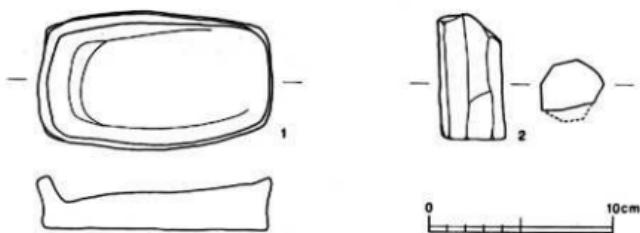
土製品から2点出土している。1点は硯〔第210図(1)〕で、長径12.75cm、短径7.4cmの隅円長方形を呈しており、厚さは最大で2.85cm、最小で1.4cmを測る。海部に最小厚を持っており、周縁の高さも1.5cmを有している。海部と陸部の境界は明瞭でなく、緩やかな傾斜を持っている。陸部手前か周縁の高さは最も低く、底面は平坦であるが、ヘラで切ったのちユビで整えただけである。現在的一般的に使われている硯と同形をしている。ただ、実用品としては平滑でなく使用出来ないものと思われる。使用した痕跡も残っていない。



第208図 古鐵拓影



第209図 バンドコ実測図



第210図 中央地区土製品実測図

(2)は面取りをした土製品である。須恵質で一部を欠いているため明らかでないが、7面もしくは8面になると思われる。短辺の1辺はヘラで平面に切られており、他の1辺は破碎面である。残存長6.75cmで最大の厚さは3.35cmである。奈良時代の高杯脚部かとも思われるが、1辺を平坦にしているので、疑わしい。また、硯などの脚部の可能性も考えられるが、断定できないため土製品として報告しておく。

第8章・出土遺物の検討

第1節 東播系中世須恵器について

東播系中世須恵器は、東播磨でおよそ11世紀後半から15世紀初頭にかけて生産された須恵器の総称である。その製品には、楕・小皿・鉢・甕・壺・瓦などがあり、広域な流通圏をもつところから、近年特に注目を集めるとこどとなっている。^(註1)生産地は、三木古窯跡群（三木市与呂木・久留美・宿原・跡部などの支群）、神出古窯跡群（神戸市西区老ノ口・宮ノ裏・釜ノ口・田井などの支群）、魚住古窯跡群（明石市中尾川・赤根川支群）などが挙げられる。特に生産量の多かった上記の三窯跡群は、流域は異なるものの、直線距離にして10km以内に存在し、生産された瓦や須恵器の手法から相互に密接な関連があったと推定される。そのうち、三木、神出古窯跡群は、11世紀後半には操業を開始し、魚住古窯跡群では約1世紀遅れて生産が始まった。

近年の発掘調査の成果は、生産地や消費地の様相が次第に明らかになってきていることで、東播磨は、中世窯業生産地帯の主要な一つとして把握されるに至っている。

ここでは、宝林寺北遺跡の出土遺物のうち、東播系中世須恵器について考察する。

鉢 (2)~(13)

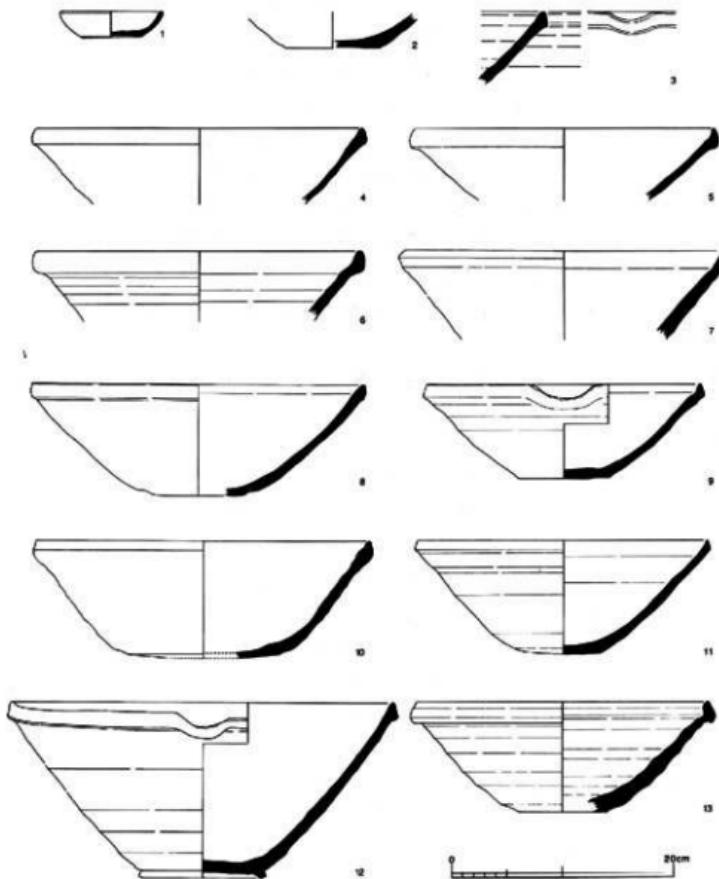
鉢は、東播系中世須恵器を代表する器種で、瀬戸内沿岸や京都などの各遺跡を中心に関東から九州まで出土例がみられる。

鉢の一般的な諸特徴は、以下のようである。①口縁部は、片口がとりつき、片口鉢となるものが圧倒的に多いが、まれに、両口・三口鉢のものもある。②片口部の成形は、指押えによって、外方へ押し出す。③体部は、粘土紐巻き上げ成形の後ヨコナデによって仕上げられる。内面は、ヨコナデ整形の痕跡が顕著であるが、その後、斜方向にナデされることもある。斜方向のハケ目痕が残ることもあるが、例は少ない。④底部は平底で、糸切り痕がある。⑤器種は、大型品（口径約35cm）、中型品（口径約30cm）、小型品（口径約25cm）の3種に大別できる。しかし、必ずしも一定の器種を指向して生産されているわけではなく、中間型の器種も多い。

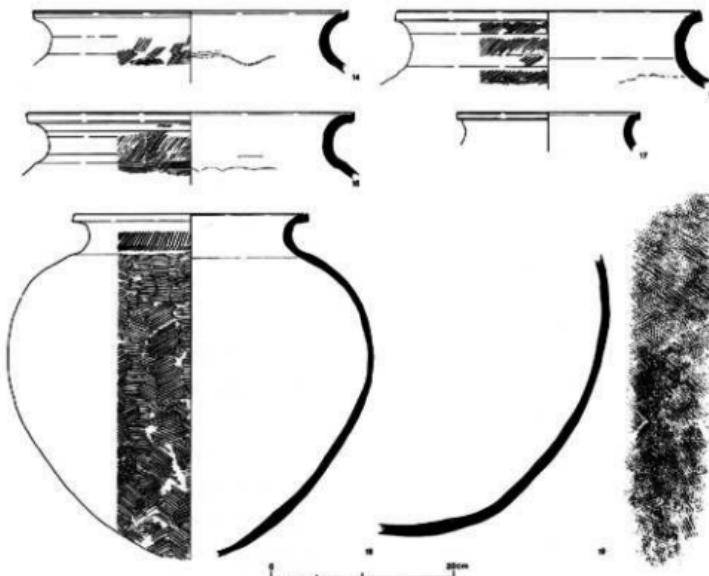
(7)（遺物包含層）は、口縁部から体部上半にかけての破片である。端部上方へのつまみ上げがほとんどなく、直線的な端面を示しており、他の器種に比べ、いくぶん先行する時期のものであろう。(3)（中央地区落込み1）と(4)（中央地区落込み5）も、(7)と同様の破片であるが、(3)は、端面の上下へのつまみ出しがみられるタイプで、(4)はそれがやや丸みを帯びる。口縁部の変化から、(3)から(4)へ移行することが読みとれる。(3)は、内面に使用痕がみられる。(4)は、口縁端部に重ね焼きの痕が残る。

次に(3)・(4)・(7)とよく似た口縁形態を示し、器形の全体が知れるものをみてみよう。(9)（中央地区建物2）は、小型の鉢で、やや軟質の焼成である。内面は、使用痕があり、底部には糸

切り痕が残る。口縁端部は、上下へのつまみ出しがみられ、口縁部内側には、明瞭な凹部がある。また、底部はわずかに突出しており、時期の先行する様相を示す。(II) (遺物包含層) は、方形区画墓の溝上面からの出土で、やや小ぶりな中型鉢である。全体に薄手のつくりで、使用痕はほとんどみられず、内面には斜方向のナデが施される。口縁部端面は、上下のつまみだしがみられる。底部は、糸切り後すぐにワラの上に置いたためか、ワラ状圧痕があり、糸切り痕



第211図 東播系須恵器実測図(1)



第212図 東播系須恵器実測図(2)

は観察しがたい。(12)（中央地区土壙40）は、典型的な大型鉢の特徴を示し、底部には貼り付け高台が付く。内面は、磨耗が著しい。口縁端部は上下につまみ出す。底部外面は、糸切り痕がわずかに残る。(8)（遺物包含層）は、中型鉢で、底部中央を欠損する。焼成は軟質で、生焼けの製品である。内外とも磨滅が激しく調整手法がよくわからない。口縁端部は、若干外側へ張り出す。(10)（遺物包含層）も、中型鉢で、やや軟質の焼成である。(10)は、口径に比べ底径が大きいこと、口縁部が肥厚することなど、他の鉢とは形態を異にするが、胎土をみれば東播系中世須恵器としてとらえてよいものである。

以上のはかに、口縁部の端を大きく拡張した鉢が3点ある。

(5)（中央地区建物3）と(6)（中央地区土壙32）は、端部内面に凹部をもち、丸みのある肥厚した大きな口縁部をもつ。(5)は、(6)に比べ、胎土に砂粒の混りが少なく、器壁も薄くつくられる。(13)（中央地区建物4）は、小型鉢で、内傾した厚い口縁部がつくタイプで、明石沖や富島沖の海上り製品とよく似た特徴を示す。底部には、糸切り痕が残る。

(2)（中央地区落込み5）は、底部のみの破片で、中型鉢の一部と思われる。内面には使用痕があり、底部外面には、糸切り痕がある。底部がわずかに突出しており、(9)とよく似ている。

さて、鉢を特に口縁部の変化に注目しながら分類してきたが、もう一度整理すると、(7)、(3)・(9)・(11)・(12)・(2)、(4)・(8)、(10)、(5)・(6)、(13)の6タイプになる。このうち、(12)は、魚住古窯跡群22号・30号窯（古）段階のものと特徴が一致し、12世紀の後半の時期が与えられる。また、(4)は、魚住古窯跡群30号窯体出土例と同一時期と考えられ、13世紀の初頭、(13)は海上り遺物の検討から、赤根川支群の最終末期の時期と考えられ、14世紀末～15世紀初頭とみなしてよいだろう。このようにみると、(7)、(3)・(9)・(11)・(12)・(2)は、12世紀後半、(4)・(8)、(10)は13世紀前半、(5)・(6)は14世紀前半、(13)は14世紀末～15世紀初頭に生産された鉢と考えることができるとだろう。

甕 (14～19)

甕は、東播系中世須恵器のなかでは、生産量全体に占める割合が少なく、集落跡の調査でも片口鉢に比べ出土量が少ないので通例である。しかし、魚住古窯跡群の22号窯や30号窯のように生産量の約4割を占める窯も存在するところから、12世紀から13世紀の集落跡では、甕の出土に注意が必要である。

甕についても、東播系中世須恵器の特徴を列記してみると、以下のようである。

①底部は、丸底である。②胴部は、長胴形と丸胴形の二者がある。③胴部の外面には平行条線叩きが施されるのが一般的である。④口縁部の内外面は、ヨコナデ整形されるが、頸部外面には叩き痕が残る。⑤内面の同心円叩きは、ほとんど痕跡を残さない。⑥器種は、大型品（口径約40cm）、中型品（口径約30cm）、小型品（口径約20cm）の三種がある。しかし、鉢と同様、11径や器高を定めて生産しているわけではなく、かなりのバラツキがある。

(14)（中央地区土壤1）と(16)（中央地区落込み1）は、頸部から上方を残す破片である。端部内面に凹部をもち、端部はつまみ上げた形態を示す。頸部には平行条線叩きの痕跡が残る。胴部内面は、指揮の痕跡がみられる。(19)（中央地区落込み1）は、(14)や(16)ほど口縁端部のつまみ上げが顕著ではない。しかし、口縁端部を除けば、その他の特徴は極めて類似する。(18)（西地区中世墓溝内）は、ほぼ器形の全容が知れる資料である。口縁部の諸特徴は、(14)・(15)に類似し、ほとんど同時期の所産と考えられる。胴部は丸胴形をなし、平行条線叩きは、やや粗い間隔である。胴部内面の同心円叩きはナデによって痕跡を残さない。(19)（西地区中世墓溝内）も、(18)とはほぼ同様の整形で仕上げられる。

甕の諸例をみると、魚住古窯跡群では、22号・30号窯（古）段階の特徴に一致する。この時期に先行すると考えられる29号窯出土品では、胴部が長胴化しており、(16)のように丸胴化していない。また平行条線叩きは、宝林寺北遺跡例ほど細かくない。一方、22・30号窯（新）段階では、口縁部端面下端の垂下が著しく、明らかに違った形態である。以上の観点からすれば、この甕の生産時期を、12世紀後半とみなすことができよう。

東播系中世須恵器における12世紀～13世紀の生産器種構成の転換をみながら、当遺跡の出土例をみてみると、出土した器種は、鉢と甕に限られ、それ以外では小皿(1)が1点あるにすぎず、12世紀中頃以降の東播磨の生産地の動向とよく一致する。

須恵器生産は、10世紀段階では多様な器種構成をもつが、11世紀中頃以降、播磨では椀が主体となった。一方、日常雑器として欠くことのできない壺・甕・鉢は、椀生産のなかで着実にその割合を増し、特に鉢は12世紀後半以後は椀との立場を逆転させた。鉢に代表されるように、特殊な器種生産への転化は、商品生産の開始 — 不特定多数への供給 — として理解されるが、^(注3) 東播磨諸窯にあっては、瓦生産の比重が一時期著しくなることや、椀生産が依然として一定量確保されていたことによって必ずしも加速度的に進んだとはいがたい。

東播磨において、生産器種の限定化という現象がみられるのは、12世紀後半に画期をみることができる。この時期を代表する窯である魚住古窯跡群22号、30号窯では、小皿・椀・鉢・壺・甕・瓦など多様な製品がみられるが、鉢と甕で全体の9割を占め、12世紀後半から13世紀初頭における東播磨須恵器生産の商品化への模索をうかがうことができる。これは、単に生産器種の限定化という傾向のみならず、器種ごとにおける多様な器形の生産にもみることが可能である。たとえば、鉢はそれまで、口径30cm前後の中型鉢の生産が主体であったのに対し、35cm前後の大型鉢の生産が顕著になり、法量が一定しない。また、片口鉢に限らず両口鉢や三口鉢を生産し、貼り付け高台の片口鉢が登場するのもこの時期の特徴である。これ以後、魚住窯では、椀生産を行わず、片口鉢の専業生産を指向するのはよく知られている事実であるし、甕の生産量の増大も12世紀後半から13世紀初頭における一時期の現象であるにすぎない。このよう考へるならば、この時期は、東播磨において單一器種の量産化=商品化の胎動期といっても過言ではあるまい。消費地における片口鉢の出土量は、およそ12世紀後半を境に急激に増化する。本遺跡における、東播磨中世須恵器の出土例が、この時期にかたよっている傾向もこのような現象の一例として理解されよう。

(注)

- (1) 今里幾次「播磨国魚橋瓦窯址の研究」『兵庫史学』6号 1955

上原真人「古代末期の瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 1978

森田 稔「東播系須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 1986

荻野繁春「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会誌』第3号 1985

荻野繁春「摺鉢から見た中世の生産と流通について」『国立福井工業高等専門学校』1986

吉岡康暢「中世陶器の生産と流通(1)・(2)」『考古学研究』108・110号 1981

吉岡康暢「経外容器からみた初期中世陶器の地域相」『石川県立郷土資料館紀要』第14号

1985

大村敬通「播磨の古代窯」「日本やきもの集成」9 1981

(2) 大村敬通他「魚住古窯跡群」兵庫県文化財調査報告第19冊 1983

(3) 白石太一郎「中世窯業の黎明」「講座・日本技術の社会史」第4巻 1984

第2節 相生系須恵器について

平安時代の窯跡の分布は但馬・淡路・揖津・播磨と県下全域に及ぶ。しかし、窯跡の大半は播磨地方に分布しており、播磨地方は窯跡群の数、一窯跡群あたりの規模とともに他地方を圧倒している。

播磨における平安時代の代表的な窯跡群としては、西播磨に位置する相生窯跡群・北播磨の西脇市金城池窯跡群・東播磨の加古川市志方窯跡群（札馬窯跡群）・明石市魚住窯跡群・三木窯跡群・神戸市神出窯跡群がある。

このうち、魚住以下・神出・三木各窯跡群は操業の開始が平安時代後期以降になるので、平安全盛期を通してということに限定すると、相生・加古川市志方・西脇市金城池の3窯跡群が播磨を代表する平安時代の窯跡群ということになろう。いずれも碗など小型の日常雑器の焼成を中心とする。製品の供給先は一部は平安京・但馬等へ運ばれているものの、後出の神出・魚住窯跡群ほど広範囲ではなく、大半は地元の播磨地方で消費されている。

宝林寺北遺跡出土の須恵器についてみると、まず、古墳時代から奈良時代の須恵器については、周辺に姫路市太市・青山・林田、相生などの窯跡群があり、複数の窯跡群から供給されていた可能性が高い。

平安時代になると、姫路市周辺の窯跡群は、ほぼ衰退するので、西播磨地区での須恵器の生産は相生周辺に集中することになる。相生窯跡群は宝林寺北遺跡から直線距離にして西にわずか5kmほどの距離にあり、他の同時期の窯跡群よりもはるかに近い。出土須恵器の大半は胎土・手法・形態などの特徴からも相生窯跡群で生産されたものと考えてよい。

相生窯跡群は相生市内を東西に横断する国道2号線を挟む南北の丘陵に分布する窯跡群で、古墳時代から平安時代後期にかけての窯約130基からなる。一部は龍野市内に含まれている。

相生で生産された須恵器は一部では西播系須恵器とも呼ばれることもある。しかし、西播系というと、あたかも複数の窯跡群の総称であるかのような誤解をうけやすいので、西播系須恵器という呼びかたは避けて、相生系というように地域名で呼んでもうが適切であろう。

相生窯跡群の須恵器の編年については、一応の試案は示しているが、充分確立しているわけではなく、なお流動的である。試案を示すと、次の通りである。

第1段階 奈良時代以来の付高台をもつ杯が碗に変化する段階（9世紀代）

第2段階 ヘラ切りの平高台をもった椀の出現（9世紀後半から10世紀前半）

第3段階 糸切り平高台をもった椀の出現以後（10世紀前半～）

本遺跡で第1段階に属する須恵器は第170図の13・23、第173図の72などがあげられよう。第33図の18、第170図の9・30、第173図の77などもこの段階に属する可能性があるが、付高台をもつ椀は第3段階の糸切り平高台をもった椀の初現の頃まで残るので、底部片だけでは判断し難い。

第2段階のヘラ切りの平高台をもつ須恵器椀の一群については、型式としては1型式設定できるが、窯の数は少なく、極めて短期間のうちに次の段階の糸切り平高台をもつ椀にとって代わられたと考えられる。本遺跡でも、ヘラ切りの平高台をもつ須恵器椀は出土していない。なお、相生では、ヘラ切り平高台をもった椀と糸切り平高台をもった椀が併焼されている窯は未発見であるが、⁽¹³⁾加古川市志方窯跡群の札馬5号窯・三田市西相野窯跡群に例がある。西相野窯跡群では、むしろヘラ切り平高台の方が主流である。

第3段階は糸切り平高台をもつ椀の出現を指標とする。本遺跡出土の須恵器の中で圧倒的に多く、しかも遺構に伴っているのが、この段階の遺物である。

相生での糸切り椀の出現は平安京での出土例から10世紀前半まで遡り、12世紀後半まで継続する。最終段階の須恵器の生産地は旧赤穂郡側の相生市と旧揖保郡側の龍野市および相生市東部の2つに分かれ、異なる様相をみせる。すなわち、旧赤穂郡側の緑ヶ丘地区や西後明地区などでは、糸切り椀は平高台をわずかに残し、杯はヘラ切り手法を堅持したまま終焉する。これに対して、旧揖保郡側では糸切り椀は高台をわずかに残すものもあるが、高台を消失している椀も焼成されている。構成器種はヘラ切り手法をもつ杯ではなく、瓦・小椀・小皿・鉢等が含まれている。両者の相違は旧赤穂郡と旧揖保郡という地域差によるものか、時期差によるものかは、今の所、判然としないが、時期差を考えるならば、旧赤穂郡側のほうが早く衰退したと考えられる。

本遺跡出土の糸切り椀のうちでも最も古いタイプの糸切り椀としては、遺構からの出土ではないが、第171図の49がある。付高台をもった椀が併存する相生の入野6号窯の段階のものと考えられ、10世紀半ばよりも遡り得ると考えて間違いかろう。この段階の須恵器はこの1点だけであるが、前述の第33図の18、第170図の9・30、第173図の77など付高台をもった椀の何点かは第171図の49と同じ年代まで下がる可能性がある。

これに続く時期の須恵器については、溝1（第77図）出土の椀がある。溝1出土の須恵器はこの1点のみで時期を決定するのは難しいが、あえて言うならば、緑ヶ丘落矢ヶ谷4号窯の須恵器の形態に近く、10世紀代にはいる可能性がある。

第3段階のうちでも、もっと多く出土し、遺構の多くに伴うのが、相生窯跡群の最終末に近い時期の須恵器である。この時期の須恵器が出土している遺構には、落込み1・2、土壇1

～3・9・13・32・屋外炉がある。このうちで、土壌9・13から出土している須恵器は旧赤穂郡の緑ヶ丘周辺で、生産された須恵器と思われるが、土壌9以外の遺構には旧攝保郡側の竹原・大陣原付近で生産されたと思われる須恵器が含まれている。

各遺構は、同一の遺構の中でも、かなり時期の異なる遺物が混入しており、一括遺物として扱うのは難しいが、屋外炉の遺物については、年代の異なる遺物が混在しているもの、一括資料として、今後編年等の参考資料となるものが含まれている。また、土壌42については出土している土師器のうち、碗42・43・45は緑ヶ丘落矢ヶ谷1・3号窯⁽¹⁶⁾から出土している須恵器碗と共に通する形態であり、須恵器の編年⁽¹⁷⁾の上で参考になる。土壌42は主体部に白磁碗・土師器杯を埋納した中世墓より下層の遺構である。白磁碗は森田勉氏による大宰府編年⁽¹⁸⁾（11世紀中頃～13世紀初頭）に比定される。また、中世墓を巡る周溝の中から12世紀代の魚住窯跡産の須恵器が出土している。

このほか、第171図40～44・47・48など備前系と思われる須恵器碗の出土量も少なくない。⁽¹⁹⁾

（注）

- (1) 関宮町尾崎周辺に5基程度窯跡が発見されている。（加賀見省一「但馬地方における須恵器生産の展開」『よみがえる古代の但馬』1981年 但馬考古学研究会）
- (2) 三原町佐礼尾に窯がある。（浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌』第3号 1980年 淡路考古学研究会）
- (3) 三田市西相野・末・木器付近に窯跡が発見されている。
- (4) 岸本一郎「播磨・綠風台窯址」
- (5) ① 中村浩・岡本一士・上月昭信「札馬古窯跡群発掘調査報告書」1982年 加古川市教育委員会
② 上月昭信「兵庫県南部の窯業生産遺跡」『考古学ジャーナル』No.216 1983年
上月昭信「兵庫県南部の窯業生産遺跡“2”」『考古学ジャーナル』No.220 1983年
- (6) 大村敬通・水口富夫「魚住古窯跡群」1983年 兵庫県教育委員会
- (7) 是川長・他「考古学上からみた三木地方の古代」『三木市史』1970年
- (8) 丹治康明「東播磨の中世須恵器生産」（第13回中世土器研究集会発表資料 1984年）
- (9) 森内秀造「相生の古代窯業」（『相生市史』第1巻 1984年 兵庫県相生市・相生市教育委員会）
- (10) 永井信弘「播磨中部古窯跡群について」（『東播地域史懇談会第12回例会資料』1983年 東播地域史懇談会）
- (11) 三辻利一教授による胎土分析の結果によると、姫路と相生の胎土はほとんどかわらず、両者の須恵器は識別するのが難しい。
- (12) 西播磨には、この他夢前町清水峰・姫路市山田附近に窯があるが規模は小さい。
- (13) 森内秀造「兵庫県相生古窯址群について」（『日本史論叢』第10輯 1983年）
- (14) ① 森内秀造「平安時代の窯業生産—播磨地方の須恵器生産を中心に—」（北山茂夫追悼日本史学論集『歴史における政治と民衆』1986年 日本史論叢会）
② 西口和彦・森内秀造「相生市・緑ヶ丘窯址群」1986年 兵庫県教育委員会
- (15) 注(5)と同じ。
- (16) ⑭の②と同じ。
- (17) 備前系と考えている須恵器の一部は胎土分析の結果、相生の領域に対応する。従って備前系に分類した形態の須恵器が相生で焼成されていた可能性もあるが、備前系の須恵器の基礎データーが不足しているので、データーの蓄積を待つて検討することにしたい。

第3節 貿易陶磁について

前章でみて来たように、本遺跡では多量の土師器、須恵器などの日常雑器と共に、貿易陶磁も多くの細片の形ではあるが、多量に出土し、同化し得たものだけでも162点を数える。

この点数は、県下の中世遺跡に於ける貿易陶磁の出土量としてはかなり多量であると言え、現在迄に報告書の刊行されているものの中では、1982年に報告書の刊行された福田天神遺跡に次ぐ出土量を占める。^(文部省)

しかし、これらの貿易陶磁は、その出土状況を見ると、その大部分は遺構に伴わず、包含層中より出土しており、明確な共伴遺物を伴うものは数少ない。

次に、方形周溝墓、土壙4・34・36、井戸2、集石土壙2、西地区溝、ピット内、落込み1・5などの遺構からの出土遺物を見ると、貿易陶磁のみを取りあげると、ある程度の時期差は認められるものの、一応一括遺物として捉えうる資料であると言える。

例えば、方形周溝墓内出土遺物を見ると、墓壙内からは、V-4類の白磁碗と共に、土師器皿が1点出土しており、また、墓壙を廻る周溝内からは東播系須恵器、土師器、陶器などの雑器類が出土している。ここでは、これらの資料の時期を考える場合、これらの遺物が埋納された時期が同時期であるか否かを検討する必要がある。まず、墓壙内より検出された白磁碗と土師器皿が同時に埋納された一括遺物であることは確実である。次に周溝内の遺物であるが、これらの遺物の一括性を論ずる為には、その出土状況が問題となって来る。周溝底に配置された形で出土したのか、周溝が埋められる段階で同時に廻棄された形で出土したのか、あるいは、周溝は漸時埋まつて行きその段階で廻棄される形で出土したのか、この場合、上記の3つの状況が考えられる。この点に関しては、残念ながらあまり明確ではないが、仮に、これらの遺物が配置された形で出土したと考えた場合、これらの遺物の埋納時期の上限を決定する指標となるものは、最も使用期間の短い土師器である。しかし、土師器については、西播地域における編年作業が未だ確立されていない現状では、年代を与える資料とはなり得ない。次に、ある程度編年が試みられている東播系の須恵器についてみてみると、これらの遺物は、12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる資料である。従って、東播系須恵器が周溝内で最も新しい時期に属するものであることを前提として考えると、周溝の埋没の上限は12世紀後半から13世紀前半の時期に求める事が出来る。次に墓壙と周溝との関係であるが、これについては、墓壙と周溝がある時期から同時に存在している事は事実である。しかし、墓壙と周溝が同時に構築されたかどうかについては、他に類例が殆ど見られないことから疑問が残る。

仮に、方形周溝墓というものを意識して、同時に構築されたものであるとしても、墓壙の埋納と同時に、周溝内に土器が供獻され、同時に周溝が埋没したとは言い難い。

従って、ここでは、墓壙の埋納と、周溝の埋没時期とは、一応区別して考える必要がある。そうすると、墓壙の埋納の上限を決定出来る資料は、土師器皿と白磁碗に限られる訳である

が、現状では、この土師器皿に単独で時期を与える事は困難である。従って、この場合、墓壙の埋納時期の上限は、横田・森田氏らの研究によって、白磁碗に与えられている年代、すなわち、11世紀中葉から13世紀前半の非常に幅の広い時期に位置づける事しか出来ない。

このように、方形周溝墓という本遺跡の遺構の中では、最も性格の明らかなものから、一括で出土した遺物についても、貿易陶磁については、大宰府に於ける時期設定以上の細かな時期を与える事は出来ない。

このことについては、最も多量に出土し、最も使用期間が短く、その形態差が著しいと考えられる上師器の編年的位置づけが、西播地域においては、未だ確立されていない所に求められる。また、土師器以外にも、在地の土器としては、須恵器がある。神出、魚住を中心とする東播系須恵器については、大村敬通、水口富夫、森山 稔、丹治康明氏らによって編年試案が提出され、ある程度、その実態が明らかになりつつある。一方、龍野・相生両市に点在する西播系須恵器についても、森内秀造氏らの精力的な研究が行われているが、未だその全容は明らかにされていない。また、これら産地での研究とは別に、消費地においても、福田片岡遺跡、本町遺跡などを中心に、編年作業が継続中である。しかし、現時点では、これらの遺跡では整理作業が継続中であり、調査者の見解は公表されるに至っていない。

本遺跡の貿易陶磁の位置づけを行うには、上記の資料の研究成果が待たれる事は言うまでもない。ここでは、現在迄に行われている、横田・森田氏の研究をもとに、本遺跡出土の貿易陶磁の時期について、若干触れておきたい。

貿易陶磁の時期

本遺跡出土の貿易陶磁は、大きく分けてⅠ～Ⅳ期の4時期のものに区分される。

Ⅰ期は、白磁碗Ⅳ類・V類を中心とするもので、大まかに11世紀中葉から13世紀前半の時期が設定される。Ⅱ期は、同安窯系青磁及び龍泉窯青磁碗Ⅰ-2・4類を中心とするもので、12世紀中葉から13世紀後半の時期が与えられる。Ⅲ期は、青磁碗Ⅰ-5類及び、白磁皿Ⅴ類を中心とするもので、13世紀中葉から14世紀前半の時期が与えられる。Ⅳ期は、上田分類青磁碗BⅣ類及び青花磁器を含むもので、15世紀後半から16世紀代にかけての時期が与えられる。

以上の区分は、それぞれの遺物の存続する時期の幅を広くとっている為、それぞれの時期は相互に重複しているが、少なくとも貿易陶磁に関しては、本遺跡では、14世紀中葉から15世紀代のものが欠落しているが、11世紀中葉から16世紀代迄に位置づけられるものを含むことが明らかとなつた。

次に、これらの各時期に所属する資料の比率について考えてみたい。組成の比率を考える場合、先ず、同一遺構内での土器の組成比率を考える必要があることは言ふ迄もない。この点では、遺構内出土遺物が少ない事から今回はなし得なかった。次に、包含層出土遺物については、所属時期が明確でない遺物について比率を論ずることはあまり意味がないと考えられる。明らか

に時期差の認められる遺物について、その割合を論じても、意味がないからである。その為、ここでは、貿易陶磁のみを取り上げて、Ⅰ期～Ⅳ期に区分される貿易陶磁について、大まかにその割合を考えると、Ⅰ期に属するものが最も多く、次いでⅢ期、Ⅱ期と続き、Ⅳ期のものが、僅か2点と極端に少ない。しかし、これを厳密に考えると、あまり意味がない。というのは、これらは、完形品も、細片も全て1点と考え、点数を数える為の基準がないからである。本来は、完形品を1点と数え、他のものは除外するか、破片の遺存する度合にある一定の基準を設けて、点数を数える必要があろう。その点で、貿易陶磁については、出土量が少ないと、細片が多いこと等から基準を設けて点数を数える事は出来なかった。

上記のこと考慮して、貿易陶磁の出土の割合から考えると、本遺跡では、11世紀中頃から13世紀前半にかけて、墓地及び集落としての土地利用が行われており、その状況は14世紀前半の時期遅、漸時、規模を縮少しながら継続されている。以後、14世紀の中頃から16世紀代にかけては、集落としての機能は失われるものの何らかの形で土地利用が行われていたことがうかがわれる。

参考文献

1. 鈴木重治・市村高規 1982 「福田天神遺跡」 龍野市教育委員会
2. 大村敬通・水口富夫 1983 「魚住古窯群」 兵庫県教育委員会
3. 横田賛次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について — 型式分類と編年を中心として —」 『九州歴史資料館研究論集4』 九州歴史資料館
4. 森田 稔 1986 「東播系中世須恵器生産の成立と展開」 『神戸市立博物館研究紀要第3号』 神戸市立博物館
5. 丹治康明 1984 「東播磨の中世須恵器生産」 『第13回中世土器研究集会発表資料』 中世土器研究会
6. 森内秀造 1984 「相生の古代窯業」 「相生市史 第1巻」 相生市・相生市教育委員会
7. 岡崎正雄他 1983 「龍野市・福田片岡遺跡」 『兵庫教育388』 兵庫県教育委員会
8. 山本博利・秋枝 芳 1984 「本町遺跡発掘調査報告書」 姫路市教育委員会
9. 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」 『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会

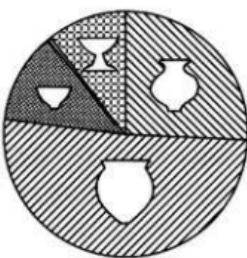
第4節 古式土師器について

前章で記したように遺構は検出されなかったが、中央地区G08を中心にやまとまつて古式土師器が出土している。宝林寺北遺跡は当初、弥生～古墳時代にかけての集落跡も予想して調査を行った遺跡で、南約500mに門前遺跡が存在する。門前遺跡は昭和43年という早い時期に調査され、西播地域の古式土師器の編年を考える上での重要な資料を提起している。門前遺跡に比べて出土量は微少であるが、比較検討を加えてみたい。

図化したものは58点で、その内訳は壺15点(25.9%)、甕30点(51.7%)、鉢7点(12.1%)、瓶1点(1.7%)、高杯6点(10.3%)である。ただ、これは図化した点数で、破片で器種の判明するものを加えると、甕の比率が高くなるようである。また、器台の小片も見られる。大形の器台で、小形丸底甕に伴うような小形の器台は見られない。底部だけの破片のため、甕か鉢か判別出来ないものは甕にしている。そのため鉢の比率が増える可能性はある。完形品と台付きの底部を鉢としている。鉢は完形品が5点あり、完形品7点の大半が鉢となり、鉢が占める割合は高いと考える方が妥当かもしれない。全般的な器種ごとに占める割合を推測すると、甕が半数以上6割前後で、壺2割、鉢1割で、残りが高杯・瓶・器台になろうかと思われる。

時期は僅かな差はあるかもしれないが、基本的には全て同一時期と考えて差しつかえないと思われる。宝林寺北遺跡出土土器は、門前遺跡8～10層に相当する。弥生後期・門前Ⅰ・Ⅱ式が概当するものである。ただ、8層出土に対応するものは少ない。龍野市史第4卷での後期後半が主体となるであろう。搬入品・底部を除外して考えると、まず壺は(I)のみが時期を考える上での資料となろう。やや球形に近い胸部は新しい要素であるが、直立に近い頸部から水平気味に開く口縁部は古い様相を示している。一般的に使われる弥生時代後期末～庄内期併行期の古い段階(庄内古段階)と想定される。川島遺跡20溝では、このタイプは出土しておらず、長越遺跡Cに分類されているもの一部が相当する。また、後期になって再び見られるようになると言われる底面の木葉痕も(4055)に見られる。底面が広いことと符合するものと思われるが、当遺跡出土底部は平底のしっかりしたものが多く見られ、古相を示すものと考えられる。長越遺跡でも古い段階の遺構である落込み1に木葉痕の底部が含まれている。

甕は、(7)が搬入土器で他は地元の土器と思われる。(I)は龍野市史第1巻で類雲母土器と呼称されたものである。製作技法はB型技法を用い、プロポーションも類似しているが、器壁が厚く、雲母を含んでいない。(II)は胎土などは地元の土器とも思われるが、口縁端面に擬凹線を有しており、山陰地方の影響を受けていることが想定される。他の甕は、ほとんど外面は右上り



第213図 器種別比率グラフ

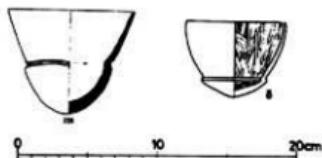
のタタキで成形し、部分的にハケ整形をしている。内面はヘラケズリかハケで整形している。
22の甌も通有の甌と同じ技法で作られており、甌を焼成後に底部穿孔した甌である。
23は底部だが、厚く安定感のある底部で、長越遺跡壺D 2になる可能性もある。
23をはじめ33(34)は平底であるが、大半は底部再成形の突出平底が多い。

鉢もまだ平底を有するものが多く、鉢として製作されたものと思われる。門前Ⅲ式に見られる
ような明らかな甌下半の鉢ではなく、そのタイプの甌も認められない。
27のコップ形の鉢は古相を示すものである。

高杯は全容の判るものはないが、円板充填法が残っているのが特徴であろうか。長越遺跡では
II式まで残っており、川島遺跡でも見られる技法で、この時期の西播磨地方で通有の技法か
と思われる。

特色ある遺物としては、50の二重口縁の壺の文様がある。絵画文がクシで描かれており、抽
象化されているものの、鳥であろうと思われる。今里幾次氏によって祭紋と呼称された文様で
はないが、その範疇と考えられないだろうか。

古式土師器のなかに搬入品と思われるものが数点含まれている。(2)(7)52の3点は明らかである。
(2)は長頸壺として報告したが、特殊なタイプの土器である。器高のほぼ中位に頸部を持ち、
口縁部に最大径を有する大きな口縁部を持つ土器である。土器の大きさは異なるが、似たプロ
ポーションをして類似性を想起させる土器として、門前遺跡、姫路市長越遺跡などから出土し
ている特殊な鉢(第214図)がある。器高が3分の1前後の小形品で精製土器であるが、胎土・
色調には共通性がある。小形品のタイプは香川県
大空遺跡・徳島県清成遺跡・同種口遺跡など東四
国地方で多く見られるタイプである。大形品を小
形と同一視することは危険であるが、搬入品の可
能性を考えつつ、少なくとも東四国地方の影響を
受けていることは間違いない。



第214図 門前・長越遺跡出土小形丸底壺

(7)の甌も東部瀬戸内地方の土器と思われる。胎
土に雲母を含み、暗褐色～茶褐色を呈している。播磨では、川島遺跡で注目された土器で甌B
と分類された強く張る胴部に、くの字形に外傾する短い口縁部を持つもので、胴部内面のユビ
整形の痕跡である指圧痕を顯著に残すことを特徴とする。B型技法により作られた土器である。
その後、長越遺跡で甌Dに分類され、中部瀬戸内地方の土器と考え、その出自は讃岐地方に求
められている。さらに、それ以降徳島県での調査例が増え、甌の占める割合が讃岐よりも阿波
地方の方が高いことが判りつつある。しかし、今短絡的に阿波系甌と呼ぶにはとまどいを感じ
るため、広く中部瀬戸内(東四国)地方からの搬入品と考えておく。

52は甌口縁部で、雲母を明瞭には含まないが、いわゆるチョコレート色に焼き上げられた土

器で、口縁端部の破片のため詳細は不明であるが、搬入品と考えられる。

最後に宝林寺北遺跡の土器の時期は、弥生後期後半から庄内併行期の段階の時期と考えられる。門前遺跡の8～10層で10層を中心とし、8層に相当するものは微量である。川島遺跡20溝とも時期を共有するものであろう。長越遺跡の古い段階（I・II式）にも対応するものと思われる。この時期はムラによる土器の差も明らかで、長越や姫路市橋詰遺跡、太子町船遺跡のように庄内式土器の搬入品を有するムラと他のムラとは土器様相が少なからず異なっている。それに伴う土器の個体差が現われているものと考え、相対年代は同一と考えられる。宝林寺北遺跡の土器群も遺構を伴わないことから資料として論ずる上に弱点となろうが、庄内併行期の中で把えられるものと思われる。この時期をもって即、標題のように古式土師器とすることに疑義を唱えられるかもしれない。しかし、広い意味で慣例として古式土師器と称しただけで、この時期を古墳時代とすることには感心を感じている。

第9章 宝林寺北遺跡出土土器の胎土分析

奈良教育大学教授 三辻 利一

宝林寺北遺跡出土土器の胎土分析の結果について報告する。

土器片資料は表面を研磨してのち、100~200メッシュ程度に粉碎した。粉末試料は約15トンの圧力を加えてプレスし、直径20mm、厚さ3mmの錠剤に成形して蛍光X線分析用試料とした。エネルギー分散型蛍光X線分析法でK、Ca、Fe、Rb、Srの5元素を定量した。標準試料には岩石標準試料JG-1を使用した。分析値はJG-1による標準化値で表示された。

分析値は表1にまとめられている。全分析値をみてFe因子に有効な差異は認められなかつたので、データ解析には使用しなかつた。Fe因子は特定の地域以外は有効因子にならない場合が多い。残る4因子のうち、Rb、Srを両軸にとったRb-Sr分布図がとくに有効な地域差を示すので、まず、Rb-Sr分布図から説明する。

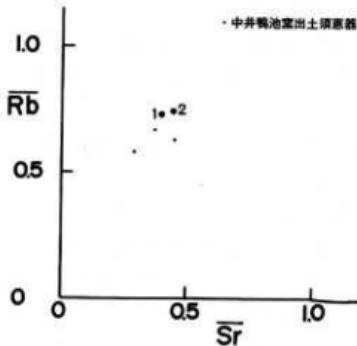
第215図には奈良時代と推定される須恵器のRb-Sr分布図を示す。第215図にはまた、宝林寺北遺跡にも近く、かつ、同時期に操業していたと推定される中井鶴池窯出土須恵器もプロットしてある。窯跡出土須恵器は3点しかないので、これから中井鶴池窯領域を設定することは困難である。恐らく、第215図に分布しているよりももう少し拡げて中井鶴池窯領域をとるべきであろう。そうすると、宝林寺北遺跡から出土した奈良時代の須恵器はRb-Sr分布図上で、ほぼ、中井鶴池窯領域に対応するものとみられる。

第216図にはK因子を対比してある。K因子でも奈良時代の2点の須恵器は中井鶴池窯領域に対応していることがわかる。

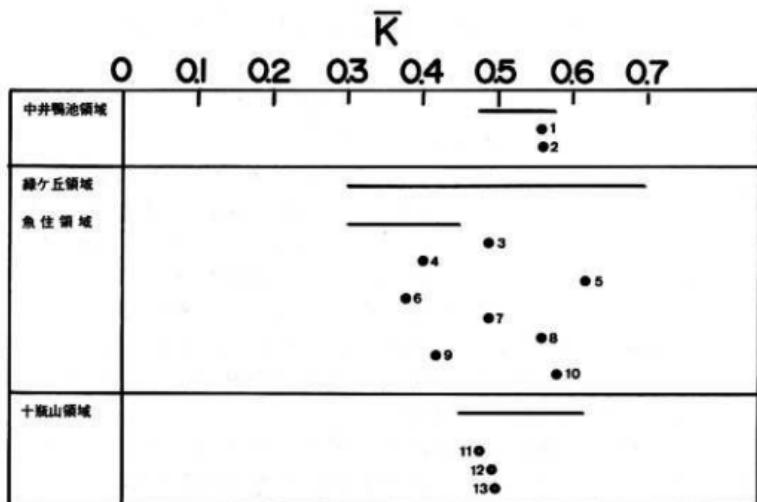
第217図にはCa因子を対比してある。Ca因子でもこれら2点の須恵器は中井鶴池窯に対応しているとみなければならないだろう。

この結果、宝林寺北遺跡の奈良時代の2点の須恵器は全因子で中井鶴池窯領域に対応することになり、胎土からみて中井鶴池窯産の可能性が十分あるということができよう。

次に、宝林寺北遺跡の平安時代と推定される8点の須恵器の胎土をみてみよう。第218図には、Rb-Sr分布図を示す。考古学的器形観察から、No.3、5は相生窯跡群の縁ヶ丘窯の須恵器と、また、No.6、9は同じ兵庫県の魚



第215図 宝林寺北遺跡出土須恵器（奈良時代）のRb-Sr分布図



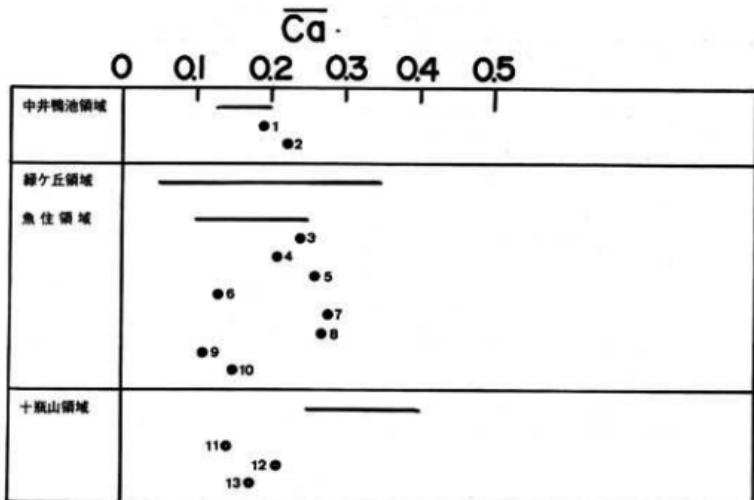
第216図 宝林寺北遺跡出土須恵器のK量

住窯跡群の須恵器と類似しているという。そこで、第218図にはこれらの窯跡群出土の多数の須恵器の分析データに基づいて、緑ヶ丘領域と魚住領域をとつてある。勿論、この分布領域は定量的な意味を持たないが、地域差を比較する上には有効である。第218図より、緑ヶ丘窯の須恵器は魚住窯の須恵器に比べてRb量はやや多いことがわかる。そして、No.6、9の2点は魚住領域内に分布したのに対し、No.3、4、5、8、10は緑ヶ丘領域内に分布し、No.7は両領域が重複する領域に分布することがわかった。このように、Rb-Sr分布図でおおよその産地の見当をつけることができるが、定性的に産地推定をするにしても、他の因子についても対応しなければならない。

第216図のK因子をみると、No.6、9はRb-Sr分布図と同様、魚住領域に対応する。また、No.3、4、5、7、8、10の6点は緑ヶ丘領域に分布した。No.7はRb-Sr分布図では重複領域に分布したが、K因子では緑ヶ丘領域内に分布した。

また、第217図のCa因子でも、No.6、9は魚住領域に対応し、No.3、4、5、7、8、10は緑ヶ丘領域に対応した。

この結果、No.6、9の2点は器形観察からも予想されるように、胎土分析の結果も魚住窯産であることを示した。一方、他の6点は緑ヶ丘領域に対応した。6点のうち、No.3、5の2点

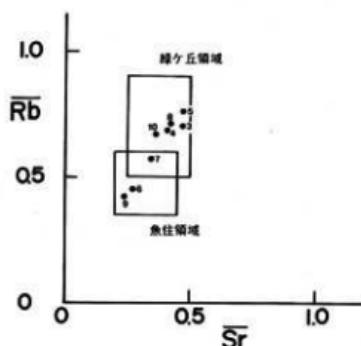


第217図 宝林寺北遺跡出土須恵器のCa量

は器形からみても緑ヶ丘窯産と推定されたものであり、胎土分析の結果はこの推定を裏付けた。他の4点は器形観察の結果は不明であるが、胎土分析の結果は全因子で緑ヶ丘領域に対応した

ところから、少なくとも緑ヶ丘窯を含む相生市西部の相生窯跡群のいずれかの窯の産物である可能性が高い。つまり、地元産の須恵器であると言えよう。

以上は図面に基づいて定性的に产地推定を試みた結果である。ここでもう少し定量的な分類法であるクラスター分析の結果について述べる。クラスター分析ではいくつかの分析値を使って類似度を計算する。ここではK、Ca、Fe、Rb、Srの5因子を使用した。この結果はデンドログラムとして第219図に示してある。この図では縦軸に試料を類似したものから順に並べてある。横軸

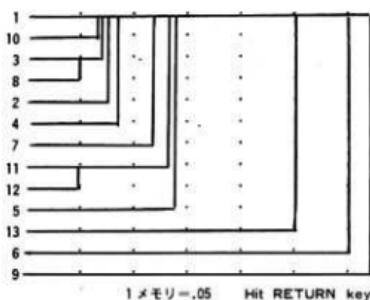


第218図 宝林寺北遺跡出土須恵器(平安時代)のRb-Sr分布図

を類似したものから順に並べてある。横軸

第3表 宝林寺北遺跡出土須恵器の分析値

時代	器種	試料番号	実測番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr
奈良時代	杯蓋	1	第76図(2)	0.561	0.186	1.170	0.732	0.399
・後期	杯身	2	第87図25	0.561	0.226	1.450	0.740	0.445
平安時代	甕	3	第173図80	0.491	0.242	1.340	0.698	0.469
・末期	皿	4	第54図43	0.402	0.211	1.440	0.685	0.410
・	楕	5	第84図23	0.616	0.259	1.640	0.761	0.467
・	魚住鉢	6	第171図57	0.375	0.130	1.930	0.450	0.269
・	甕	7		0.488	0.276	1.350	0.568	0.345
・	・	8	第76図(3)	0.561	0.271	1.270	0.711	0.421
・	・	9	第180図(4)	0.423	0.109	2.310	0.422	0.240
・	・	10	第211図19	0.578	0.146	1.270	0.669	0.360
平安末期～鎌倉	・	11	第180図(5)	0.478	0.145	1.560	0.632	0.301
・	楕	12	第128図(1)	0.495	0.210	1.630	0.588	0.339
鎌倉時代	甕	13		0.498	0.175	0.886	0.609	0.415

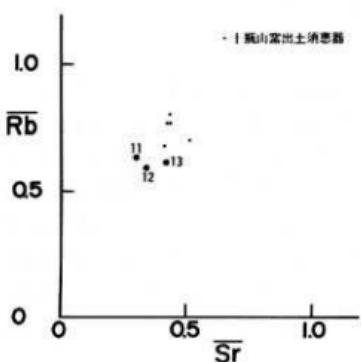


第219図 宝林寺北遺跡出土須恵器のクラスター分析

クラスター分析の結果は、第215～218図の図面上で推定した結果とよく対応していることがわかる。しかし、クラスター分析でもデンドログラムのNo.5から上側の土器の胎土に差異があるかどうかは不明である。このことも第215～218図の図面による結果と対応している。こうして、作図法による定性分析の結果はクラスター分析の結果と矛盾しないことがわかった。

第220図には3点 (No.11, 12, 13) の中世陶器のRb-Sr分布図を示す。No.11は器形からみて香川県の十瓶山窯産の陶器と推定されたため、十瓶山窯出土陶器との対比を試みた。窯跡出土陶器の分析点数が少ないので、十瓶山領域を設定することは難しい。しかし、第220図をみると、

は類似度をとつてある。そして、類似度の近いものから順に、遂次、横線で結んでいく。ただ、この分析法の欠点はどの程度の類似度のものを同一群として選び出せばよいかについては何の判断の基準も与えてくれないことがある。第219図をみると、No.5とNo.13の間で類似度に大きなギャップがあることは明白である。ここを境に土器を2群に分類することができる。つまり、No.1、2、3、4、5、7、8、10の8点の須恵器に対して、No.6、9の須恵器の胎土は類似していないということもできよう。この



第220図 宝林寺北邊跡出土土器(鎌倉時代)の
Rb-Sr分布図

No.11、12、13の3点は十瓶山窯の陶器に比べて、Rb、Sr量ともやや少ない。さらに第217図のCaの因子をみても、十瓶山窯域には対応し難いとみられる。したがって、No.11は十瓶山窯産とは言い難い。第219図のデンドログラムではNo.11とNo.12の胎土は類似していることを示している。つまり、この2点は同一産地の中世陶器と言えよう。これに対し、No.13は別の胎土であり、別産地の中世陶器とみられるNo.12は考古学的器形観察では、備前系の須恵器と推定されている。ただ、備前焼、龜山焼の基礎データは筆者の手元にはないので対応はできなかった。

第10章　おわりに

2次にわたる確認調査、2年次にわたる全面調査延168日の調査の結果、多くの成果を挙げることが出来た。調査は、太子龍野バイパスの国道2号線との接続点に当たり、交通量の多い2号線と調査対象地が隣り合わせ、騒音・排気ガスにも悩まされながらの調査であったが、地元門前・下沖・井上を中心とした方々の参加を得て、無事調査を終了した。国道2号線という1級の国道沿いで交通量の多い部分での調査で、一触即発の懼れもあったが恙なく終え、盗難などの事件も発生したが、人身事故のなかったことを喜びとした。南側拡幅部分も調査は必要であったが、狭小な面積のため安全面から調査を実施しなかった。確認調査段階から調査了承を得られず、部分的な坪掘り調査となり、2次の確認調査は埋め戻し作業も行った。全面調査に入っても地上の物件の撤去が進まず、2年次にまたがることとなり、調査の手持ち期間も少なからずあった。にもかかわらず、国道2号線渋滞の大問題から太子龍野バイパスの供用開始時期の問題から調査期間に制約を受けた。用地買収の急な変化から年間の調査計画に第1次確認調査と58年度全面調査は組み込まれておらず、特別な体制となった。58年度の県・市教育委員会各1名の調査員による体制はその変則的な調査を代表する事象であろう。しかしながら、常態としては両者による体制の場は珍しくお互い触発され、新しい感覚で調査を担当出来た。

調査は肌寒さを感じるようになった農繁期も終わろうとする中秋の終わりから、田植えを行うための粗耕を行い始める初夏までの7カ月余りを費やした。調査を行った1983年の冬は厳しい冬で、播磨では記録的な大雪にも見舞われ、また春には山崎断層を震源とする大地震も頻発した異常気象の年であった。しかしながら、積雪時以外は大きく作業の妨げにもならず順調に調査を終えることが出来た。地元の方々の参加協力によるもので、農繁期をはずしたことでも幸いした一因であろう。

門前をはじめ周辺地域いわゆる揖保平野は圃場整備（農業基盤整備）が施行されておらず、旧地形を良く残した地域である。分布調査や確認調査の際も起伏の変化を足で感じ、調査区東西とりわけ西側には段差の見られる田が続き旧河道が一目瞭然であった。また、姫路測候所開設以来の大雪は揖保平野を埋め一面の銀世界とし、中臣山を際立たせることになった。古代人がどのように見たかは判然とはしないが、南東から見る限り、飯粒には見えない。しかし、比高差40mの割には目立つ存在で、赤松氏が陣屋を築いた現在給水塔の建っている丘を中心にして莊厳な斜面を我々に見せてくれた。普段家屋が先に目に入る（特に南からは）のが、それが消え、古代の状況を垣間見た思いである。北側対岸の半田山や北東大道・四箇地域からみると二つの丘陵も明らかで、飯粒岡に見える景観であった。また、同様に起伏をも際立たせ旧地形を彷彿としてくれた。

大雨の際も同様のことが言える。水の流れる様子は地形を如実に教えてくれる。また、調査に参加して戴いた地権者の方に「この田は水ハケの良い田で…」と聞かされた田は旧河道や氾濫源で砂礫層が続いていることが明らかとなった。田字が教えてくれる遺跡の在り方とともに、調査準備に本来必要なことを改めて教えられた遺跡であった。これには、地元の方々の参加や地元教育委員会職員とともに調査を行えた成果であろう。今後ともきめ細かい調査の必要性を感じた。揖保平野が旧地形を残していることは、自然環境や歴史事実を考える上に重要な資料を与えてくれているが、太子龍野バイパスの開通や近い将来開通する山陽自動車道龍野東インターチェンジと、それらに伴う都市計画道路の敷設などにより大きく変化することは間違いない事実であろう。その際にもきめ細かい調査を行なは対応する義務があろうと思われる。宝林寺北周辺はバイパスが平面でもあり、遺跡は北側へ広がっていることは確実で、今後予想されるべき課題となろう。以下、調査成果の問題点について考えてみたい。

第1節 遺構の変遷

宝林寺北遺跡は、遺構は奈良時代以降築かれている。地形変遷は、第2章に詳しいが、完新世段丘面が揖保平野の各地に現われ、そこに片吹遺跡・福田片岡遺跡をはじめとして揖保平野の遺跡が立地する。宝林寺北遺跡では、段丘面が形成される以前の縄文時代の土器と思われる小片が中央地区落込み2・土壤33で出土しているが、断定は出来ない。明確な時期は弥生時代末～古墳時代初頭の土器群である。この時期の遺構はピット以外確認出来なかったが、土層観察から周辺地域は旧河道などのあるまだ起伏に富む地形であったようである。それ以降の洪水堆積物により平坦な地形が形成されたようである。古墳時代後期以後の遺物は少量ずつ出土しているが、遺構としては、奈良時代の遺構から認められる。中央地区において奈良時代～平安時代後期の遺構を少數検出しているが、垂直的な差は認められず同一面でしか検出出来なかった。西地区南端のみ集中して遺構が検出されたが、遺構の性格は明らかに出来なかった。大半の遺構は、平安時代末から鎌倉時代の遺構である。この時期は洪水堆積物が減少し、遺構面は安定していたようである。中央地区・東地区は旧中州部分に、西地区は旧河道部分に相当している。鎌倉時代以降、遺跡の規模は急激に縮小していくが、いわゆるヘソ皿を出土したピットがあるように断続的にではあるが、継続していたようである。そして近世になって、鎌倉時代に遺構が広がっていなかった部分も含めて、小規模ながら遺跡が存続している。東地区・中央地区間の全面調査を実施しなかった地域でも少數のピットが検出されている。遺構面としては、ほとんど変化なく、現代に至るまで堆積土も少量である。しかしながら、当遺跡全体としては鎌倉時代以降は基本的には土地利用は生産地（水田・畠）として使用されていたものと思われる。

遺構の切り合い関係は、西地区・東地区では単純であったが、中央地区では複雑で全てを明らかに説明出来ない。特に建物跡については埋土の変化も少なく、不明な点が多い。

西地区では、最初に建物跡がほぼ南北に主軸を持って建てられ、その後中世墓（方形周溝墓）が平面を共有して築かれている。さらに、中世墓周溝を切って墓と考えられる土壙が構築されている。出土遺物から見て、中世墓（方形周溝墓）は12世紀後半の築造で、周溝に埋土が堆積する時間を経て13世紀前半までに他の遺構を現出している。建物跡は遺物が認められないことから時期幅は推定の域を出ないが、12世紀後半の墓の築造から大きく遡ることはないと想われる。西地区では、1世紀足らずの間に生活跡から墓跡へと変化していったものと思われる。それ以後は水田として利用されていたようである。集落跡の広がりは東西は調査した通り30m前後と短い距離で、南北方向の広がりは確認していないが、広面積を占めるとは思われない。建物跡にしても単独に建てられた建物かもしれないが、中央地区の盛行した時期の墓域とも考えられないだろうか。

東地区も遺構の変遷は西地区と同様で生活跡から墓域へと変化している。遺構面の広がりは西地区よりも広大であるが、1遺跡の単位とすれば小規模な集落である。東西南の三方向は遺跡の端部を調査しており、北方向へある程度延びる遺跡であるが、小集落と言えよう。西地区のように大きな遺構の切り合いはない。井戸2基をはじめ生活に伴う遺構のうち、南側に墓が築かれている。井戸2基の間は建物は見られず、北側へ櫛とも関連しているかもしれない建物跡が見られる。井戸・建物跡・櫛に大きな時期差は認められず、12世紀代の遺構と考えられる。井戸2は周辺のピットと切り合い関係があるように思えるが、井戸上屋の柱になる可能性を考えており、同一時期の遺構群と思われる。南側で検出している集石土壙は、それら遺構は遅れて築かれた墓と考えられる。

中央地区では切り合い関係が複雑で、遺構の抽出に困難をきわめた。奈良時代から遺構が存在する可能性はあるが、GH08~10を中心に暗茶褐色土を埋土とする径30cmの大形のピットが平安時代前半の遺構と思われる。建物になるものと思われるが、明確でない。中央地区全体に広がるのではなく、一部に限られている。平安時代末~鎌倉時代に大半の遺構は構築される。西地区・東地区同様建物がまず最初に築かれるが、その前に集落を構えるために広域にわたって整地をしている。整地にあたっては、整地層南端のJ09・10には石組があり、G12を中心にして土師器皿を使った祭祀を行っている。遺跡の東西方向の広がりは把んでおり、52cm前後となる。大局的には、建物から落込み・墓へと移行するが、墓の後に建物土壙も建てられており、複雑である。墓は、集石土壙3が遺構の中央部分にあるが、他は縁辺部に位置している。集石土壙3は須恵器大甕を棺としており、他の墓とはやや異なっている。集石土壙1は井戸は切られているが、遺物から見ると時期差は窺えない。墓と考えられる遺構は、集石土壙1~4と土壙11の5基である。集石土壙3はG10の遺構中央部分にあり、建物4・5の間にあり、重複関係はない。土壙11もE09と遺構集中部に位置するが、建物3の北西横に位置し、切り合い関係はない。平面的に前後関係を決め難いが、墓の方が後出したものと思われる。

重複関係にある代表的な遺構は、(集石土壙1→井戸)(建物2→集石土壙2)(建物2・土壙10→建物1)(建物4→落込み1・2・6、土壙15など)(建物3→落込み1・3)(建物8→屋外炉)である。建物は、建物1が主軸を東に振り新しい時期のもので、建物3も同様に主軸が僅かに異なり時期差かもしれない。また、建物6は埋土が異なりやや新しい時期の可能性がある。新しい段階の建物は他の遺構を切っているが、古いものは多数の遺構に切られている。これら切り合い関係と埋土の違いから見て、建物2・4・5・7・8の建物群が最初の段階で築かれたことが判る。整地層との前後関係は明確ではないが、建物前に施工したと考え方が妥当であろう。建物2・7・8には整地層が及んでいない。これ以降、建物も引き続き存続したものと思われる。切り合い関係にある落込み1・3・6などの性格を明解に説明出来ないが、方形の落込み4・9をはじめ落込み2も竪穴住居跡状の落込みで倉庫跡などの可能性も十分に考えられる。落込み2・4・9は各々離れたところに位置している。短絡的に掘立柱建物跡から落込みの変化を考える場合、集落から貯蔵する倉庫の性格の施設への変化が考えられるかもしれない。土壙15の炭化ムギの貯蔵穴も含めてそのような性格の遺構へと変化した可能性が考えられる。

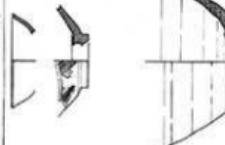
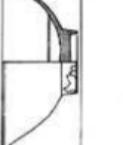
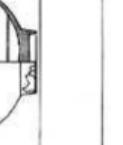
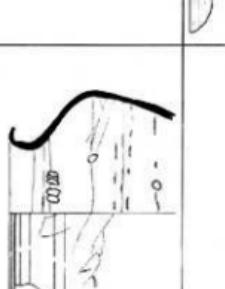
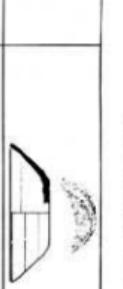
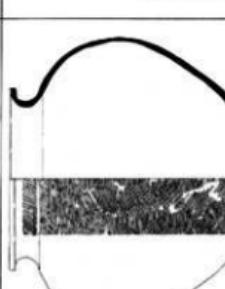
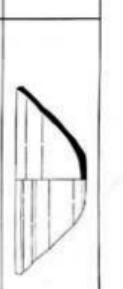
主軸を同じくする2本の溝(溝2・3)は大半の遺構と同時期と考えられるか、ただちに性格を問うことは出来ない。溝2は整地層端部の石組と関連した遺構であり、単純に考えれば石組の排水施設と考えるのが普通であろう。

その後、近世以降になり中央地区遺構の広がっている部分に遺構を拡大して築いている。南西部の宝林寺周辺を中心に遺構数を拡張させていく。全ての遺構について、浦上氏および宝林寺を抜きにしては考えられない遺跡であるが、直接それらと関係する資料は調査によって提起されていない。

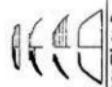
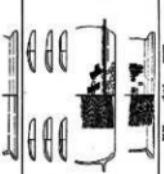
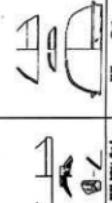
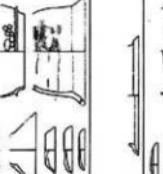
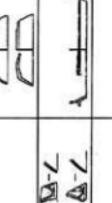
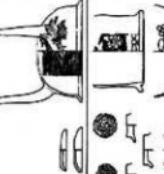
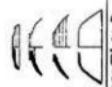
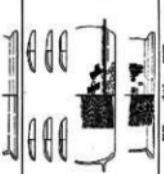
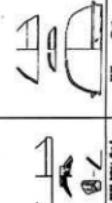
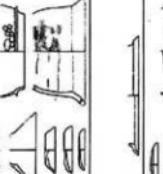
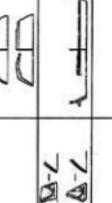
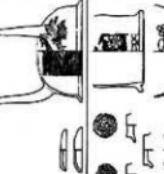
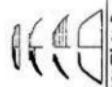
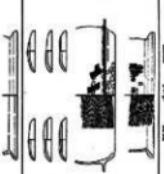
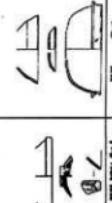
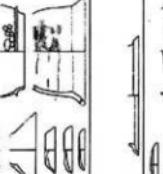
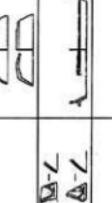
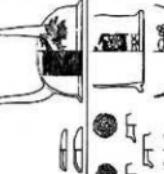
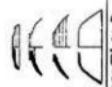
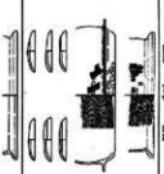
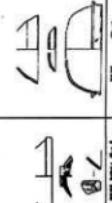
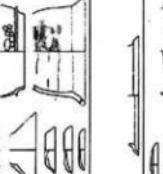
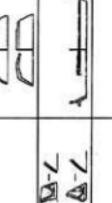
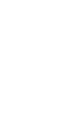
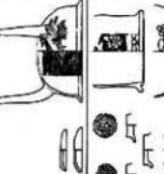
第2節 中世墓(方形周溝墓)について

宝林寺北遺跡で、遺跡を代表する特徴的なものとして西地区中世墓が挙げられる。弥生~古墳時代の方形周溝墓と同種の墓である。方形周溝墓・方形区画墓とも呼ばれているが、現時点では新しい呼称を与える根拠を持たない。形状的には方形周溝墓であるが、時代的な問題を加味すると別名称の方が正しいものと思われ、方形区画墓とするのが妥当かもしれない。ただ、造語する大きな理由を持たないので、本報告では中世墓として報告する。

中世墓は、墓域を画する溝で囲まれた墓で、北辺4.0m、南辺5.0m、高さ5.6mの台形を呈する平面形態で、溝の規模は幅0.8~1.2m、深さ0.6~0.9mを測るU字溝である。溝で囲まれた平坦面の中央や北側に木棺墓が東西方向に長軸を有して築かれている。木棺の痕跡は明瞭に検出出来なかったが、木棺墓であったろうと思われる。棺内遺物として土師器皿1点、白磁碗2点が出土している。遺物は中央や東側でまとまって出土している。白磁碗は端反り口縁と

東播系須恵器	須恵器	土師器	陶磁器
			
			
			
中世墓溝		中世墓主体部	

第221図 中世墓出土土器

陶器系須恵器	その他の須恵器	土師器	瓦器	陶磁器	漆器 火薙土器	外燃一 火薙土器	内燃二 火薙土器	内燃三 火薙土器	内燃十 火薙土器	内燃十 火薙土器	内燃十 火薙土器
											
											
											
											

第222 中央地区遺跡出土土器共存圖

割花文碗の2点が共伴している。土師器皿は単独で出土した場合、古相を示す遺物と考えるなら、古く遡ることはなく、大半の造構に近い12世紀中葉～後半の時期を考えている。周溝内底面からは、魚住焼甕、瓷器系須恵器、產地不明須恵器甕、褐釉陶器三耳壺底部が出土しており、将来各地産の遺物の共伴関係を考える上に貴重な資料と考えられる。

木棺直葬を主体部とする方形周溝を有する墓は、本来弥生時代～古墳時代の葬制であるが、宝林寺北遺跡をはじめ幾つかの遺跡で中世に下る時期の造構が確認されている。

京都大学構内京大理学部遺跡S X 1は方形周溝の1辺から中央にかけて大きな土壙が築かれており火葬塚と考えられている。主体部は異なるものの四方に溝を巡らす点は共通している。三重県斎宮跡では、^{〔出註〕} 主体部は検出されていないが、円形・方形に周溝を巡らした造構が3基以上検出されている。平安時代末の時期で主体部が残っていないことは弥生時代の周溝墓にも多く見られることである。

最も似ている例は、同じ龍野市畠田町の横田遺跡で検出された中世墓である。方形に溝を巡らせ、主体部は焼土壙である。溝の規模は小さい点と火葬墓である点が異なるが、宝林寺北遺跡例に最も類似する造構である。

造構の形状・性格とともに弥生時代の周溝墓に酷似している。ただ、その間隙を埋める資料が見られない現状では、同じ系譜とは当然ながら考えられない。しかし、溝を掘ること（有すること）は文化の基本でもあり、思想的にも墓域を画する意義は変化ないものと思われる。遺跡全体で墓を10基以上調査したが、全て1m余りの規模である。1基のみ約5m四方の墓域を有した意味は大きいものと思われる。

第3節 遺構出土遺物の共伴関係

遺構出土遺物のなかには、複数の地域の製品が共伴している例が幾つかある。兵庫県下で中世の遺物を考える時、相生窯跡群・魚住窯跡群・神出窯跡群などの須恵器生産遺跡の編年から考えるのが通例となっている。生産地の編年では、一遺跡（窯跡群）の時期観は与えることが可能である。しかし、相互の関係を考えるには、消費地の資料が有効である。代表的な例は、古代～中世の最大消費地である平安京（京都）出土資料の検討結果がある。播磨でも姫路市本町遺跡や龍野市福井田片岡遺跡などは消費地の代表遺跡である。また、横穴式石室再利用面から出土した龍子向イ山1号墳例は、魚住窯跡・相生窯跡の製品の碗が伴出している。複数の生産地の製品の年代を考究する上に消費地出土品は意味があり、宝林寺北遺跡でも共伴関係のある造構が認められ、検討価値があると思われる。

共伴関係のある造構は、前節の中世墓出土例以外に落込み1・2・5、屋外炉、土壙1・36・40がある。また、土師器の一括出土品としては土壙42が挙げられる。土壙42例は古い段階の代表例になろうかと思われる。個々の共伴関係は第222図の通りである。東播系須恵器と西播系

須恵器との伴出関係が、落込み1、土壌1で見られ、土壌40では束縛系須恵器と備前系須恵器が出土している。魚住窯跡の編年觀からは、落込み1、土壌1と土壌40は時期差がない。が、伴出している須恵器は西播系から備前系へと変化しており、本来時期差があるはずである。消費地における消費方法の問題もあるが、生産地と消費地の検討が今後とも必要であることが窺われる。

上述したように多くの問題点を含んだ宝林寺北遺跡であるが、本報告により如実に性格を表わせなかつたことをお詫びしたい。行政の調査として担当することになり調査を実施したのであるが、調査担当者ゆえに明らかに成し得なかつたのではないかと危惧する。

前記したように、本来細かい対応が行政としても望まれるものであるが、現実的には諸般の事情で許されないのが現状である。遺跡の評価・歴史的意義を今後検討・考察して戴けるよう望むものである。

(注)

- (1) 岡田保良・吉野治雄「第3章京大理学部遺跡B E 29区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報—昭和53年度—』1979.3 京都大学埋蔵文化財研究センター。
- (2) 三重県教育委員会「斎王宮址—昭和52年度発掘調査概要—」1978。
- (3) 昭和60年度、兵庫県教育委員会が調査を実施した。種定淳介・平田博幸両氏教示。
また、隣接する龍野市龍野町・大町遺跡でも同種の遺構が検出されている。



第223図 宝林寺と宝林寺北遺跡